

---

# とある右方の異世界目録

零崎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある右方の異世界目録

### 【著者名】

N4821U

### 【作者名】 零崎

### 【あらすじ】

テンプレな展開でネギまの世界へ。これは魔術を使う転生者のモノガタリ。イレギュラーの存在で世界はどう変わるのか。

注意 この物語は『チート』『最強』等の要素を含んでおります。読む際にはお気を付けください。

## プロローグ（前書き）

前作「聖なる右を持つ者」をお読みの方はお久しぶりです。  
初めての方は始めてまして、零崎です。

長い間お待たせしましたが、取りあえず投稿です。

## プロローグ

事故死。それが俺の死亡理由のハズだ

18年とは短いようで長い人生だった、まさか車にひかれて死ぬとは思っていなかつた

普通の高校に通う一介の高校生。もうすぐ卒業を控えた身での事故

成績、だつていい方だつたし、友人関係もいい方だつた

それ以外は端的に言つて普遍だつたが

事故と言つても、誰かを庇つた訳でも無い。唯、酔つ払いが車を暴走させて俺はそれに巻き込まれた

事故の瞬間、「ああ、コレで俺の人生が終わるのか」と、そう悟つた

次の瞬間には意識を手放していた

すべてが真っ白な部屋、そこに俺はいた

「……知らない天井だ」

田覚めてすぐに、お決まりなセリフを俺は言つ

俺は事故つて死んだはずなんだがな

「……ずいぶんと余裕なんですね」

「うわっ……」

俺の後ろで気配もなくいきなり話しかけてきた人がいた  
すぐに後ろを振り向くと、同年代くらいの女の子がいた  
「あ、この姿は仕様なので気にしないでください。こいつのほうが  
話しやすいでしょう?」

その言葉に疑問を抱く

「仕様?」

「あ、伝えるの忘れてましたけど、あなた死にましたよ。それと、  
私は神ですの。」

「は?」

神（自称）は淡々と言い放つ

「自称ではありませんが、まあその辺は置いときましょう  
別に大したことでもないので」

「ちょっと待て、状況を整理させてくれ」

「構いませんよ、どうせ時間はいくらでもあるわけですから」

約一時間後

……ふう、大分落ち着いた

しかし何故こんなことに？ よくあるトングブレ的展開か？

「まあ、簡単に言つとそうになりますね」

……心読めるの？

「はい、神ですから」

……まあ、その辺はいいや。

「で、なんでその神様がここにいるの？」

「单刀直入に言つますが、あなたは選ばれたのですー。」

「世界を救う勇者とかにじや無いよな」

「それを望むならそういうあげてもいいですけど」

「全力で遠慮する」

「一か話が脱線し過ぎじゃね？」

「あなたが脱線させたんでしょう。私も乗りましたけど。  
それはともかく、あなたは事故で死に、このまま輪廻に組み込まれ  
る運命でした。ですが、私が偶然にもあなたを選び、転生させてあ  
げる事になりました」

「テンプレ」

「自虐乙ですね」

切り返されてしまった

「では、ネギまの世界へ行つて貰うので、いくつか能力を与えたい  
と思います。では、欲しい能力を言つてください」

能力、ね

死亡フラグ満載のネギまなら戦闘系は必須じゃないか

「まず最初、禁書のファイアンマが使う聖なる右。もちろん完全状態  
で無制限」

「チートですね、大丈夫ですよ」

正直投影なんかよりずっと強いと思うんだがな、右手を振るだけで  
勝てるとかチートも甚だしいし。むしろ今まで出なかつたのがすご

いと思つ

本物の使い手が俺様で小物臭ハンパねえ！ みたいな感じだつたらどううか。俺は好きだつたが

「次はインテックスの十万三千冊の魔導書の知識」

「おつけーです。頭の中に記録をしておきますので。ついでに他の魔術の知識を全部入れちゃいましょう」

なんか勝手に魔改造されてんだけビ

「忘れないように完全記憶能力まで付けておきました。ちゃんと脳が壊れないようにしておきますね」

なんかおかしな事になつとるし

「次は聖人並みの身体能力で、弱点なしにして。」

「はい、わかりました。ついでに不老にしましたので。まあ、大体こんなものですか？」

「サンキュー神様、オッケーだ」

「送る時間軸は原作のおよそ1000年前です。では、次の人生をお楽しみください」

次の瞬間、足元に穴があき、落ちた

叫ぼうとしても声が出無かつた。焦るが、冷静になろうとして気付

いた

落ちているハズなのに浮遊感が無い

浮遊感の無い落下をしながら、俺は意識が薄れ、数秒経つたくらいで意識を無くした

「……精々私を楽しませてくださいね」

その言葉は、俺に届く事は無かった

## プロローグ（後書き）

短いですが、プロローグです。

近いうちに一話も投稿します。

今度は作り直さなくていいよつて頑張りますので、よろしくお願いします。

## 第一話 錦墨屋（あべのせこねこ）（漫書セイ）

サブタイはアニメ雑書を意識してやつてみた。  
つか使こられたる波はしないですばざね。

## 第一話 錫陽館（あべのせいやく）

唐突に目が覚める

落ちていた時から浮遊感は無かつたが、今は背中に地面の感触を感じる

軽く目を開けると、暗い森が目に入った

倦怠感などは無く、体の調子は良好と言えるだろ？  
体の感覺を確かめながら立ち上がり、背中の土を払つ  
まずは現状確認だな

自分の格好を見てみる

上も下も赤の修道服で、髪も赤い。鏡が無いから顔は分からん  
体つきはあまり鍛えているようには見えないが、筋肉は意外とある。いわゆる細マツチヨという奴か

取りあえず見晴らしのいい場所を探し、見渡す。すると、近くにあるであらう町から火の手が上がっているのが見える

「……ええ～～～？」

いきなり何？ 何なのこの状況？

でも取りあえず首を突っ込んで見る事にした

聖なる右も使えるみたいだから、俺に敵は無い

「不味いな…… オイ、 神鳴流の到着はまだか！！」

「まだです！ 今しばらくかかるかと…」

クッ、 まさか土蜘蛛が現れるとはな

「オイオイ、 もう少し骨のある奴はいねえのかい？ 晴明の野郎とかよお」

土蜘蛛はあくびをしながらこちらを見る

土蜘蛛の周りには、 戦つて死んだ仲間の陰陽師達の死体がある

奴が来て戦い、 爆発の術も多少つかつた所為で周りに火の手が上がり、 一部は燃え崩れている

行く手を阻む為に壁を張れば、周りに手を伸ばしてガラガラと壁を突き崩していく

奴は急にきたと思えば、「暇なんだよ、相手しちゃ」と襲ってきた土蜘蛛は巨体を俊敏に動かして警護についていた陰陽師を瞬く間に倒してしまった

何故急に襲つてきたのか、理由をえ分からない

いや、もとより『理由』なんてモノを持つてる相手でも無い  
だが、ここで終わるわけにはいかん

応援の神鳴流、もしくは晴明様の到着まで持ちこたえなくては……

「困つているようだな。手助けが必要か?」

その声に振り向く

其処には、見たことも無い服を着ている男が立っていた

「貴様……何者だ!!」

「そんな悠長な事言つてる暇があるのか? アレ土蜘蛛だろ。下手したら皆殺しにされるだ?」

そんな事は分かつていて

だから応援を待つていいのだ

アレ  
土蜘蛛はもはや災害とさえ呼べる妖怪だ。我々一介の陰陽術師に  
どう出来る存在では無い

だが、晴明様さえ来ればこんな奴など……

「あん？ 何だお前？ 見た事ねえモン着てんな」

唐突だが、俺はファイアンマと名乗る事にした

燃える赤の象徴の聖なる右を使つなら『右方のファイアンマ』を名  
乗れるだろうしな

右方を意味する『ラト・ディストロ』も加えて『ラト・ディスト  
ロ・ファイアンマ』とでも名乗ろつか

コレだと奴前がラトにならそつだが、ファイアンマと呼んで欲しい

元の名前？ 忘れた。と言つより消されたと言つべきかな

さて、現実逃避をやめようか

「誰だつて聞いてんだろ？ 答えねえならさつとじぶつ殺すぞ？」

土蜘蛛

見た感じ般若の面の様な顔をした四本の腕を持つ大男だ

確かに、こいつは強さのあまり天災にさえ例えられたと言われるな  
強さは周りを見れば分かる。陰陽師の死体が転がり、周りの建物  
に火が移り、行く手を阻もうとした壁は容赦なく突き崩される

だが、俺からすれば最初からおもしろい相手が来た、と思える。  
不謹慎だがな

「俺様はファイアンマだ。覚えたか？」

アレ？ 今自分の事『俺様』って言わなかつた？

勝手に変換されてんだけど

「ふい、ふいあ？ 何だその分かりずれえ名前はよ」

ま、横文字には慣れて無いんだろう

「まあいいや。で？ オメエ強いのかい？」

「ああ、強いぜ？」

土蜘蛛は腰を上げ、ゆつくつと体をかがめた

「ならじぐせえ……オラア……」

轟！…と音を立てながら突進していく

俺は唯、右手を振るのみ

土蜘蛛は轟音と共に吹き飛ばされ、瓦礫に埋もれた

「な、何だ……？　それは……」

後ろに居た陰陽師達が俺の右肩から生えてる（？）聖なる右を見て驚いている

まあ普通驚くよね

俺も釣られて第三の腕を見る

……アレホ？

何で空中分解しかけてんの？

神上状態なら空中分解なんてする筈が……

『あ、すいません。まだ体が神の右席みたいな状態じゃ無いのと体に馴染んで無いので、使うには制限つきますよ』

なるほど、肉体が人間だから完全には扱えない？　神の右席は

体の構造が人間より天使に近いらしいし、その辺も関係あるのだろう  
馴染ませるには使うのが一番だらうし、戦つてのはうつてつけ  
じゃないか

早めに体を天使に近づける魔術を構築しないとな

それでも十万三千冊の魔道書の知識のおかげで完全には空中分解  
しないみたいだし、問題は無いだろう

そんな事を考えていると、ガラガラッと瓦礫をかき分け、土蜘蛛  
が現れた

「……やるじゃあねえか。お前の名前は覚えておきてえな。もっかい  
い言つてくれや」

「フィアンマだ。しつかり覚えろ」

「よーしよし、しつかり覚えといてやるよ」

その言葉と共に腰を屈め、力を溜める土蜘蛛

「次は全力だ」

またも轟！－と音を鳴らし、爆風を巻き起こしながら突進して  
くる。

その速度は人間が近くするには早すぎる速度。いつなれば弾丸の  
ような速さ

俺はそれに反応は出来なかつた。否、反応する必要が無かつたのだ

閃光と共に聖なる右は土蜘蛛を吹き飛ばす

建物を壊しながら貫通し、数百メートルもの距離を飛ばされる

土蜘蛛は瓦礫に埋もれ、動かない

だが、数秒後にガラガラッと音を立てながら瓦礫をかき分け、立ち上がつた

吹き飛んだ土蜘蛛は右側の腕を一本無くしていた

「……ハ、ハハハハハハ！！ やるじゃねえかよ！」

うわあ、  
バトルマニア  
戦闘狂だな

だが、力を使うには中々いい。頑丈だしな

しかし、土蜘蛛も腕が無いのに気付いたらしく

「チツ、腕がコレじゃ晴明の野郎に滅されちまつ。しょーがねえ。  
今日は帰るか。次も楽しみにしてるぜ。ふいあんま」

と言つて何処かへ行つた

あの後、俺は土蜘蛛を倒す為に応援として来た安倍晴明と神鳴流の剣士達と会った

剣士達は警戒しまくつたが、生き残った陰陽師が俺の事を話してくれたらしく、結構簡単に警戒を解いてくれた

一応まだ信用はして無いみたいだがな

なんにせよ、土蜘蛛を追い払ったという事で礼がされた

礼と言つても、酒の席に誘われただけなのだが

その酒の席で俺と晴明が意気投合し、陰陽術を教えてくれる事になつた

だが、代わりに

「お主のその奇妙な腕を見せて貰えんかの？」

と頼まれた。晴明は俺の聖なる右に興味津津らしい

「構わんよ。晴明の頼みだからな

「それはありがたいの？」

ジジイロ調だが気にしない

「この時代の貴族ってこんな喋り方なのか。どうでもいいことだが  
「ほう、コレが土蜘蛛を倒した腕か。これはまた奇妙なものじゃの  
う」

そりや俺以外にこれを持つてる奴なんていないだろ？

そもそもこの世界に魔術つて存在するんだろうか

存在しないなら俺が少しずつ広めていくかね

まず手始めに陰陽術に魔術を加えて行こう

俺が晴明に陰陽術を習い始めて一年が経った

え？ 時間が飛んだって？ 気に済んなよ

いわゆるキンクリつて奴だ

まず手始めに、『倉庫用』術式を作ったりした

影を使ったものだ。めっちゃ便利

ちなみに俺は寿命じゃ死ないと晴明にだけ教えた

『ぜひその不老になつた方法を教えてくれ』と頼まれたが、断つた

不老不死を目指すのは人の性さがかな

俺はあの神に勝手にされただけだが

「何を現実逃避しておるんじゃ？」

「気にするな。やり過ぎたかなとは思つてゐが後悔は無い」

陰陽術に魔術を加える

陰陽術の知識ももちろんあつたから、この世界の陰陽術に対して改良に改良を加えて行つた

道教のタオは人に『氣』を当てる術式なのに対し、これを土地や世界に応用したのが『風水』

科学的に言えばガイア論で、世界を一個の生命とした医学のよくな物だ

他には式紙を使った術なんかと、いろいろあった

陰陽術はそれら全ての総称と言つたところだらう

最も、魔力の精製方法からして違うから少し手間取つたがな

おかげで陰陽術の中でもいくつか派閥が分かれた

ちなみに宗教防壁についてだが、アレは別に十字教じゃ無くてもいい

別に十字教にこだわる必要も無いし、日本では仏教が主流だったし。他にも宗教は幾らでもあるしな

そんなわけでこの世界における宗教防壁の定義は判明

しかし、晴明は流石天才陰陽師と言われるだけあるね

「まあかこここまでやるとは……」

京都にある朝廷に使っている公家だから、守りの為の術式をなんたらかんたらと言い出したので、風水を使った水路などで術式を作る為の知識を教えたらあつという間に習得して強力な防御結界を築きやがった

コレ多分生半可な攻撃じや傷一つつかんだろつなあ

試しにローン文字での火をぶつけてみたら、ある一定ラインから先に攻撃が通らなかつた

一応清明も呪術組織の一員だし、他の奴らも手伝つては居るのだが、何せレベルが違う

清明が作る為の図面を作成し、部下がソレの通りに寸分狂わず作つた

「お主のおかげだ。ソレで朝廷に頼む事が出来た。何か礼でもしたいのじゃが」

「いやいや、これはお前の才能さ。礼というなら、刀を貰えないか？」

「刀、とな？ お主剣士じや無かるつ。刀がいるのか？」

「剣士じや無くても日本の刀は価値が高いからな」

例を上げるなら天下五剣と言われた童子切じゅうしきりつ、鬼丸おにまる、三日月宗近みかづきむね、大典太おおてんた、数珠丸じゅずまる辺りだらう

名高い妖怪を切つたり、將軍が持つていたり、美しいと認められたりとレベルの高いものは相当だ

出来れば一から作りたい。最初から魔術を使う事を前提として使う刀を使いたいしな

「ふむ、ならば名高き刀工とうこうを教えよ。わしからの頼みとあれば断らん筈はずじゃ」

「刀工とうこうか、ありがたいな」

「何、それで礼になるというのなら」ちもありがたいからの

そんなわけでやつてきました

やすつな  
安綱と呼ばれる刀工は伯耆国大原（今の鳥取県の辺り）に居るら  
しく、歩いて移動した

移動方法？ 平地なら一瞬で移動できるけど、山とか間にあるか  
ら一日近くかかった

「お前が安綱か？」

「そうだが、あんた誰だ？」

「安倍晴明からこれを預かっている」

そう言って手紙を出す

安綱はそれを読んだ後、俺を見て言った

「……それで、刀を打つて欲しいのか？」

「ああ、それと出来れば俺様も刀を打つのに参加したい」

それを言った途端激昂した

「ふざけてんのかー？ 僕の仕事に手を出す奴ならいつたねえぞ……」

「手を出す訳じゃない。特殊な仕掛けをするだけさ」

「仕掛けだと？ ビツキのつまつだ」

「説明が少々面倒だが、時間はある。ゆっくり話してやる」

「……なるほど、その魔術つてのを使うのに都合のいい刀が欲しい  
つて訳だ」

「そうだ。だから刀を打つ」と血体には手を出さん。が、工房には  
少々細工をさせて貰う

とは言つても、道具類に仕込む訳でも無く、打つ前の刀に魔力を  
注ぎ込み、打つている途中も少し魔力を注ぎ込むだけだ

俺が打つても出来のいい刀が打てる筈も無いので、工房に細工し  
て安綱が打つたびに魔力が刀に流れ込むようにする

それを一本程作つて貰うつもりだ

俺が使う機会があるかは分からんが、念のために持つておくのも  
悪くはないだろ？

誰かに持たせてもいい訳だしな

一年

安綱は一年掛けて一本の刀を打つてくれた

出来は上々、魔術に使うことも出来るだろう

「ありがたいな、こんな名刀を打つてくれるとは」

「やるからには手を抜かない性質でね」

一年かけて作ったとはいえ、工房は俺に細工され、いつも通りとは言えない中打つたんだ。疲労は相当なものだろう

それでこの出来だからな、驚嘆するよ

何せ、鉄を簡単に斬つたからな

礼に魔術での刀の作り方を教え、帰る事にした

コレでまた魔術用の刀が増える事に……なるかなあ

更に数年

魔術も相當使ひこなせるよつになつたから、世界を回つてみよう  
と思つ

ついでに言つと、陰陽術のほかに鋼糸の技術を練習した

単体で使えるほど慣れてはいないが、術式を構築するのに役立つ

ちなみにこの世界、鋼糸はまだ無いので自分で作った

何故こんなものが作れたかといふと、あの神の所為

アフターケア良過ぎないか？ 便利でかなり助かってるけどさ。

いろいろ知識無駄に入れ過ぎだろ

閑話休題

さて、取りあえず現実逃避をやめて現実を見ようか

「お？ もういいのか？」

何故土蜘蛛がいるのか。何故なら最初に戦ったときに俺の事を気  
にいつたらしい

また戦いたいとやつて來た。迷惑過ぎるだろ「トイシ

結局また叩きつぶし、どつかに行つた。追わないよ、面倒な事に  
なりそุดから

まあ、またいつか会ひ事になりそうだけどな。……余計なフラグ  
建てたかな

俺は世界に魔術を広めていくつもりだ

今世界がどうなつてこるか自分の目で確かめる必要がある

いくつか組織があるなら利用したいといふなんだがな。多分まだ  
勢力としての力は無いだろう

「寂しくなるの?」

「まあ、お前が生きてる間にほもつ念えないかもな」

「わうじゅの、もし命つとしても子孫どじゅるうな

そして俺は日本を出て、コーラシア大陸へと渡つた

## 第一話 隕陽館（あべのせこぬこ）（後書き）

晴明との出会い。陰陽術が魔術寄りに……

少しづつ原作がずれて行く。大丈夫かなあ……

名前の『ラト・ディストロ』ですが、インフル様の提案です。  
ありがとうございました。

感想は常時募集中です。よろしくお願いします。

## 第一話 霊女（ジャノメ＝タルク）（前書き）

今回説明、というか地の文めし、です。

## 第一話 聖女（ジャンヌ・ダルク）

1054年 ギリシア・ローマの両教会は完全に分裂したとされる  
だが、偶々近くにいた俺が間に介入し、代表者どうして話し合いを  
させ代わりとして魔術の情報を提供したところ、俺をトップに一つ  
に纏まつた

魔術の情報を簡単に渡していくのかって？ 問題無い

この時代ヨーロッパには魔術は既にあるらしく、原作の段階で魔術  
が無いのは魔術の普及率に負けたからだと予想する

つまり、魔法に負けない程度魔術を知る人物がいればいいわけだ

それに俺はこの時代でヒントを与える程度しかやっていない

……最も、それが的確過ぎると言われ、分裂を止めた事もあって  
あれよあれよと言う間にトップに上り詰めてしまったのだが

面倒事はしない主義なので、誰かを代理にして十字教を普及させる  
為と理由を付け、世界を回ることにした

とかかそれが最初の目的だったんだがな

神父というのは信用されやすいし、教会のある町や村では歓迎  
された

俺が年を取らないのを不審がる人間も居ない

意外と氣付かれないものだよ。最も、神父という立場と数カ月おきに移動しているからだらうけどな

世界中を見て回ると、いつの間にか百年ほど経っていた

移動は徒步、一つの町や村に数カ月単位で留まるから時間が経つのは速い

もちろん魔術の修行は欠かさなかつた。そして、『原罪』を薄め、肉体を天使に近づける事にも成功した

これで聖なる右の力を十全に使えるようになつた訳だ。『知恵の実』をある程度残しているから普通の魔術も使えるし

暇だなー、特にやることも無い

十字教の魔術組織には日々接触するつもりだ。いろいろやる事があるからな

だがしかし、今に限つては暇だホントに

そんな感じで数百年

何十年か魔法世界にも行き、教会をたてたり十字教信者を増やしたり、魔術師を増やしたりして時間をつぶした

トレジャーハンターとしていろんなモノを集めて売ったり、賞金首を捕えて賞金を貰つたりして金を相当稼いだ

金は腐るほどある

まあそれは置いておくとしてだ

今現在、魔法使いと魔術師は仲が悪い

理由としては、元老院は魔術師は思い通りにならないから利用しづらい為に批判的

『マギスティル・マギ立派な魔法使い』を目指す魔法使いには何故その力を世界、他人

の為に使わないと魔術師に対して批判的

もちろんそういう事を考える魔術師も居ない訳じゃない。元が宗教の信者だし、貧しい人を救うという考え方もある奴もいる

だが、元々魔術師というのはたった一つの叶えたい想い、願いのために魔術を学び、人生を投げ打つて生きている者たちだ

多数の魔術師からすれば『え？ 何で態々自分の目的以外の為にそんなことしなくちゃいけないの』という考え方だから、余計に関係が悪い

多数とは言つてもその数は魔法使いからすれば極少ないから、対抗する事も無いけど

MM連合とは犬猿の仲といつても過言ではないが、魔術師はその辺に関してはどうでもよく考へていてる

そして、一番の理由は魔法使いは必死にその存在を秘匿しようとするのに対し、魔術師は魔術を公言しているからだ

まあ、多少の秘匿意識はあるものの、必死になつてまでやる事ではないと認識している

戦術的価値がある以上、魔術の詳細な技術は隠しているものの、魔術そのものは全く隠す気が無い

魔法使いからしてみれば、記憶を消したりと必死に秘匿しているのに何を公言してんのだバカ、といった感じだろう

帝国とは中々良好な関係を築いている

帝国領内に教会をいくつか作り、魔術師も多数いる。

魔術組織もいくつか出来て、魔術師の旧世界においての影響は魔法使いよりずっとある。本当にいくつかという少ない数だけだ

俺はそのほとんどのトップと知り合いだ。おかげで横のつながりが半端じや無い

魔術師は基本的に集団行動を嫌う人間が多い。だから、組織に入っている魔術師は少ない

流れの魔術師の方も結構な数がいる

旧世界でとある魔女に会つて仲良くなつたりしたが、それはまた別の話だ

ちなみに倉庫は食料を入れても腐らなくなつた。微妙過ぎるレベルアップである

そして、今は旧世界に居る

フランスのある村

「神父様！！ 大変です！ ジャンヌがコンピエーニュの戦いで捕虜となり、宗教裁判で異端者とされたそうです…！」

金髪の青年がドアを開け、息を切らしながら報告する

手には恐らくジャンヌの死刑宣告の書かれた紙であらうものを握りしめ、息を整えながら俺へと近づく

「そうか……」

もつそんな時期か、時が経つのは早いものだな

「そつかつて、神父様！ 彼女は神の声を聞く事が出来た聖人ですよ！？ 放つておくつもりですか！？」

「そんな訳が無からう。だが、正面から行つてもまともに取り合つ

てくれんだろうな

「なら、どうするつもりですか？」

「どうするも二つあるも、生き残れるかどうかは神のみぞ知るというモノだよ」

「……ならば、我々『オルレアン騎士団』はジャンヌを助ける為に動きますよ」

『オルレアン騎士団』

フランス最大の魔術結社であり、ジャンヌ＝ダルクの人柄に惹かれ、公式の戦力としてではなく陰ながら彼女の歩みを支える為に集まつた有志によって結成された組織

確かにこの組織が動けばジャンヌを助ける事が出来るだろうな

まあ、日にちが分かり、それまでに戦力を整えられれば、の話だが

「好きにするといい。彼女が本当に聖人なら、処刑されることなど無い」

その言葉を言った後、男は教会の扉を乱暴に開けて出て行つた

「……さて、俺様も動くとしようかね」

フランス、ジャンヌの囚われている牢獄

「出で、時間だ」

屈強な肉体の男は男装している女性を連れ、歩きだす

この女性こそ、後に『ダルクの信託』と呼ばれる神の声を聞いたとされるジャンヌ・ダルクだ

ジャンヌはルーアン市内のヴィエ・マルシェ広場へと連れられ、十字架に磔にされる

「あの、最後に十字架を頂けませんか?」

ジャンヌは近くに居た兵士に頼む

兵士は燃やす為の藁を使って十字架を作り、渡した

「最後では無い、君はまだ生きるべきだ」

「え……?」

兵士はそれだけ言い残し、その場を後にした

兵士は赤髪をセミロングにしていたが、帽子をかぶっていた為顔は見えなかつた

そして、教会の神父により火がつけられ、パチパチッと音を立てて燃え始める

火は瞬く間に強くなり、あつという間にジャンヌを包み込んだ

(主よ、今あなたの元へ……)

ジャンヌは十字架を持ち、そう思いながら目を瞑る

だが、死なかつた

(熱く、無い……?)

業火の中に居る。それだけで窒息してもおかしくは無い

だが、事実として窒息する事は無く、炎によつて燃える事も無かつた

そう、まるで炎が殺す事を嫌がつているかのように

数分後、火は突如として消え去つた

比喩では無く、実際に突然消えたのだ

当然、其処に居た軍の兵士も神父も民達も困惑する

「あの女だ！ あの女が悪魔の力を使つたんだ！」

誰かがそう叫ぶ

その叫びに連鎖し、次々と罵倒の言葉がジャンヌへと浴びせかけられる

「静まれ」

決して大きくて無い声

だが、その声は何物より響き渡った

「わが名は天使長ミカエル。神の命において、この娘を殺す事は許さぬ」

背中に翼を持ち、その右手には光り輝く剣が握られている

その姿は神々しく、天使という言葉にも偽りが無いように聞こえた

兵士たちは直ぐにジャンヌを磔から離し、ミカエルの方を向く

「彼女は、本当に神の命を?……」

「我が言葉に偽りがあると? 神からの命令は私が『』えた。あの娘を殺す事は私を敵に回す事と同義と思え」

「ハツ!」

兵士は頭を下げ、直ぐに立ち去った

そしてミカエルは翼をはためかせ、上空へと飛びあがり、ある程度

の高度で姿を消した

文字通り、消えたのだ

### ジャンヌの処刑の一週間後

バーン！ と音を立てて教会の扉が開かれた

開けた扉から青年が歩いてくる

「神父様！ ジャンヌの前に天使が現れたそうですよー！」

やつぱり直ぐに伝わっているな

「ああ、大天使ミカエルが現れたらしいな

「やはり彼女は選ばれた存在なんですよ！」

「それで、そのジャンヌはどうしたんだ？」

「ああ、今教会の前に居ますよ」

青年の後ろについて行き、教会の外に出ると、其処にジャンヌがいた

「はじめまして、ジャンヌ・ダルク。俺様はフィアンマだ」

「はじめまして、フィアンマ。『オルレアン騎士団』の青年があなたは信用できると言つていきましたので、ぜひ会いたいと思つていました」

ジャンヌはまだ騎士の格好をしていたが、それを気にする事もない  
「それは光榮だ。『神の声』を聞いたとされる聖女に其処まで期待  
されるとは」

「そんな事はありません。私自身は何も力を持つていませんから」

「そんな事は無い。神の声を聞いたといつ事は誇つてもいいのだ」

手振り身振りで大袈裟に言つ。本当にすごい事だからな  
それをしていると、ジャンヌは少し考えるよつた顔を見せ、一つの  
疑問をぶつけてきた

「……やはり、あなたが私を救つてくれたのですか?」

「……何故、そう思った?」

「雰囲気とか、ですかね。後は、私が聞いた天使の声はもつと別  
モノでしたし。『あの兵士』の声とも似ていますから」

「フフ、やはり聖女には敵わん」

俺は静かに笑い、ジャンヌを見る

「やはり、あなたは魔術師ですね。私を救ってくれた事にはお礼を言います。出来る事なら、何かお礼を……」

「礼をとこうのなら、『オルレアン騎士団』と協力関係になりたい」

「協力関係、ですか？」

「俺様も組織をいくつか従えていてね。戦力としても歓迎するし、フランス政府と繋がりがあるなら尚更だ」

「ですが、私は既にフランスから見離されたようなものです。繋がりなど……」

「違うな、見離されてなどいない

天使が直に目の前に現れて救つた。この時代において、それだけでジャンヌの価値は必然的に上がり、フランス政府も無視できなくなる。

天使が現れるという事は魔術師にとって重要な意味を持つ。これは偽の情報だが、映像機器の無いこの時代にそれを証明する方法など無いに等しい

もちろんフランスに他の魔術結社は存在しているが、最も巨大で力を持つのは『オルレアン騎士団』だ

国が戦争で疲弊した今、自国の最大の魔術結社と戦えばただじやす

まない

更に下手をすれば天使と繋がりを持つ貴重な聖女を殺していたかも  
しない、それは天使を研究する魔術師にとって宣戦布告ともとれる  
のだ。

それはフランス政府と他国にある多数の魔術結社との戦争へと繋が  
る。百年戦争で疲弊したフランス政府がどこぞの多数の魔術結社と  
戦えば確實と言つていいほどに国が倒れるだろう。

だが、フランス政府のやつた事をジャンヌが許し、魔術結社を宥め  
るという役をすれば、戦争は避けられる可能性がある

宥める役は形式上はジャンヌがやる必要があるが、裏で俺が手を回  
せば問題ない

フランス政府にとつても得になるし、ジャンヌは汚名を晴らす事が  
出来るチャンスだ

俺もフランス政府と繋がりを持つ事が出来、尚且つフランスと協力  
関係にある他国とも関係を作れる

のちの百年戦争と呼ばれるイギリスとフランスの戦争だが、イギリ  
スのカーテナとフランスのデュランダルの影響もあり、魔術師も多  
数投入された

もちろん中枢とまではいかないが、イギリスにもそれなりの地位に  
魔術師を潜り込ませる事が出来た

イギリスの王室には貸しが出来たし、フランスの王室にも貸しが出

来た

俺としては万々歳と言つたところだらう

俺の思惑はともかく、ジャンヌにそれを話したら、結構簡単に乗つてくれた

その代わり、困つたらこいつでも手を貸すという事になつたが、そんな事でいいのかと思つてしまつた

俺と協力関係になるとこいつ事は俺が手を貸すのは当然だらうまあ、別に俺自身が手を貸す必要性も無いのだがな

## 第三話 吸血鬼（ヒューマンジョン）

『イギリス革命』『ブリテン革命』と言つモノを知つてゐるだらうか

狭義においては1641年から1649年にかけてイングランド・スコットランド・アイルランドで起きた内戦・革命であり、広義においては1638年の主教戦争から1660年の王政復古までを含んだ革命の事だ

実は歴史の中での時代に『カーテナ・オリジナル』が紛失したらしい

そんなわけで早速イギリスへ向かい、王族だけが持つ『カーテナ・オリジナル』を見に行くことにした

一ヶ月

一ヶ月だぞ？ 僕がカーテナを見て、紛失したのが、だ

あらかじめ追跡用の魔術を掛けて置いて良かつたよ、ホント

そんなわけで、今手元に『カーテナ・オリジナル』がある。わーい

見た目は西洋風の典型的な両刃の剣で、全長は80cm程度。ただし切つ先は無く、刃もついてはいない

靈装としての能力は、『これを持つ英國王室の者は、その国内に限り天使長『神の如き者』と同質の力を持つ』というもの。

### 簡単に言えば凄い破格の靈装

実際にはその作成状況から、イングランド・スコットランド・ウェールズ・北部アイルランドの四国で構成される、『全英大陸』でしか使用不能というありえない制限がついてたりするのだが、力を与える筈のカーテナに逆に『神の如き者』の力を送り込んでやることによつて、強大な力を發揮できる

俺の対応する天使が『神の如き者』でよかつたと本当に思う

ちなみに力の移し方が結構難しく、質という点では何とかなつたものの、量という点では入れ過ぎると直ぐにでも爆碎してしまないので気をつけなければならない

とつても纖細な作業だ。慣れたけどな

そして『全次元切断術式』を行使した。とても凄かったです。まる

本来地球という惑星から英國領土を切り離し、その内部を制御管理するというカーテナの特性の応用なのだが、術式を無理やり書き換え、地球上のどこでも切断できるようにした

やり過ぎた、と思ったのは初めてではないが、こればかりは本当にやり過ぎた感があつたな

なにせ、イギリスを出ても使える上、攻撃を防ぐ壁としても攻撃としての飛び道具になる。素晴らしい位に戦闘に使える。必要性は感じないがな

取りあえず、人に向けて使っちゃいけません。といつ事を改めて思つた。

俺はとある町の教会に居た

「神父様、隣町の広場で魔女狩りをやつているそうですね。見に行きませんか？」

「魔女狩り？」

そつこいや最近魔女裁判を行つてゐるつて噂が流れてたな

「なんでも、吸血鬼らしいです。まだ小さい子供のよつて見えますが、実際には数百年生きるとか」

吸血鬼、ね。興味もあるし、見に行つてみるか

## 町の広場

その中央には十歳くらいの子供が磔にされていた

「この魔女は！ 我等に災厄を振り撒く忌むべき存在だ！」

おそらく教会の神父であろう男が声を張りあげる。

「だが私は皆にこの魔女がどうなるべきか、聞こひー・火炙りか！  
解放か！」

神父は声を張り上げ、民衆に聞く

「「「「火炙りだ！ 魔女を殺せ！」」」

珍しいことではない、この時代ではよくあることだ。誰でも、何度も見たことがある光景だ

少女は疲弊しており、反応は薄い

(チツ、ドジつた……まさか捕まるとはな)

神父は磔にした少女の周りにある檻に火を付ける

それはあつという間に燃え上がり、少女は火に包まれた

従者でもあつた人形は既に破壊され、無残に捨てられている。

最も、修復すればまた動けるようになるのだが。

(……熱い。焼けた後に再生するしかないな)

少女は火を付けた神父を睨み、民衆を見渡した

火が邪魔で所々見えないが、一つだけはっきりと見え、はっきりと分かった事がある

少女の眼に映り、理解できたのは

赤い髪をセミロングにした、鍛えているように見えない体つきの男

そしてその男の人間とは思えない異様な雰囲気だけだった

少女は何故かはわからないが、それだけがはっきりと認識できた。

男は顎に手を当てており、何か面白いものでも見ているような目だった

(聖職者か、なら吸血鬼と呼ばれる私が焼かれているのはさぞ面白い事だろうな)

少女はそこで目を瞑り、ゆっくりと意識を失った

少女が目を開けた時、其処は川の畔だった

「……私は処刑台で燃やされた筈……？」

「起きたか」

ガサツと草むらをかき分け、一人の男が現れた

「貴様つ！？」

その男は、少女が燃やされている時に見た異様な雰囲気の男だった

「敵意むき出しだな。安心しろ、俺様は敵じや無い。お前が燃えた後、誰にも気づかれずに灰を集めたのも俺様だぞ」

「……貴様、魔法使いか？」

「まずは名を名乗れ。それと俺様は魔術師だ」

「……エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ。魔術師だと？」

「それにしたって何故私を連れてきた？」

連れてきた、という表現も少しおかしい気がするが、其処は気にする事では無い

服についている草や葉を払いながら「フイアンマが答える

「俺様はフイアンマだ。何、吸血鬼といつモノと話してみたかったのさ。珍しいからな」

「珍しい、か。何が目的だ?」

エヴァは敵意むき出しのまま、フイアンマに聞いてみる

フイアンマは敵意を気にすることなく、話す

「吸血鬼といつモノは珍しい。俺様も興味があるのでな。ぜひ研究してみたい」

「ハツ、不老不死の秘密でも探りたいのか?」

「いいや、今更研究した所で意味が無いからな。そんな事に興味はない」

不老不死という、人類が常に夢見て止まない夢を、そんな事と切り捨てる

何様のつもりだと、エヴァは睨みつけた

そんな事は関係ないとばかりにフイアンマは話を続ける

「まあ、研究といつても、少しばかり実験台になってくれればいい。

危険の無いように配慮はしよう」

「嫌だと呟つたら?」

「叩き潰しても手に入れる、とまではいかんな。そこまでして欲しいものでも無い。吸血鬼は俺様にとつてその程度の価値だ」

魔術師の魔力は魔法使いの使う魔力とは全く違う

魔法使いが自身の『魔力』呼ぶ力は自然界に存在する万物の根源のエネルギーそのものを使っているのに対し、魔術師は自身の生命力を魔力へと変換、更に魔術の種類によつても魔力の質が違う

どちらかといえば、この世界では気に近いかもしない

原油からガソリン、重油、軽油など、別のモノに變えるように、流派や宗派によつて精製方法が違う

それでも、魔力の量というモノは必要とされる

吸血鬼とは魔術師側では『カインの末裔』とも呼ばれている存在だ

魔術師の魔力は生命力を変換して作るため、必然的に不老不死の吸血鬼は無限の魔力をを持つことになる。

おまけに『アルス・マグナ黄金練成』のように時間的制約から人間には発動できない魔術も使えるため、魔術師になるともう手がつけられない

その余りの凶悪さゆえ魔術師たちさえもその存在を認めたがらない  
という存在

もちろん魔法使いが使うような魔力も膨大な量があるが、魔力という点では魔術師になつたほうが得だと言えるだろう

「ほう？ 吸血鬼の価値がその程度だと？」

「より正確に言つなら、魔法使いの吸血鬼ほど力の無駄遣いをしている奴は価値が低い」

不老不死である吸血鬼は無限の生命力を持ち、無限の魔力を生み出せるとして研究の価値がある

そうは言つても、フィアンマ自身老いで死ぬことも無く、必要なら『天使の力』<sup>テレスマ</sup>でも使えばいいのでどうしてもというほど欲しい訳ではない

だが、エヴァにとつてその言葉は吸血鬼を侮辱する言葉だ。自信を侮辱されるという事を許さないプライドの彼女は敵意を殺意に変え、フィアンマを殺そと距離を取り、魔法を使う

危険度など関係無い。自身は今まで何十、何百と敵対した魔法使いを倒し、殺して来た

唯異様な雰囲気を持つだけの男に負ける筈は無い。そう確信する

「リク・ラクラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえの闇 えいえんのひょうがー！」

「ほう、ヤル気かな」

フィアンマはその詠唱を聞きながらも行動起こさない

更にその顔には笑みを浮かべている

「一百年間練磨した魔法を受けてみるー！ 全ての 命あるものに  
等しき死をー！」

フィアンマの周りが氷つき、巨大な氷の塊に閉じ込められていく

「其は 安らぎせ 『おわる……』」

瞬間、ドーム状に閃光が炸裂した

エヴァにはフィアンマの右肩の辺りから出た爆発的な閃光を捕える  
ので精一杯であつただろう

轟音と共にフィアンマの周りの氷は崩れ、周りの木々はなぎ倒され

エヴァはギリギリで障壁を全力展開したが、障子の如く簡単に破られ、木々をなぎ倒しながら数百メートルもの距離を吹き飛ばされた

衝撃による暴風が吹き荒れ、木々を揺らす

暴風はフィアンマを中心として数十メートル程度の範囲で起こつて  
いた。だが、フィアンマはそれを気にすることなく歩き続ける

「吸血鬼といえど、『魔法使い』ならこんなものか

その声は暴風の中でもはつきりと聞く事が出来た

ザツザツと地面を踏みならしながらエヴァの方へ歩いて行く

その気になれば水平に数百メートル処か数十キロを一瞬で移動する事も可能なのだが、あえてそれをしなかつた

「クッ……何が……？」

エヴァは体が所々吹き飛んでおり、血を流し、体の部位が足らない状態でもフィアンマに殺意を向ける事をやめなかつた

それは吸血鬼としてのプライドか、戦意を喪失する事は無かつた

「やめておけ、どうせお前じや俺様に勝つことなど出来はせん。エ夫次第でどうにかなるレベルをとうに超えてる」

見下したようにエヴァに淡淡と告げるフィアンマ

「どの道、魔法じや俺様は倒せんよ。それ以前に格が違う」

魔術師と魔法使いとしての差か

天使に近い者と真祖の吸血鬼としての差か

生きてきた年月の差か

何にせよ、エヴァがフィアンマに勝つことなど不可能だと、証明しきつた

「え、貴様……」

いつもしてこる間にも、エヴァの体は再生し続けている

再生が終わればまた攻撃するだろうが、フィアンマはあえて追撃しなかつた

「ふむ、思ったよりつまらなかつたな」

フィアンマは唯の興味本位で挑発してみたが、予想より簡単に挑発に乗り、相手と自分の力量差も分からぬバカだと認識する

どの道、この程度では放つておいた所で邪魔にもならない

「折角だ、少しばかり血を貰つて行こうか」

倉庫から試験管を取り出し、ヒヴァンジョンの傷口にあて、血を入れる

ある程度の量がたまつた所で封をし、倉庫に入れる

「今日は見逃そう。次に襲つてくれば容赦などせんがな」

それだけ言ってフィアンマは立ち去る

残されたのは、ヒヴァンジョンとゾーム状になぎ倒された木々だけだった

森の中の一軒家。其処には一人の魔女が住んでいた

その家に俺は踏み入り、紅茶を飲みながら会話を楽しんでいる

「……それで、その小さな吸血鬼をボロボロにしてきたのかい？」

「まあな。俺様に喧嘩を売つたあいつが悪い」

売り言葉に買い言葉と言ひつけど、この場合売り言葉は俺の方だった  
がな

簡単に買つたあいつもどりつかと思つが

「ハア、まだ小さい子供だらう。何が気にいらなかつたんだい？  
フィアンスマ」

「餓鬼だからと手を抜くつもりは無い。それに相手は吸血鬼だぞ？  
一百年以上生きてる。お前よりずっと年上のババアだぜ？ ラフ  
レンツ」

手元の紅茶を飲みながら、俺はそう答える

ラフレンツと呼んだ女は頭を抱えて溜息をついた

「それを言つたらアンタだつて六百年以上生きてるジジイだろ。ど  
つちもどりけだと思つね」

「相手と自分の力量差も分からん馬鹿だ。それに『魔法使い』だつたしな」

「ああ、なるほど。なら殺す意味がない訳だ」

魔術師なら始末する必要性が出てくるが、魔法使いは別にどうでもいい

理由はラフレンツェにある訳だが、その訳はいつか話そう

「お前の価値は『魔法使い』には分からんだろうからな」

「ふん。五百年近くもこうして一人で過ごして来たんだ。母も、祖母も、曾祖母もね。魔法使いじゃ無理だつて事はとっくの昔に気付いてる」

「血のつながりは無いだろうが。受け継がれるのは呪いのみ。厄介な魔女に拾われたな、お前」

まあ、俺はその受け継がれる呪いを掛けた魔女と知り合いなんだがな

「もうとっくの昔にあきらめたさ。今じゃ私も立派な魔女だ。私は私の役割を果たすだけ。いつかお前がこの呪いを不要にしてくれる日が来る事を祈るよ」

「暇があったらな。一応頑張ってはいる」

ラフレンツェはキセルをふかしながら笑う

「ハハハ！ あんた程の魔術師でもこの呪いは必要な物だろ？から

ね。コレが無くなつた時の被害に比べればまだ呪いを受け継がせる方がいいつてもんさ」

「確かにそうなんだが、代々続く血の繋がらない魔術師の家系。呪いと共に魔術の技術を引き継ぎ、次世代へと渡す。それだけの人生、つまらなくは無いか?」

「つまらないね。はつきり言えば。でも、私達にはアンタがいるだろ。アンタは月日がいくらたとうと変わりなく居る。少なくとも寂しくは無いよ」

キセルを吹かし、立ち上がる

腰まである銀色の髪を揺らしながら、無くなつた紅茶を入れようとガチャガチャとキッキンをあさぐる

「寂しくは無い、か

紅茶のポットを俺に渡し、ラフレンシエは椅子に座る

「名前、呪い、魔術。それだけの物を次世代へと渡し、利用されない様に守る。外に出れないのはつまらないと思うがな

紅茶を淹れながら会話を続ける

「外に出れない訳じゃない。出ないのか、面倒な輩に見つかる訳にはいかないからね。それでも偶には出てるわよ、この森の中を歩き回つたりしてるわ」

「まあ『魔術師』にその価値を気付かれば不味いだろうな。それ

でも後継者を見つける為に森を出歩へ、か。『苦労な事で

魔女の伝説つてこいつの所為で生まれたものとかあるんじゃないか？

魔術師も危険度を正しく把握してゐるなら、手を出すとは思わないだろうがな

「やう思うならこの呪いを不要にして欲しいものね。コレがあるから馬鹿な奴らが寄つてくる」

「その為に懾々陣を形成しておいただろうが。余程の攻撃でも無ければ通らないぞ？」

「ソレだって感謝はしてるわよ。まあ並みの相手なら私だって何か出来るけど、厄介なのはあんたみたいなレベルの魔術師だ」

「俺様位の魔術師などやつは居ないと呪うがな

俺は肩を竦めながら返答する

俺レベルの魔術師が世にそういう何人もいるわけがないだろ？」

「居るとしたら相当な天才だろうな。……アレイスターとかなら、まあレベル的には同じ位かな

「もしかしてつて事があるかも知れないでしょ？。……ま、その時は素直にアンタに助けを求める事にするよ」

「やうだな、お前の頼みなら素直に聞く」

それも『あの女』との約束だしな。敵は排除するのみだ

「感謝するよ。魔術師といつてもアンタに勝てる奴なんていないだろ？からね」

「わあ、どうだうな。まあ安心しろよ。約束は守る」

「信用してるよ」

いつか、この呪いが不必要になる時が来るといいんだがな

## 第三話 吸血鬼（Hカアンジヨリソ）（後書き）

フラグばかり、といふか伏線ばかりの話。

コレの謎が解ける位まではちゃんと続けたい。

学校の方が忙しくて執筆時間が取れないですが。

後思つたんですが、「聖なる右を持つ者」の方にリメイク書き始めました。つて出した方がいいんですかね。

## 第四話 黄金夜明（アレイスター）（前書き）

早く大戦期入りたい。多分しばらく無理でしょうけどね。

## 第四話 黄金夜明（アレイスター）

時は飛び、日本

「がつはつはつはつは…！ ほれ、飲め飲め…！」

「やめ、バカ野郎！ そんなに飲んだらお前直ぐ潰れるだろ？ が…！ 弱いくせに飲みすぎだつての…！」

とある居酒屋で俺は友人と飲んでいた

「やつはつなよフイアンマあ～家じじゃ飲ませてくれねえんだよお」

「せりやお前のかみさんガ正しい。お前を飲ませると手に負えない」  
俺はとある事を頼む為に伊能忠敬に接触した。……のが一週間前

同じ魔術師といつ縁だけで忠敬は『よし、飲みに行こうぜ…』と俺を引っ張って居酒屋へ。かみさんに話を聞くと元からソリウム性格らしい

豪快だな。豪快過ぎだろ

「お前とか言ひなつての。ダッちゃんと呼べ」

それで呼ぼつと呑みと別の大好きなダッちゃんと思いつての

ここつは焼肉と風呂と酒が大好きだ。それでも仕事は一寧なのがす

げえ

居酒屋で話す事でも無いので、忠敬の家にやつて来た

一軒家の大きな家で、家の中に測量用の器具やら何やらがおかれ  
ていた

「仕事はやんとやつてんだらうな」

「あたほーよ。お前の依頼はしっかりやつてるぜ」

それなら良いくんだが、コヤシホント忘れやすからな

「しつかしよ。俺は地図を書いた。お前はそれが精巧で、魔術にも  
使えるつてこつたからよ。やつてみた訳だ」

「やつたのか。それで？」

「成功した」

……「イツ、ホント何でこいつ性格なんだろつな。魔術師として  
の才能と、偶像を創る事に関しては凄いが。

伊能忠敬の魔術技術と、異常なまでの地図の精巧さが、偶像の理論の逆利用によって日本各所に『渦』を付け加えるという魔術を使うようにした

発動には特別な準備が必要で、それを満たすことによつて午前0時から5分間だけ移動魔術『縮図巡礼』使用が可能となる

偶像を作らせたら右に出る者はいないといふ事で、俺は偶像を作つて貰えるよつに頼んでいる訳だ

ちなみにコイツ繫がりで天草式十字棲教とも知り合つてたりする。

「ま、お前が出来のいいものが出来るまで待たせて貰つよ

「おひ、いいものを作つてやるさ

仕事に關しては信用できる。性格がコレだから隠し事も出来ないけどな

「『ハラ！ アンタまた飲みに行つたね！？』

「ゲッ、ヤベえ。逃げるぞフィアンマー！」

そして、逃げるときに何故か俺まで逃げる羽田になるといふ。何故こうなつた？

忠敬は頑張ってくれて、二年かけて四体作っている。

だが、作つた一ヶ月後に訃報が俺の元に来た。病死らしい俺があつた時はまだ元気だつたんだがな。友達が死ぬのはやはりつらいものがある

そんな気持ちを抑え、実験することにした

無人島を探し、そこで天使を降ろす魔術を使いたら本当に天使降臨。ちなみに『ガブリエル神の力』

もちろん、降ろした瞬間ガチバトル

一度戦つてみたかったんだよ、一方通行とヒューズ・カザキリを相手に五十%の力でも勝てると原作フィアンマが豪語した化け物だからな。

ちなみに勝つたよ。大勝利

無人島は軽く地形が変わっていたが、平地が増えている丁度いいので、ここに魔術の研究所でも建てる事にした

島の大きさは四方十キロ程度の大きさだ

まずは魔術で防御陣を島全体に描く

川などで水路を描き、流れを変えつつ地道に結界を強化しつつ、魔術生命体を研究

魔術生命体つてのは、その名の通り魔術によつて作られた生命体だ  
そのパターンは有機物に手が加えられた既存生物の亜種であつたり、  
無機物だけを素材とした新種生物であつたり千差万別で、姿も十  
人十色。

その中で唯一全ての個体に共通することは『独自の思考能力を持つ』  
ということ

一体あたりの製造コストが高い、寿命も不安定、外界に対する適応  
力が低いなど問題が多く、これについて真面目に研究、製造を行  
つている魔術師は絶滅危惧種であるとさえ囁かれる。

俺が作ったのは限りなく人間に近い生物だ

目的の生命体を生み出すに足る環境を整えた上で、生命の源を生む  
であろうと推測される、いくつかの未分類現象を人為的に発祥させ  
ることで、望むデザインの生命体を作り出す

俺は既存の生物に似せる事で寿命の増長を目指し、更には肉体の強

化や、多量の『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を扱う為に肉体を作るときに『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を流し込んでみたりと、いろいろ実験していた

魔術生命体自体も清潔な儀式場や神殿、塔など限られた場所にしか現存しないとされているが、そんな常識は『ミミ箱にでも捨ててしまえ！

とまあ、そんなスタンスで作った結果がコレ

「お父様、次はどうなるの？」

俺の横で「ココながら魔術の授業を受けている」この少女

見た目は黒髪、紅眼、肌は白く、身長は百二十センチ位で、歳は二歳（作つてから一年だから）。追記するなら顔は可愛い（俺は口リコンでは無い）

名前も最初は順番的に番号で09とでも付けておけばいいかな、と思つてたんだが、まさかの成功だったので『ルーシー』と呼ぶことにした

五年程でまさか成功するとは俺も思わなかつたよ

魔術の授業を行い、魔術に精通した俺の助手として過ごして貰つことにした

寿命はどこぞの人形遣いの如く、記憶も引き継げるよう魔術を創つたので、死ぬたびに新しい肉体になり、記憶は残る。輪廻転生的な奴

ちなみに知識だけね。禁書本編で言つなれば、

言葉や知識を司る 意味記憶

運動の慣れを司る Hペソード記憶

思い出を司る Hペソード記憶

そのうちHペソード記憶のみ消去している為、俺が親と言ひ事以外は思い出なんて無い

まあ、ちょっと悲しいかなとは思つが、早い話、記憶の量に脳が耐えられなくなるので、俺が百年に一度位の頻度でいらない記憶の消去をしようと思つてゐる

俺の脳は神に弄られてるから必要は無いけどな

そんな感じで早数十年

知識があるからって何でも出来るとは思わない

知識だけでなく、経験も必要だ。そう思つて、使える魔術は一度使ってみようと思つた

ルーン、カバラ、鍊金術、神道、陰陽術 etc

多種多様な魔術を一つ一つ試すのは中々きつかったけどな

ちなみにルーサーの得意な系統は肉体を創ると同時に『<sup>テレスマ</sup>天使の力』を

流し込んだ属性で決まる。まあ当然と言えば当然なのだが

そんなこんなでいろいろやっていた俺だが、時たまいろんなところに出かけては情報を仕入れ、魔術組織を動かしている

その中で現状最も興味のある組織は『黄金夜明』という組織

知つての通り（？）『黄金夜明』とは、後に世界最高の魔術師にして最低の魔術師と呼ばれるアレイスター・クロウリーの属している組織だ

この世界でも科学に走るかは分からんが、自力で神の領域に入り込んだ魔術師で、『魔神』に近い、というか『魔神』と同レベルの力を持つている筈だ

相手に回せば厄介な事この上ない。俺もこいつを相手にすれば絶対に勝てるという自信が無い

禁書原作でアレイスターにやられてるからな。原作フィアンマ。多分全力でも勝てなかつただろう

俺は分からんが。少なくとも『聖なる右』以外の力もある訳だし

取りあえず『黄金夜明』に入る事にし、探した

元はウイリアム・ワイン・ウェストコット、マグレガー・メイザー

ス、ウイリアム・ロバート・ウッドマンの三人によって作られた小さな組織だったが、いろんな魔術を研究し、結果が出て、いろいろやっていたら有名になつた。とのことらしい

アレイスターは既に組織に所属していた

『黄金夜明』では「この術式は「うしたほうがいいと思つ」とか、「これはこの方法だらう」とか、魔術の研究ばかりだつた

だが、やはり思ったのは……

「天才だなあ。アレイスターは」

「お父様も十分す」と思つよ?」

ルーシーがそうフォローしてくれる。かわいいなあ、ホント。撫でてやるつ

「……お前、そつまう趣味してるのは?」

「アレイスター、そつとしておいてやれ。ああいう趣味があつても言わないのが社会人だらう」

何だか激しく勘違いされてる気がする

「愛娘をめでて何が悪い!」

「言い切るなよ。確かにかわいいけど

「手を出したら殺すぞ?」

「出すか！ まだガキだろーがよ！」

「こんなに可愛いのに手を出さないだと…？ お前は男として終わってる！」

そう言つと、親バカだなあ。と言つぽつ生温かい視線に包まれたので少し血量

どうせこの組織に入つたのもアレイスターと接触するためだしな  
魔術知識は全部入つてゐる訳だし、原典も含めてな。どの道俺は何も  
やる事は無い

「お前も随分な天才だと思うがな」

そう言つてきたのは仲良くなつたフイオラ・ディオスタークと言つ男  
こいつは『死靈術』を研究している『死靈使い』だ

『死靈秘法』の写本を持つてゐるというスゴ腕の『魔導師』でもある

「いやあ、アレイスターには敵わんよ」

「そう謙遜すんなつての。お前のおかげで俺の魔術も進歩したんだ  
しょ」

「それはちょっとした理論構築を手伝つただけだらう」

靈体を操作する事と死体を使う事に関しては一級品の実力

死体を使っての反魂の術とか出来るらしいし。ほほ失敗らしいが。  
俺も参考にさせて貰つたよ。やはり見るのもいい勉強だ。知識だけ  
じゃ駄目だね、やっぱり

「それでもよ、俺の夢の為に手伝ってくれるってのはありがたいん  
だよ」

お礼を言われて悪い気はしない。本当にそう思つたよ。嘘だけど  
神から貰つた知識だしね。俺の力じゃ無いからどうにも言えないよ

日本にある無人島

研究所の他に別荘を建て、ルーシーと二人でのんびり暮らしていた

やる事無くてね。本当に

『黄金夜明』は既に解散している

理由は『天才であるが故の協調性の無さ』といったところだろうな。  
我が強過ぎる連中だつたし

その為、俺は無人島でずっと研究している

俺はもう〇〇と1で表せる領域の存在では無い

アレイスター やアンナ・シュブレンゲルのよつな『秘密の首領の窓口』では無いにせよ、存在そのものが曖昧になつてきている

『窓口』になる事が絶対的に必要な訳ではないようだからな

『生命の樹』では、上位部分は『人間には理解できない』として説明が意図的に省かれている

神の領域に片足突っ込んだ俺だからこそ、『法の書』が解読できた

『法の書』は既存の言語学では解明できないと原作でインデックスが言つていた理由がハツキリと分かつた

アレは人間には解読できない。エイワスやガブリエルの言葉が『ブレた』ように、『法の書』は人間より上位の存在しか分からないのだ

十万三千冊を手に入れ、『魔神』と同等のレベルに達し、神の領域に片足突っ込んだ

……俺、今人間と言えるのだろうか。いや、気にしない様にしよう。

うん

この無人島は隠蔽されて気付ける奴なんていないから放つておいても問題は無い

今、世間ではきな臭い動きをしている奴等が居る

俺の記憶が正しければ、そろそろ第一次世界大戦がはじまる頃だろ？  
完全記憶能力があつても、間違つて覚えていれば意味が無いからな

ふと、周りを見渡す

周りは森に囲まれた山地で、近くには湖がある

まるで漫画にでも出てきたような場所だが、あるのだからじょうがない

あるときは釣りをしつつ、あるときは森を散歩

なんと言つか、隠居生活を送っている気分だ。いや、年齢的には間違つて無いんだろうけども

そんな折、ルーシーが一枚のメモを持ってきた

「お父様、教皇から至急お父様に伝える事があるって。さつき靈装を通じて連絡があつたわ」

俺はそのメモを読む

内容は大まかに言えば『世界大戦の開戦。これからについて話し合う必要がる為、至急バチカンまで来て欲しい』との事だ

## 第四話 黄金夜明（アレイスター）（後書き）

今回はまたおかしな物を手に入れた話。

偶像入手とか、アレイスターとの接触とかです。地味に天草式とも繋がつてたり。

第一次世界大戦どうしよう。入れたはいいけどネタが無い（えなんか良いのありませんかね……

感想を頂けるととてもうれしいです。

## 第五話 世界大戦（せんそう）（前書き）

今回、すこく難産でした。後短いです。

## 第五話 世界大戦（せんそう）

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。

聖ピエトロ大聖堂とは、世界中に存在する十字教魔術組織の総本山である。

莫大な魔術的な仕掛けや、領土を保護するための防護陣などが施されている十字教勢力最大最高の要塞として働いている。

更に、バチカンという国そのものが一つの靈装と化している。建造物などが発する魔術効果によって一種の巨大な結界ができているのだ。

複数の魔術効果が複雑に絡み合っているうえ、常時変化し続けるので、『組織』自信も把握し切れておらず、例え禁書目録インデックスの知識をもつてしても解析はできず、仮にできても次の瞬間には変化してしまうため、誰にもハッキングできない強固な結界となっている。

それでも、ファイアンスマの『聖なる右』をまとめて喰らえば一撃で崩壊するのだが。

そんな聖ピエトロ大聖堂の一部屋に集まっている人々が居た。

〈黒の教団〉

そう呼ばれるのは、数ある十字教魔術組織を一纏めにし、尚且つ統率している組織。

とはいっても、全ての組織が完全に纏まつた訳ではない。いくつかの組織は国と言つ单位で閉じてゐる為、それぞれの国内にしかない有様だ。

別の国同士での交流などもほとんど無い為、＜黒の教団＞内でもいくつかの組織の派閥で分かれ、それぞれの『個性』が出来上がつてゐる。

出来たのはほんの数十年前だが、その権威は既に大国のそれと変わらない。

科学兵器を使う国がほとんどだが、アステカやイスラム等別の宗教の魔術組織もある上、それらと対抗して十字教の魔術師が戦場へ投入される事も珍しくは無い。

重要な戦力となりえる魔術師を多数抱える黒の教団は各国から戦力として頼られる事も多々ある。

加えて、アステカやイスラムの魔術師は「黒の教団」の様にいくつかの組織が纏まつてゐる訳ではないし、魔術師の数は少ない。

その辺りの理由もあり、魔術組織、結社は「黒の教団」に登録する事が自身の利益につながると思つてゐる。

各国の重要なポストに居る人物は大抵魔術師、魔法使いを知つているが、魔法使いを頼つても旧世界じや勝てる確率は限りなく低い。

何故なら、魔法使いは旧世界では秘匿の問題がある為、魔法を使う事を良しとしない為だ。

ともかく、大きな力を持つロシア、イギリスやドイツなどの国もバチカンの影響力はある。

その為、敵に回そうとはしない。敵に回せば戦力が傾く事は間違いないからだ。

その組織でも、最も重要な人物が、今バチカンに集まっていた。

「……『彼』は既に？」

廊下を歩く老人は貫禄があり、白髪があるがその威圧感は唯者では無いと悟らせる。

彼は教皇であり、その威厳も当然のモノと言えよう。

「先日通達しておきましたので、既に来ているかと」

教皇の後ろに控えた秘書の声が凜と響く。

その時、ギィー、と音を立て扉が開いた。

中に入った教皇と秘書が見たのは赤い修道服を着て鍛えているように見えない体つきの赤髪の男『右方のフィアンスマ』。

そして、その男につき従つように後ろについている黒髪の少女。ルーシー。

「……ちやんとこるようだな」

「悪いな。何分急だつたもんで、準備を整えるのに時間がかかった」

教皇の言葉にフイアンマが気軽に答える。

「教皇に対してもう少しは敬意を示して欲しいのですが」

「そう言つなよ。俺様はあくまでも『相談役』だ。隠された暗部が態々敬意を払う必要もないだろう」

そもそもこの組織の基盤はフイアンマが作ったのだ。表に立つ事を面倒がつた為に現教皇が纏めているが、ほぼ全ての組織のトップに通じている為。実質的にはフイアンマの組織とも言え。

教皇は席に座る。

教皇の秘書は全員に資料を渡し、会議を始める。

「……さて、今回の会議の内容だが。ワールドウォー世界大戦<sup>ワールドウォー</sup>が開戦した」

世界大戦争とは、後の歴史で第一次世界大戦と呼ばれる戦争である。

フイアンマは手元にある資料を覗き込み、内容を聞く。

秘書は概要と大体の理由を述べ、通達し終わる。

各国はドイツ・オーストリア・オスマン帝国・ブルガリアからなる中央同盟国と三国協商を形成していたイギリス・フランス・ロシアを中心とする連合国の2つの陣営に分かれ、日本、イタリア、アメリカ合衆国も後に連合国側に立ち参戦した。

「……と、そう言つては。やはり魔術師の『戦力提供』を求められている部分ほとんどです」

「イギリスの『王室派』は何と言つてはいるの？」

ルーシーはそう聞く。歴史があり、繋がりの強いイギリスの言う事はある程度は聞かなければならない為、気にする部分も多い

「『王室派』は魔術師を投入する事を強要しています。同盟国であり、影響の強いイギリス。更にはロシアも同じように要求してしまっては、恐らくは戦力提供となることになるかと」

現状ではイギリス、ロシアは同じ陣営である為に魔術師を投入すれば同じ勢力同士で戦うこともない為、既に何人かは偵察として送られてはいる。

「なるほど、他の組織から魔術師は出でているのか？」

「既に確認された魔術結社は、『黄金夜明』から分裂した一人が作った魔術結社、『宵闇の出口』が少なくとも闇』している事が確認されています。恐らくドイツ側かと」

宵闇の出口についてはまだ出来たばかりで情報が少なく、戦力がどれほどのものか分からぬ。

「聖人は戦争に参加させられているのか？」

「現在ではまだ確認されていません」

聖人は魔術師たちにとつて核兵器にも等しい。その戦力は国としても欲しがるほどだ。

だが、その存在は新世界、旧世界でおよそ三十人も居ない。時代によつては更に少ないという事もある。

人数が少ない故に見つける事も難しい。だが、手に入れられれば相当な戦力となる。

「全部ぶつ瀆せば速いんだがな」

「どの道お前達二人は暗部中の暗部だ。表舞台に出る事は出来無いだろう」

当然だが、表舞台に出れば暗部の意味が無くなる。

戦力過多だと見る他の国が戦争を仕掛けてくる可能性だつてある。

実際、「黒の教団」がある事で危険視している国もあるのだ。

「他に何か情報は？」

「未だ不確定ですが、悪魔が居るとの噂を聞きます」

「悪魔、か。『殲滅白書』は？」

「既に準備を進めています」

対悪魔専門部隊、『殲滅白書』。

幽霊狩りに特化し、心靈的な事件の解析や解決を専門とする特殊部隊の名だ。

その他対魔術師機関、対魔法使い機関等あるのだが割愛。

「……それで、私達はどうすればよいのだ？」

「そうだな、自發的に戦争には参加する必要は無い」

「ですが、それではイギリスやロシアからの援助を受けられなくななる可能性が……」

「話は最後まで聞け。態々悪魔を用意してゐるんだ。それに便乗しちまえ」

「と、いつと?」

「簡単な話、悪魔を召喚する様な国は滅する。とでも言えば参戦の理由にはなるし、それなら弁がたつだろ」

悪魔を使う様な国は世界の敵。

そう言つてしまえば、単純な話、宗教のある大抵の国がその国を攻撃対象にする。

余程の大國。それこそソ連やアメリカでも、数の暴力には勝てない。核兵器もまだこの時代には存在しないのだ。

「なるほど。われわれ自身は手を出さず、情報でかく乱させるのか

「まあそんな所か。それで、それ以外に何があるのか？」

「いえ、特には」

「そうか、なら俺様はちょっと出てこべや」

「何処へ行かれるので？」

「知り合の所さ。行くぞ、ルーシー」

「はい、お父様」

そう言ってルーシーを連れ、ファイアンマは何処かへと行った。

「……神の右席、か。頼りになるが、性格が難だな」

その教皇の咳きは、ファイアンマに聞こえる事は無かった。

「なるほど、それで私の所へ、ね」

「まあな。心配はじて無いが、情報があつたほうがいいだろ？」「椅子に座って話しているのはファイアンマとラフレンシス。H.ラフレンシス

ルーシーはキッチンで紅茶を淹れている。

「さうね、悪魔の情報はあつたほうが心強いわ。誰かさんみたいに右手振るだけで勝てる訳でも無いから」

「その誰かさんが態々結界張つてる事も忘れるなよ」

「分かつてゐるわよ。感謝してゐるんだって」

「トラン、と机に置かれた紅茶を一口飲む。

香りを楽しみ、味を楽しみ、喉を潤す。

「それにしても、『黄金夜明』が解散したってだけでも結構なニュースになつてゐるみたいね。魔術の基盤ともいえる部分を作つた、アレイスターの所属していた組織。結構有名だし。彼、今どこで何してゐるのかしら」

「さあな、あいつ等は協調性は絶無だつた。いつ解散してもおかしく無かつたよ。どいつもこいつも一癖も二癖もある、何処で何をしてるかなど分からん」

「……え？ アンタ『黄金夜明』に所属してたりする？」

「していた、というのが正しいだらうな」

「……マジ？」

「マジだ。其処まで珍しいか？」

そりゃあね、と言いながら紅茶を飲む。

「しかし驚いたわ。まさか『黄金夜明』に所属してたなんてね」「其処まで驚く事でも無いがな。天才集団の集まりではあつたが、協調性の無さも一級品だった」

一度崩れ始めたらあつという間に崩れる。

それほどに脆弱な繋がりだ。

「まあ戦闘に関しても学問に関しても相当なモノを持つてたしな。特にアレイスター」

「……アンタが其処まで人を評価するなんて珍しいね」

「そりや？…………そうだな、俺も、あいつには負けるかも知れんと思つたよ」

「そりやトーンデモ無い化け物だね。アンタが勝てなきや神様でも引つ張つてこなきや無理だろ」

ケタケタと笑つたりフレンツ。

公式チートビーヴロカ数の概念さえ意味の無い相手だから、ナギとかのバグキャラでも勝てんだらつなあ、と思つ。

「お父様、教皇から連絡が」

「ん？ 僕様にか？」

連絡用の靈装から情報が来たらしい。

ちなみに、場所を特定できない様に多少ジャミングしてある特殊な靈装を使っている。

「それで、なんだって？」

「『アレイスター・クロウリーの研究を発見。科学の物と判明、即刻アレイスターを捕縛、殺害せよ』と」

ラフレンシエは畠然としている。

「ソレは俺様への命令か？」

「いいえ、他の魔術師にも連絡してあるみたい。どうするの？」

「そうだな……」

「ちょ、ちょっと… アンタ勝てんのかい！？ アンタさえ負けるかもしれないと言つた相手だろ！？」

「それでも、俺様は戦うさ。どっちが最強か、白黒付けてやる」

椅子から立ち上がって、外に出る。

「科学へと走つたか、アレイスター。これも予定通りなのかね……」

咳きは誰にも聞こえる事無く、風にのまれて消えた。

## 第五話 世界大戦（せんそう）（後書き）

学校が忙しくて、中々書く時間が取れない……。

夏休みなのに学校なんて鬼畜だ！！

次回はアレイスターとの戦闘を予定。

……勝てるかなあ？　いや、ガチで。

## 第六話 頂上決戦（せこわよひのふたつ）（前書き）

今回、超展開キタコレ。と言いたくなると思こます。

ちなみにアレイスターの使つてる魔術は完全に独断と偏見です  
ご容赦を。

それでもよくとこつ心の広い方は、どうぞ。

## 第六話 頂上決戦（さいきょうつのふたり）

1920年。第一次世界大戦は終結し、戦火も消えて数年。

ある場所に、二つの影があった。

一人はアレイスター・クロウリー。ねじくれた銀の杖を持つ稀代の天才魔術師であり、その実力は世界最強とも言える。世界で最高にして最低、最強にして最悪と呼ばれる魔術師。

もう一人はラト・ディストロ・ファイアンマ。神の子右席の『右方』を担う魔術師にして、転生者でもある。そして、ほぼ世界中に存在する魔術を知り尽くしている男。

イギリスの片田舎。まわりには何も無く、のどかな風景が続いている其処に、一人はいた。

「久しいな、ファイアンマ」

「ああ、久しぶりだ、アレイスター」

先に口を開いたのはアレイスター。

昔を懐かしがるように語りかける。

「『黄金夜明』が解散し、行方がふつたり切れていたお前と会うとは、全く思っていなかつたよ」

「そうだな、俺様も、もう会う事は無いと思つていた」

二人の間には、およそ殺氣という様な物は無い。

唯昔話をするように、緩やかに話す。

「いつして久しく会つてみると、やはり懐かしい。私にも人間味といつモノが残つていたようだな」

「人間味か。お前は随分と人間離れしていたがな」

「それはお前の言えた事ではあるまい。私と肩を並べられるほどの人間はお前しかいなかつた。お前も随分と人間離れしているよ」

「『黄金夜明』のメンバーはそれぞれどつかぶつ飛んでいたからな。俺様も例外ではないだろつぞ」

肩をすくめ、呆れたように言つ。

「……それで、お前が私を殺しに来たのか?」

「そうだな。『科学に走つた裏切り者』の始末をつけにな」

「ふ、裏切り者、か。個人がどんな事を研究しようと勝手だと思うがな」

「俺様もそう思うがな。お前は魔術師でも最高峰。科学に走つたとなれば魔術師のメンツが無い。との事だ」

やれやれ、面倒な。と弦くフィアンマを見て、アレイスターは笑う。

「お前らじこな。だが、私を殺すのだらう。」

「やつだな、これ以上勝手やられると魔術の品位がトガつちまつ」

「ならば 初めから全力でやらせて貰おう」

瞬間、不可視の衝撃がフイアンマを襲つ。

左手で弾き飛ばし、衝撃を逸らすも、左腕は折れて使い物にならない。

(……何?)

疑問を覚えたのはフイアンマでは無く、アレイスター。

確実に当たれば死を招く一撃を放った筈だった。だが、事実として フィアンマは左腕こそ使えなくなっているものの、死んではない。 「やれやれ、やはり懲心は死を招くな。こんなことならもう少し準備をしておけばよかつたよ」

ワイヤーに魔力を通し、術式を発動させる。

折れて血の出でこむ左腕は見る見るついつい治っていく。

「……やはり、油断も懲心も出来る相手では無いな

「」

「ゴツー」と轟音と衝撃波が辺りを揺らす。

当たり前のように不可視の一撃をぶつけあい、距離を取る。

この場所はアレイスターの潜伏場所。そして、魔術師にとつて『前準備』こそがどれだけ真価を發揮できるかの力、ギとなる。

そして、前準備が既に整っているアレイスターにとつては、この場所は至高だ。

恐らく、この場所においてアレイスターに勝てる人間はない。

「巨人に苦痛の贈り物を」

『倉庫』から取り出したルーンの刻まれたカードを手に詠唱する。

巨大な炎はアレイスターへと向かい、その身を焼き殺そうと迫る。

「聖なる右は使わないのか？」

湖の上へと移動したアレイスターは、その大量の水を掌握し、炎と相殺させた。

「使って欲しいのか？ 心配せずとも使ってやるよ」

術式の書きこまれたルーンのカードを媒体に炎剣を作りだし、操作された水を一気に蒸発させる。

この時点では左腕は完治し、感覚こそあまりないが、動かす事には問題無かつた。

風を操り、視界を保つて『聖なる右』を発動する。

「いつ見ても気持ちの悪い物だな」

「見た目は、だろ。強力なんだがな」

アレイスターは手に持った『衝撃の杖<sup>ブレイブスティングロッド</sup>』を振るい、フィアンマは『聖なる右』を振るい、その力をぶつける。

（オイオイ、聖なる右と抵抗かよ。どうなってんだ、あいつの力）

目的に応じて出力の変わる第三の腕。

それはつまり、倒そうと思えば倒せるだけの出力が出ると云ひ事。

それだけの力と拮抗出来ている時点で、アレイスターも人間離れしているとしか言えないだろう。

（とはいえる、長引くのは不利か。奴はいいだろうが、私は駄目だ）

フィアンマには知識がある。

魔術師同士の戦いにおいて、最も狙うべきは相手の魔術の逆算。

どんな魔術を使おうと、逆算して正体・解法を導き出してしまえば、何の脅威にもならない。

だが、フィアンマにとつて場所が悪い。

逆算しようにも、所々で別の魔術が発動し、どんな魔術を使ってい

るのかが分からなくなる。

厄介な事にの上ない。

(奴自身、ルーンやそれ以外の魔術を同時に使っている……全く、ふざけた奴だ)

アレイスターは連續して起こる炎の爆撃を相殺しながら考える。

元々魔力の精製方法の違いから、多種の魔術を同時使用すると言つことは出来ない。

だが、ファインマは魔力を別に、同時に精製する事で同時使用可能としている。

ソレは、思考を分割して同時に一つ以上の事を考へてゐる様なモノ。

戦闘に集中などできる筈も無いし、魔術に対する魔力のロスも相当なモノだ。

だが、それを平然とやつてのける。

もちろんいくつも同時に使えてゐる訳ではないが、微妙に時間をずらす事で多少の無理は効く。

魔力とて、できつむ限りのロスを無くしている。

九百年の練磨の結果が、この戦いに如実に表れている。

(面倒になつて来たな、少しばかり強力なのがますか)

トン、と一步で数百メートルの距離を取り、魔道書の知識を引き出す。

「『硫黄の雨は大地を焼く』」

上空に五十ほど『灼熱の矢』が出現し、吊り天井のよつて降り注ぐ。

アレイスターは杖を振り、『灼熱の矢』を消し飛ばす。

同時に、下から切り上げるよつて、二十一三十キロ程度の長さの大剣が迫る。

紙一重でソレを避け、同時に不可視の刃を四方から膨大な数を放つ。フイアンスマはそれを右腕を振って消滅させ、続け様に術式を発動する。

「『神よ、何故私を見捨てたのですか』

血の様に真っ赤な赤黒い光線を発射し、アレイスターの体を食い千切ろうとする。

もう一度杖を振り、赤黒い光線と相殺させる。

( ( ) のまま続けても堂々巡りか ) )

最後の一手。後一手が足りない。

実力はほぼ均衡。既に二人の戦闘でこの辺り一体は焦土と化している。

木々はなぎ倒され、湖はその水かさが異様に減っている。

辺りに用意されたアレイスターの魔術も同時に破壊しながらの戦闘を続けていた為、大分逆算が進んでいる。

ルーンの投影で凍らされた水は槍となり、ファイアンマヘと牙をむく。

同じくルーンの魔術で多数の炎剣を作り、氷の槍を薙ぎ払うように相殺させ、必殺の右腕を振るつ。

だが、その右腕の攻撃も『衝撃の杖』フレイスタイングロッドによって相殺される。

似たような事の繰り返しだ。

互いに一撃必殺。常に相手を殺すつもりで攻撃している。

故に、ほぼ同威力に達する魔術を使うが為に勝負がつかない。

「チツ、流石に強いねえ」

地面に文字を描き、数体の巨大ゴーレムを作りだす。

「お前も相当だよ。今までこんなに強い奴と戦ったのは初めてだ」

不可視の空氣の槍がゴーレムを串刺しにする。そして、突き抜け、

「フイアンスマへと向かひ。

「ま、そつだろつな。こんなレベルの魔術師なんてそつはいない」

地面へと展開された術式から十の槍が飛び出し、空気の槍を相殺する。

そして、一瞬の静寂。

(チツ、マジで決着つかねえじゃねえかよ)

(強いな、流石に逃げを選ぶことも出来ん)

背を向ければ死ぬ。本能がさづ告げている。

「……しじうが無い、派手なのは避けたかったんだがな。田立つか  
不可能だろ?」

「……何? この場所、お前が侵入するとき『張つた結界』と喰いかねないんだよ

ブウゥン、と魔法陣が空中に浮かびあがる。

「! ? 『聖ジヨーニジの聖域』か! ?」

田に運動して動く魔法陣と、半径一メートル程度の空間の裂け目が

展開される。

「へえ、知ってるのか」

「竜に関しての伝承や魔術は一度研究した事があるのでな」

詠唱を始め、何かを始めるアレイスター。

「なら、竜の一撃を喰らってみろよ。『竜王の殺息』をな

『聖ジヨージの聖域』で発生した空間の亀裂から放たれる、直径数メートルもの光の柱がアレイスターへと迫る。

「チツ……」

何かの詠唱を終え、両手で何かの術を発動させる。

光の柱はアレイスターからわずかにずれ、この場所を覆っていた結界をいとも容易く喰い破る。

距離を取る。縦ではなく、横に。

目と運動して動く光の柱を逸らし、避けながら一撃を喰らわせようとして近づく。

轟！と莫大な風と共にフィアンマの背中に現れた血よりも赤い翼と、聖なる右がその行く手を阻み、『竜王の吐息』が追撃する。

一旦距離を取り、膨大な水を操作し、莫大な風を操作し、槍、槌、刀、剣を作成する。

多種多様な武器へとその形を変え、可視の武器と不可視の武器がその身を抉らうと迫る。

真つ赤な翼、聖なる右、『竜王の吐息』で蹴散らしそうと動かす。

轟音を立てながら次々とぶつかり、相殺し、蹴散らし、衝撃波で辺りを抉る。

その中を移動し、アレイスターはフィアンマの眼の前へと来る。

「残念。もう少し遊べそつだつたのにな」

逆算、終わるぞ。

ソレは最後通告。魔術を逆算されてしまえば、発動の予知も出来るし、止める事さえ出来るだらう。

「ああ、全くだよ」

眼の前へと迫るアレイスターは不敵に笑う。

「後数秒でよかつたんだ」

「ゴッ！－と、莫大な衝撃波が『聖なる右』を超えてフィアンマを攻撃する。

聖なる右である程度は緩和されたものの、その一撃は重い。

吹き飛ばされ、倒れ　　ずに、足を踏み出して持ちこしたえた。

「つーあ……やつぱ強いなあ、オイ」

「な……何故、耐えられる……」

「危なかつたぜ。これでも俺は聖人でね。体の頑丈さなら負けねえ」

攻撃の当たる瞬間、膨大な『天使の力』<sup>テレスマ</sup>で肉体の能力を最大限まであげた。

でなければ、今頃トマト的に頭も潰れていただろ。

それでも、強力な一撃で頭からは血が流れている。

「逆算、終了だ

「クツ……」

咄嗟に張った防御用の魔術をすり抜け、作りだされた『豊穰神の剣』はアレイスターを攻撃する。

『衝撃の杖』は『聖なる右』で押さえつけ、防御用の魔術は逆算され対抗術式を組み込まれ、意味を無くす。

ザン！　と、音をたて、アレイスターの体は上半身と下半身に真っ二つにされた。

同時に両腕を吹き飛ばし、抵抗させないようとする。

ドサツ、と地面に落ち、アレイスターは地面を転がる。

「……負けた、か

「そりだな、お前の負けだ

「お前なら、確かに負けても仕方が無い。納得が出来る分、まだマシだ」

「どうか、と返し、知りたかつた事を尋ねる。

「お前、何で科学の道を選んだ?」

「……叶えたい夢、いや、野望と言つべきか。それがあつたんだ」

「夢、野望ね。……『神淨』『ヒイワス』『ホルス』に関する事か?」

アレイスターは驚き、聞き返す。

「……何故、お前がそれを知っている。いや、最初に私の魔術と拮抗した時からの疑問だった。……なぜ、『ホルス』の域に居る私と同列の力が扱える?」

「簡単だ、俺も既にお前と同じ領域に居るだけや」

「そり、か……なあ、フィアンスマ。お前にあの杖をやる」

「……ソレはまた、太っ腹だな」

「私はもう死ぬからな。魔術を無意識的に発動させているから、まだ生きているが、そろそろ魔力も尽きる」

「……ああ、貰っていく。ありがとよ、<sup>アレイスター</sup>友人」

「ああ、さりばだ友よ<sup>フイアンマ</sup>」

そして、アレイスターは絶命した。

「……ハアー。疲れた」

地面に座り込み、そのまま寝ころぶ。

（流石にノーダメージでいいとは無理か。といつか最初に一撃食らつてたな、そういうや）

結界は恐らくルーシーが張り直しているだろ。ばれていないといいが、と考えながら体を動かす。

頭からダラダラと血を流しながらそんな事を考える。

ワイヤーで術式を構成し、頭の傷を取りあえず治し、アレイスターの杖を拾う。

「……『<sup>ブレイブティングロッド</sup>衝撃の杖』か」

アレイスターの近くに転がっているねじくれた銀の杖を持ち、

『倉庫』に入れる。

「ありがたく貰つて行く。お前は世界で最高にして最強の魔術師だつた」

山が抉れ、大地が裂け、湖が割れ、森を薙ぎ倒している場所で、頂上決戦は幕を下ろした。

## 第六話 頂上決戦（せんじょうかつせん）（後書き）

アレイスターがヤバイ。強過ぎじゃねーの？ つてな感じになつてしまつた。

ぶつちやけ聖なる右ひで、禁書読み直したら自動防衛とか特に無かつた（え  
だつてヴェントの攻撃避けたんですよ？ ジゃあ無いと思つしか無いじゃないですか。

でも、ここまで来て書き直したらなんかズレそうな気もしますが。  
反応出来るのか？ 反応して防いでるんだろうか。異常だとは思い  
ますけど。

感想はいつでもお待ちしています。

## 第七話 大分裂戦争（オースティア）（前書き）

短いです。」了承ください。

そして今回、俺TRUEeeeeee成分が含まれています。

## 第七話 大分裂戦争（オステイア）

大分裂戦争。

魔法世界で起じた戦争の名だ。

ペラス帝国とメセンブリー連合による戦争。

下らない価値観による戦争。

「本当に下らない。良くもまあ飽きずにこんなことが出来るものだ」

人の歴史は争いが作る。

そんな事が唐突に頭をよぎった。

今、俺はアリアドナーのあるホテルに居る。

特に目的も無く、やりたい事も無く、暇つぶしの感覚で魔法世界へ  
とやつて来た。

とはいって、本当に何の目的も無いから何をしようか迷っている。

『紅き翼』に入る気は毛頭ない。

別にぶつ潰してもいいし、放つてもいい。どうでもなるし、  
どうともなる。

メセンブリーナ連合に入ってるしな。

連合に魔法使いはいても、魔術師はいない。

帝国は魔術師も魔法使いもいるが、『紅き翼』の存在があつて中々勝てない。

魔術師は基本的に自分の為にしか力は使わないし、そもそも戦闘に向いている魔術を使う奴も限られる。

戦力にしても対して変わりは無いらしい。

速い話、『紅き翼』って戦争助長をせてるだけなんだよね。

どっちかを潰せば速いんだが、『完全なる世界』<sup>コスモ・エンタレシャ</sup>の連中も動いているだろう。

連中、目的は世界を『完全なる世界』にする為に動いてるが、何のために戦争をさせんだろうな。

両方の戦力を削る為か？

それこそ『コードオブザライフメイカー』でも使えれば問題は無いだろ?』。

使えないと言つ可能性もあるがな。

少なくとも、中核を担つてるのはアスナだった筈だ。

完全記憶能力つて便利。忘れないもんな。

それはともかく、現状ではどっちつかずを通そつかなーと思つてゐる。

でもそれだと暇になるよな。

「お父様、今情報が入りました。帝国がオステイア回復作戦を始めたようです」

。 。 。

。 。 。

。 。 。

アスナ姫、攫つてみるか。

轟音が鳴り響く。

鬼神兵は次々とオステイアの防御を抜け、『黄昏の姫御子』のいる塔へと手を伸ばす。

同時に精霊砲が放たれ、塔を直撃しようとする。

ソレは『魔法無効化能力』能力により弾かれ、再度手を伸ばし、精神砲は消滅する。

手は届く事無く、何かに切り落とされた。

「ふん、『紅き翼』は遅れているようだな」

現れたのは二人の人物。

不自然なほどに自然に、いつの間にか其処に居た。

近くにいた者達は当然、驚く。

「な、何者だ！？」

「言つても分かるまい」

コツコツ、と歩を進め、一人の少女へと近づく。

近くに来てしゃがみ、口に付いた血を拭き取る。

鎖を破壊し、体に治癒の魔術を使う。

「……嬢ちゃん、名前は？」

「……ナ、マエ？……アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「アスナか。俺様はファインマだ」

「……フィアンスマ……？」

「そう、フィアンスマだ」

そう言つて立ち上がり、軽く手を振つて近くにいた魔法使い共を攻撃し、気絶させる。

「こ」の程度か。オステイアの最奥の秘密だと思つんだがな

護衛とか大丈夫か？

そう言つて、周りを見る。

鬼神兵が絶えず攻撃を仕掛けようとしているが、ルーシーの操作する水によつて防がれている。

「お父様、まだ倒しちゃ駄目なの？」

「まだだな。奴らが来るまで待て。一度確認しておきたい……と言つてる間に来たな」

雷が走り、鬼神兵を二つに断つ。

そして現れたのは、三人。

「無事かつ！？」

「随分と遅い登場だな。待ちくたびれたよ

ルーシーは水の操作を止め、フィアンマの傍で寄る。

ソレをみて、『紅き翼』は少しばかり警戒をする。

「あなたは？」

「通りすがりの魔術師さ。面白がったから見に来たんだよ」

「魔術師だと？ ならば敵か！？」

「ふむ、そうだな。どう取ってくれば構わんよ

もとより目的は特にない。

暇つぶしで攫つてみるか、といった感じなので、特に何かしようとする気はない。

「それより、あいつをどうにかした方がいいんじゃないか？」

指差したのは大量の艦隊。

精霊砲等の装備をしたモノや、鬼神兵などが出る。

「……お前が後ろから攻撃しないとは限らないだろ？」「

「そんな事はしない。俺様なら真正面から叩き潰すぞ」

「ひらひらしても結果は同じだが。と付け加える。

「まー、言ひじゃねえか。なら俺と勝負してみるか！？」

「ナギ、それより先にアレーリを止付けるのが先です。」そのままでは落とされますよ」

「……チツ、ショーガねえ。待つてろよ、直ぐに終わらせてやるー。」

そう言つて飛び出し、呪文を唱えて一掃し始める。

アルビレオは一度フイアンマを見た後、戦場へと出る。

詠春は信用できないとでも言いたげに見た後、しぶしぶ戦い始める。

「……お父様は戦わないの？」

「うさ？…………そりだな、この程度じゃ暇つぶしてもならん」

そう言つてアスナの隣に座り込み、アスナを膝の上に座らせる。

「あ、するー」

ぱくぱく、と頬を膨らませるルーシーを宥め、アスナの髪に触れる。

撫でる様な形になつてゐるが、特に問題は無いだろ。

そつと思つて頭を撫で続ける。

漸く終わったか。

そう呟いて、アスナを膝から降ろし、立ち上がる。

「随分と時間がかかったな」

「ハツ、テメエはアレより早く倒せんのかよー」

「できるが、面倒だな」

魔法を続けて使い、大量の敵との戦闘で魔力も大分使っている為、  
息が少し上がりがっている。

「大丈夫か？ 息があがっているぞ？」

「テメエに心配されるほどじゃねーよ

「ふ、威勢がいいな」

「当たり前だ。俺は『最強の魔法使い』だぜ？」

そう言って、構える。

魔力は高まり、魔法を発動しようと準備する。

「こつでもかかつて来い。潰してやる」

「ハツ、余裕かましてんじやねーぞー。」

無詠唱の魔法の矢を多数放ち、そのまま瞬動で横へと回り込む。

フイアンマは地面にワイヤーで術式を書き、動かして盾にする。

「『雷の斧』……」

続け様に放たれた魔法はルーンによる炎剣で防がれ、炎はそのまま焼こうと迫る。

チツ、と舌打ちして離れ、呪文の詠唱を始める。

「『雷の暴風』……」

右腕から放たれる雷の魔力の奔流はフイアンマを飲み込もうとうねりを上げる。

ソレを避け、トン、とナギの横に移動し、そのまま蹴りを放つ。

「！」、あ……」「

咄嗟に腕でガードするも、強烈な蹴りで数メートル吹き飛ばされる。

「……やれやれ、こんなものか。拍子抜けだな

「ん、だとコラアー！　舐めんじやねーぞー。」

「やつ熱くなるなよ」

ククク、と笑いをこらえるようにしながら、フィアンマは歩く。

「まあどの道全員でかかつてきても、結果は同じだがな」

その言葉に、ナギ以外の一人も反応する。

「随分と自信があるんだな」

「ナギ、手伝いましょうか?」

「いりねえよ、こいつは俺がぶつ倒す!」

「言つただろ?、結果は変わらん。人間じゃ、どうあっても俺様には勝てんよ」

「ゴウッ、と巨大な炎がフィアンマの右手へと集まる。

「まあ、今はこんなものだらうな。姫御子は連れて行かせて貰う」

「なつ、待ちやがれ……。」

「『巨人に苦痛の贈り物を』」

放された巨大な炎は、いつも容易くナギ達を飲み込んだ。

その温度の高さにまわりの空気は揺らめき、炎は地面を焦がす。

そして、ゆづくとアスナの元へ歩く。

「では、お姫様。城の外へ」案内しよう」

そう言つて手を取り、術式を発動せよとす。

「待ちやがれっ！…」

炎を抜けて、ナギが飛び出す。

そのまま殴りかかるが、軽くかわされ、蹴りを入れられて距離が離れる。

「空氣読めよ、今襲う所じや無かつたろ」

「知るかよ！ テメエに連れて行かせてたまるか！」

「……ギャンギャンと五月蠅い奴だ」

簡易的に強力な結界を張り、アスナとルーシーを結界の中に入れる。

首を動かし、乾いた音を立てながら、『紅き翼』と相対する。

「『雷光剣』…」

詠春は結界が張られ、被害が出無いと分かると、神鳴流の奥義を放つ。

アルビレオもまた、重力魔法を放つて動きを阻害しようとす。

そして、極めつけには。

「多重千重と 重なりて 走れよ稻妻 『千の雷』 …」

普通ソレ対人、それも護衛対象が敵側にいるときに使つもんじゃねーだろ。という疑問を覚えつつ、強力な雷が迫る。

「無駄だと思うがね」

フィアンマは構えさえ取らなかつた。

その手の指を動かし、見えないモノを掴み取る。

有るはずの無い物がにじみ出たような感覚。それは確かに現実世界に存在していない。

だが、気配や雰囲気といった未分類の情報の所為で、『銀』という色まで付いた幻覚があるように見えてしまうのだ。

ナギはそれに違和感を抱きつつも、目を離さない。

勝敗など、一目瞭然だつた。

強烈で強力なまでの一撃で、詠春とアルビレオは塔のギリギリまで吹き飛ばされる。いや、これは塔から飛び出さない事を褒めるべきだろう。

ナギはその攻撃をまともに受けて吹き飛ばされ、アルビレオと激突した。

「たかが魔法で、俺様に勝てると思つなよ  
」

フイアンマは、今度こそアスナを連れて転移魔術で何処かへと飛ぶ。

その顔は、愉悦に満ちていた。

## 第八話 接触（それぞれのでかい）（前書き）

短め、特に書けなかつた。戦闘シーンが楽な気がして来たのは錯覚では無いと思う。

## 第八話 接触（それぞれの��い）

テーブルに紅茶が三つ置かれる。

「ありがとう」

「いえ」

テーブルを囲み、いつも通りの流れで紅茶を飲む。

俺とルーシー。一人でいつものティータイム、という奴だ。イギリス産の紅茶は旨い。

ただし、今日はちょっと違う。

もう一つおされた紅茶を飲むのはアスナ。先日オステニアから攫つて来た。

それに伴つてアリアドネーから少し離れた場所に、適当に家を建て隠れ家の代わりにしている。

もちろん強力な結界と防衛用の仕掛けがしてある。守る為には当然だ。

一応近くに町はあるから食料とかには不便はない。

「おいしいか?」

「ウン、オイシイ」

「……唯、この子片言なんだよね。後で言葉の勉強でもやせてみるか?」

アスナの頬をふにふことしながら、紅茶と一緒にケーキを食べる。  
ちよと切つて一口食べる。うむ、上手に。流石に慣れてるなーと思う。  
ちなみにルーシー作。教えたのは俺だけね。

ふと視線を感じてみると、横でアスナがジーっとケーキを見ていた。

「……食べてみるか?」

「クンと頷く。

食べやすい大きさに切つて、口へ運ぶ。

「アーン……」

パクッ、と食べる。向この子可愛い。

「……オイシイ」

ケーキを飲み込んで、そう言った。

ふむ、感情が出にくいのか。それだけならまあいいでもなるだらう。

今から一緒に暮らせば、自然と感情も出るよくなれる。と思つ。

紅茶を飲み終わり、立ち上がる。

「ド」「行クノ?」

「うん? ちょっと掃除にね」

「掃除?」

「直ぐ戻つてくるよ。ルーシー、ちやんと見ておけよ」

「分かりました」

「随分とまあえげつない仕掛けをしていたものだね。驚いたよ

「俺様としてはお前が生きているだけでも驚きだがな」

白い髪に淡々とした喋り方。

多分アーウェルンクスシリーズの一番田だろ?。  
ブリームム

まわりにはおびただしい程の血、血、血。常人なら匂いだけで吐き気がするほどの濃い血の匂い。

俺が用意していた『人形』だ。詳しく言つなら魔法生命体っぽいもの。

大半は失敗作で、倉庫には封印されたのが無数に眠っている。

どこの『人形遣い』みたいに不死身の化け物作つてみよつかと思つたが、失敗続きだ。そもそもあれ生物じゃねーし。

どれもこれもが意外と強い。個人的に知能が無いのはアウトだけどな。

強いといつても一體一體のレベルはラカン表で言つ千位だ。俺達レベルになるとヘボに見えるからな。

「なるほど、全滅か」

半数は石化されている。こいつがやつたんだろうな。

「まあどうせ暇つぶしで作ったガラクタだ。ストックなら幾らでもある」

「……やはり君は脅威だね。だが、『黄昏の姫御子』を渡して貰えないかい?」

「理由は?」

「僕たちの計画の為に必要なんだ」

計画、ね。『完全なる世界』か。

知つた」ひやねーよ。そんなの。

「力づくで奪い取つてみるんだな」

「……ふう、出来るだけ穩便に済ませたかつたんだけどね

「随分余裕がましてるじゃないか」

「いひいつ性格なんだ」

「そうかよ。そりゃ結構だ。」

「」の世界の真実を知らず、の「」と過いすよつ、僕たちの計画を手伝ってくれた方がいいんだけどね

「真実ね。この世界が近いうちに崩壊する事か?」

「……何故知つているんだい?」

「せりやお前、俺様の知らない事なんて、それこそ未来位しかねえよ

原作なら分かるけどな。當てにならない可能性が出てきたが。

「それを知つてなお、僕たちの提案は受け入れないと?」

「当然だ」

「何故？ 世界を救うにはこれしか方法が無い。堅実で確実な方法なんだ」

くだらねえ、と呟く。

「どうだつていいさ。そんな事。ある程度の刺激とスリルがあれば、人生楽しくやつていけるし、方法なんて探せば腐るほどある」

「そう、なら飛びつきりのスリルを味あわせてあげるよ。君の考える方法は無意味だからね」

詠唱を紡ぎ、巨大な石柱が現れる。

巨大な質量を持つ石柱は俺を押しつぶそうと向かう。

ソレを見きつて避け、懷へ無理矢理ねじ込むように入った。

無造作に右手をのばし、アーウェルンクスへと向かわせる。

それに気付いたアーウェルンクスは壁を全力展開し、構える。

だが、俺はソレを無視した。

強烈な拳を受け、アーウェルンクスは容赦なく数メートルも吹き飛ばされた。

「がつ、はあ……」

堅牢な壁をブチ破った俺の右肩には、歪な第三の腕が出現してい

た。

「 なみせび、 気軽に破るには少々堅い障壁だつたらし—」

軽い調子でそんな事を呟き、 左手で肩口を叩く。

「 …… もとも、 化け物じみてるね」

「 ハツヤギリモ」

右手をふりふりと動かしながら、 歩く。

「 で？ まだやるかい？ いい加減お前じや相手にもなりない事は分かつただろ？」

「 …… そつだね、 今回は退かせて貰つよ」

ハツヤギリ、 転移魔法で何処かへ消えた。

どの道倒しても新しいの作るだけだらうしな。 無駄だな。

わて、 わてアスナの所へ戻らなことな。

『紅き翼』

それが俺達のチームの名だ。

青山詠春。アルビレオ・イマ。フィリウス・ゼクト。そして俺、ナギ・スプリングフィールド。

最強を自負する魔法使いと剣士の集まりだ。

だが、俺達は前に一度だけ負けた。

俺と同じ赤い髪。異常なまでの威圧感。魔術師と名乗った男は、俺達が守つたオステイアの『黄昏の姫御子』という女の子を連れ去つた。

当然、連れ去られた事に俺達『紅き翼』は非難を受けた。

だから、今度こそ負けない様にゼクトつーージジイロ調の奴に魔法を教えて貰つてる。

あんちよこ見らずに魔法を使って、絶対あいつに一泡吹かせてやるよー。

だが、その前に

「これが旧世界の『鍋料理』か！ それじゃ、早速肉を投入へー！」

「ちよ、ナギ、おまつー。何をいきなり肉を入れようとしてこーるー。」

「いいじゃねえか、詠春。言ひんだから…」

「いいわけあるか…！　いいか、鍋には火の通る時間差というモノがあつてだな…」

くどくど言つてんじやねーよ。つまいモンから先でいいじゃねーか。

「フフフ、知つていますよ、詠春。日本ではあなたのような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょうか？」

その言葉に、俺とお師匠はショックを受ける。

「ナベ・シヨーグン！？」

「強そりぢやな」

シヨーグンか、確かに強そりだ。

「まいったよ、詠春。お前がそれほど偉かつたなんて知らなかつたぜ…」

「つむ…料理は全てお主に任せる。好きにするところ

「おお、なんじゅうのソースつまごじゃ?」

「ホントだうめえつー?」

「これ」「が日本のお誂る『しょひゆ』だよ」

「おお、『レ』が『しょひゆ』か。うめえつー?」

「ナギ、お前日本来た時寿司食つたら」

「うめえな、『レ』。

「……姫子ちゃんにも食わせてやりたい位のうめえだな

「姫子ちゃん……? ああ、オステイアの姫御子の『じゅな』?」

あの時の事を思い出すと今でもイヤうづく。

「あの野郎、姫子ちゃんに酷い事してなきゃいいが

「……しかし、彼が連れて行つた事で、自由になれたのかもしませんよ~」

……そうかも知れねえけどよ。

「何で無理矢理連れて行きやがったんだ

「せうしなければ連れて行く事は出来なかつたでしょ?からね。まともに交渉しても、取り合つ筈があつませんから」

だとしてもだ。

「……どつもキナクセヨな

「何がだ

「戦争とか、姫子ちゃんとかよ。勘だけじ、全部繋がつてゐる氣が済んだよな」

「まやか、そんな筈は無いだろ」「  
だといいけどな。

それにして、あの野郎。納得いかねえ。

「何であんなに強いんだよ」

「なんじゃ、お前が負けたとか言つ赤毛か」

「俺も赤毛だけだ。そつだ。あいつは強かった。俺じや歯が立たなかつた」

「ナギだけではなく、私達もです」

「三人がかりでも、怪我一つ負わせられなかつた

「アソビモ無い奴じやの

俺も思つよ。アソビモねえ野郎だ。

だから」。

「次は絶対に勝つ」

そう言つたら、他の三人が笑つた。何が可笑しいんだよ。

「魔術師でしたからね。私達とは違つて、一人一人が全く違う術を使いますから。敵対するには厄介です」

「帝国には魔術師が大量にいるんだろ?」

「確かにいますが、元々魔術は事前準備が大事ですし、突発的な戦闘には向いてないんですよ」

なら、其処を突くつてのも、作戦としちゃ有りつてわけか。

……駄目だ、知恵熱が出そつだ。

「無い頭で考えようとするからじやろ」

余計な御世話だ。

「……ん?」

風を切る音がして、鍋が飛ばされる。

俺とアル。お師匠は肉を空中でキヤツチし、食べ続ける。

「食事中しつつれ———い!——俺は放浪の傭兵剣士 ジャック・ラカン!——いつちゅやうづば——!」

「なんじゃあのバカは」

「帝国のつて訳じやなさそーだな。えいしゅ……おおー?」

鍋かぶつてやがる。避けろよ、それぐらい。

「フ……フフフフ……フ……食べ物を粗末にする者は……」

あ、詠春がキレてる。珍しいな。

「どーした、来ねーのかあー? 来ねーならこいつちからいッ……」

詠春は大剣を投げた筋肉野郎を田掛け切り掛かり、大剣を真つ一つに斬る。

「おほ

「斬る」

派手な音を出しながら斬り合い、最後に詠春が色仕掛けにかかつて負けてやがった……。

次は俺だ!

『雷の斧』を使って牽制する。

「おつ、出たな』情報その四 赤毛の魔法使いは弱点なし 特徴  
無敵』

「てめえら、手に出すなよ

なんとなくだが、こいつと戦つたら気分が晴れる気がする。

強そうだからな。ぶつ倒してやるよーー。

## 第九話 人形（さいせん）（前書き）

更新が遅い。何故かと言われるに忙しいに御きます。すみません。

今後も遅れて行くと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

## 第九話 人形（さいせん）

人が多い町中。私とお父様、そしてアスナは手を繋いで街を歩く。

最近、町では『紅き翼』が有名だ。

三人がかりでお父様に手も足も出無かつた連中の癖に、グレートブリッジを落とせるだけの実力はあつたらしい。

最も、私達がやろつと思えば一時間程度で制圧できるとは思つけれど。

まあ、今はそんな事は関係無い。お父様とショッピング。アスナもいるけれど、楽しまなくちゃ。

「フィアンマ、アレ何？」

「うん？ ああ、アレはソフトクリームだな。一人とも食べてみるか？」

その問いに私とアスナは直ぐに頷いた。

「よし、ちょっと待つてろ。直ぐ買つてくるから

お父様は直ぐに店の前行き、一人分のソフトクリームを買つて來た。

「ほれ、アスナ、ルーシー」

ソレを受け取り、一口食べる。

「甘くて美味しい……」

「冷たくて甘い」

私達はそれぞれ感想を言つ。お父様はそれを聞いて笑つた後、私達と手を繋いでまた歩き始めた。

『私』といつ個体の寿命は、恐らく後一十年弱。

お父様と違い、永遠の命を持つていない私は、死ぬと知識などの記憶を持つて別の体へと移る。

寿命は個体差は有れど、およそ四十年程度。肉体年齢は既に二十台前半で止まつた。

今の肉体は『神の力』<sup>ガブリエル</sup>のテレズマを流し込まれている為、必然的に『水』系統の魔術を得意とする。

時間を精一杯使って、できうる限りお父様との思い出を残したい。

傍から見ればアスナの方がお父様とは親子に近い氣もするけれどね。

ソフトクリームを食べ終わり、いくつか服を買って、また街を歩いている。

まだ昼過ぎで賑わっているし、帰つてもやることも無いので楽しみ

たい。

そつ思つていた時、ふと既視感があつた。

振り向いてみれば、赤髪の男がこちらを振り向いていた。金髪の女は赤髪の男に何か聞いているようだ。

「……お父様

「気にするな。放つておいていい」

お父様は振り向こうともせず、ゆっくり歩き続ける。私も同じように歩き、放つておいた。

だが、あの男はそのまま放つておくつもりは無かつたらしい。

「おー、待てよ」

ハッキリと、魔力を高めながら止められる。

お父様を見ると、溜息をついた後、振り向いた。

「……やっぱりテメエだったか。通りで見た事あると思つたぜ」

「ナギ、奴と知り合いなのか？ 誰じゃ？」

「姫子ちゃんを連れ去った犯人さ」

「何？ 奴が……」

連れ去つた。と言われてもしょうがないとは思つが、イラつく。直ぐにでも攻撃に移つてしまいそうになつた。

魔力を練り始めた事に気付いたのか、お父様が片手で制する。

「お前も随分と暇そудな。少しは戦争の真実に近づけたのか?」

「……戦争の真実、だと?」

「何だ、まだ気付いていなかつたのか?『完全なる世界』<sup>コズモ・エンターテイニア</sup>の事に

お父様は笑いながらそう言つ。

あの男はそれを聞いて更に強く睨み始めた。

「テメエ、奴らの手先か!?」

「バカか、お前は。それなら態々この子を連れだしたりせんよ」

よく見ればアスナが『黄昏の姫御子』だと気付いたのが、一人はビックリしているようだ。

今のアスナは普通の服を着て、髪も下ろして、お父様と手を繋いでいる普通の女の子にしか見えない。今まで同じ服しか着ていなかつたみたいだし、気付かなくてもおかしく無い。

「……貴様が、『黄昏の姫御子』を……」

「おおつと、怖い怖い。そんな睨みつけるなよ」

からかう様にそう言つお父様に対して、金髪の女が赤髪の男と何か話している。

「ナギ、貴様は奴には勝てんのか？『黄昏の姫御子』は田の前におると言つのに」

「無理だな。俺一人で勝てる相手じや無い。少なくとも、俺とアルと詠春の三人でも一撃も入れられなかつた相手だからな。ジャックがいても分からねえ」

「主が『一人で勝てない』等といふとは、奴の強さは相当な様じやの」

「ああ、正直田の前に居る今でも、奇襲を掛けられる状態でも、勝てる気が全くしねえ」

話し合いは終わったのか、一人はこちらを向く。

「……『黄昏の姫御子』をこちらに引き渡しては貰えぬか？」

「嫌だ、と言つたら？」

「ならば、諦めるしかない。ナギでも勝てんのであれば、今戦つても意味が無い。それより、『完全なる世界』を倒す為に手を貸してはくれんか？」

「オイ、姫さん！」

「黙つていろ。……主の力量は大体分かる。ナギでも勝てんと言つほどの男じや。ならば、この戦争を止める為に手を貸してくれ」

戦争を止める為、ね。

『紅き翼』の活躍で、戦争が長引いたつて事を分かつて無いのかしら。

少なくとも、彼らが余計な事をしなければ帝国が勝ち、戦争は終つていた。

連合がどうなるかと知つた事ではないし、魔術師であるなら連合より帝国領の方が過ごしやすい。

お父様の方を見てみれば、ちょっとと考え込むような顔をしている。

……まさか、彼らを手伝ひ気なのかしら。

「……そうだな、戦争は止めるべきだ」

「ならば……」

「だが断る。どの道魔法世界がどれだけ疲弊しようと、田舎世界に行けばいいんだ。それに、『完全なる世界』の連中も、計画を遅らせざるを得ないだろうしな」

「……どういひ事じや？」

「簡単だ。最終的な目的に最も必要な鍵がここにある以上、奴らは計画を実行できない」

ソレは、確かに前にも言つていた事だ。

アスナの『魔法無効化能力』を使って、世界を再構築する。

その為には、アスナは計画には必須だ。でも、お父様が保護している以上、彼らは計画を実行できない。

「何故、そう思ったのじゃ？」

「単純な事だ。俺様は全てを知っているからな」

「何」

その問いを言い終える前に、どこから魔法による攻撃が放たれた。

轟音と爆炎が私達を包む。

「……また随分と行儀の悪い奴がいたようだな。早めにつぶして置くべきだったか」

私達は水によつて張られた幕で爆発、それに続く爆炎や粉塵等を防いでいる。

あの程度の攻撃では、届かない。

「では……」

「そうだな、肩慣らしでもしておけ」

その言葉を聞き、直ぐに上空へ飛び上がる。

攻撃をして来た魔法使いを上空から補足し、周囲の水を操作して滑るように移動する。

トン、と降り立ち、敵を見据える。

「チツ、見つかったか……しちがい、やるぞ！」

目の前にいる敵の数は二人。奇襲の為だけに来たのだろう、人数は少ない。

二人はそれぞれ詠唱を始め、左右に分かれる。

「『紅き焰』」

「『白き雷』」

挟むようにして放たれた攻撃はルーシーへと直撃する。

爆発音が響き、煙が上がつて粉塵で姿は見えない。

「……やつたか？」

その言葉に反応するよつこ、男の腹に氷の槍が突き刺さる。

槍の突き刺さった男はそのまま複数の槍に貫かれ、倒れた。

「確かに、そういうのをフラグっていうんだつたつけ」

そんな事を呟きながら、煙の上がっている中から出でてくる。傷など一つも無い。

空中に浮かんでいる水球を操り、ローンを刻んで凍らせる。その強度は唯の氷とは違う、異常なまでの強度。

もう一人の男は距離を取り、もう一度攻撃をしようとして詠唱を紡ぐ。

「『紅き焰』」

爆炎がルーシーを包み込む。だが、ソレを突き抜ける様に氷の槍が迫り、男はかろうじて避ける。

爆炎の中、ルーシーは平然と歩いて男の方へ向かう。

足と地面の間に水の膜の様なものを作りだし、滑るように移動を開始した。

それは音も無く、高速。

男が気付いた時には、既に視界から消えていた。

バゴン！ と横からの一撃が振るわれる。

生まれるときに肉体へ『天使の力』を入れられ、人間以上、それこそ聖人に迫る身体能力での膝蹴りを食らわされ、吹き飛ばされる。

建物に当たり、男は壁を破壊しながら内部へ転がる。

(……クソッ、何だあの化け物！)

『完全なる世界』の下部組織として、現状敵対し、危険となつてゐる者の排除を請け負つてここにいる。

本来ならば、奇襲だけで決めるつもりだったのだ。

ならば、奇襲した時と同じように威力が一番大きい攻撃を喰らわせるしかない。

そう思い、詠唱を開始しながら、ルーシーを補足しようと動く。

見つけるのは簡単だ。異様なまでに雰囲気が違つ。それ位は分かる。

一定の距離を保ち、詠唱を終える。

「『燃える天空』！！」

勝つた、と確信した。

あの一撃を人間がまともに喰らつて、生きていられる筈が無い。

そう。

『人間』が『まともに』喰らえばの話だ。

ザン！ と右腕が切り裂かれる。

痛みに呻き、切れた場所を押さえながら逃げようとも動く。

「全く、ちゅうちゅうと逃げ回つて。面倒ね。ついでにこの辺にあ  
るアジトまで潰しておひつかしら」

風で髪を靡かせながら、悠然と歩く。

両足は凍りされ、使い物にならない。

「ひ、く、来るな。来るなっ！－！」

無様に地面を這いつぶばつてでも逃げよつとするが、両足が凍り、  
地面とくつついている為に動かない。

「さあ、私とお父様の時間をつぶした事を後悔なさい」

「ふむ、そろそろ終わつたか」

「ナニガ?」

「うん? ルーシーの方だよ。敵を捕まえたみたいだな」

敵は三人。二人は潰したが、一人はわざと逃がした。

ナギが咄嗟に追跡用の魔法を掛けている所を見たからだ。追う必要は無いと判断した。

あつちは勝手に追跡して潰すだろうし、もとより興味も無い。

そう考へていると、ファイアンスマの目の前にルーシーが降り立つ。

「敵は?」

「既に消しました。問題は無いかと」

「ならいい。やつをと帰るとしよう。これ以上の面倒は御免だ」

そう言つてアスナを抱き上げ、ルーシーと手を繋いで移動用の魔術を使しようとする。

「そりはさせないよ。ここで君は倒させて貰つ」

不意に現れたのは、五人。

アーウエルンクス、そして恐らく他の人形達。

「」の間の一件で懲りたと思っていたんだがな。まさか数を増やした程度で、俺様をどうにかできるとは思ってはいないだろ？」「

「少なくとも、数を増やせば『黄昏の姫御子』を攫う事も出来るだらうからね」

「やってみる。お前、じや相手にならん」

「言ひじやないか、魔術師風情が」

炎を纏つた男が瞬動で田の前に移動し、そのままフィアンマへと殴りかかる。

ソレを横に逸らし、蹴り飛ばす。その間にアスナをルーシーへと渡し、結界を張る。

「ああ、思ひ存分かかつて來い。アスナが傷つくのはお前等とて望むまい」

影の中から引きぬくのは一振りの剣。『カーテナ＝オリジナル』。

ヒュン、と手元で一度回転させ、次元を切り裂く。射程はおよそ一十メートル弱。

切り裂かれた次元空間の『断面』が残骸物質として世界に出力され、壁の様にして現れる。

瞬間、その断面に攻撃が直撃した。

爆炎がまき散らされ、フィアンマはそのまま剣を振るう。

距離はおよそ七十。

「攻撃範囲内だ」

呴くように言った後、見えない何かに切り裂かれるように、障壁を無視して片腕を切り落とした。

「何つ！？」

他の四体を含め、人形達はそれぞれ驚きを返す。

当然だ。自分たちの使う多重障壁を無かつたように、それも剣が届いていない範囲で斬られたのだ。驚かない方がおかしい。

「……やはり、危険だね」

詠唱を紡ぎ、五人は一斉に魔法を放つ。

「『燃える天空』」

「『千の雷』」

「『』おる大地』」

「『千の影槍』」

「『引き裂く大地』」

その全てが対人では無く、対軍勢用の魔法。

人に使えば、肉片など残らないだろ？

だが、目の前にいるのはそんな常識など通用しない男だ。

ヒュン、と剣を手元でもう一度回転させ、百メートル程度の断面の壁を作りだす。

爆炎、雷撃、氷結、影槍、溶岩。

そのうち四つは完全に防げたが、『こおる大地』は足元からの絶対氷結魔法。壁では防げない。

「まあ、予想通りか」

フィアンマはカーテナを地面へと向け、突き刺す。

ドツ！－と衝撃波が四方へ散り、それによる音が響いた。

氷は完全に砕け、半径五百メートル近くに及ぶ衝撃波を受けて町は壊滅状態、人形達も障壁でこそダメージは少ないが、それでもゼロと言つ訳ではない。

「……化け物だね、全く。ここまでやつて無傷とは。一体どうなつているんだい？」

「企業秘密です。つてな」

緩やかにもう一度剣を振り、アーウエルンクスの腕を切り落とす。

『次元』そのものを切っているのだ、障壁を張つた所で防げるわけ  
が無い。

「クツ、『万障貫く黒杭の円環』」

無数の杭がファイアソーマへ迫る。だが氣にも留めない。

もう一度剣を突き刺し、衝撃波を四方へ散らせる。今度は其処まで  
テレズマを込めておらず、自身の周りの杭を弾いただけ。

「『奈落の業火』」

迫る炎をまたも壁で防ぎ、それが消えた後に敵を見る。

「逃げたか。まあ妥当だうな」

周りを見れば、町から少し離れた場所だったとはいえ、相当な被害  
を出している。

早めに逃げるか、と考えて結界を解き、今度こそ転移魔法を使って  
屋敷へと帰った。

「我が主、頼みがあります」

「……どうした、一番目？」<sup>ブリーム</sup>

「我々の力を上げてはくれませんか？」

「何故だ？ そのままでも十分だと思つが」

「奴……かの魔術師に勝つためには、力が足りないのです。これでは計画を遂行する事が出来ません」

後ろを見れば、同じように膝をついて頼み込む四人。いや、他の人形も合わせれば十人近くはいるだろう。

「……ふむ、其処まで強い、か。いいだらう、調整をしてやる」

「ハツ、ありがとうござります」

一斉に頭を下げ、下がる。

造物主は一人夜空を見上げ、呟く。

「魔術師か。お前は一体何者なのだ？」

その言葉は、夜の闇に消えた。

## 第九話 人形（さいせん）（後書き）

ぶっちゃけ能力を考えてみればカーテナを転生時に持つて行くという考え方をもつ転生者はいなかつたのだろうか？

正直凄く強い。読み直して設定まとめたら障壁とか意味無かつた。

そしてアーウェルンクス達強化フラグ。これ以上ってナギ達勝てるのか？

まあナギ達が戦うとも限らない訳ですが。

感想を頂けるとありがたいです。

## 第十話 誘拐（もんしん）（前書き）

サブタイがネタ切れ気味。本編よりサブタイが思いつかない。

この所戦闘ばかりですが、恐らく次回までになると思います。後、  
短いです。

## 第十話 誘拐（まんしん）

屋敷の中を歩く。

アスナは扉を開け中を見ると、いつも通りの光景があった。

「おはよう、アスナ」

「オハヨー、フイアンマ」

紅茶を飲みながら何か本を読んでいる。アスナはフイアンマの膝の上に座り、その本を覗き込む。

アスナがみる前にフイアンマは本を閉じてしまう。

「コレ何？」

「いわゆる『魔道書』だ。アスナが見ると目の毒だぞ」

実際、耐性の無い人間が見れば廃人になる様な代物なのだ。誰が見ても毒だろ？。

最も、殆どの魔道書はフイアンマの知識の中にあるのだが、魔法という技術と混ざったものや魔法の影響がある事による技術の変革によって、新しい魔道書も幾つか生み出されている。

魔道師は其処まで多くは無い。だが、出す人間は確実にいる。

厄介なのは、人一人を簡単に廃人に出来る魔道書を生み出せる人

間が実在する事だ。破壊は『幻想殺し』でもあれば可能なのだろうが、残念ながら存在しない。

最も、破壊すると言つ考えは全く無かつたりする訳だが。必要なら自身が持つておけばいい訳もあるし。

「アスナに魔術を教えてみるのも面白いかもな」

「魔術？」

「そう、魔術だ。『魔法無効化能力』は効くみたいだしな」

実際、気弾や魔法を消せるので魔術を消せてもおかしくは無かつたのだが。精製方法は気に近いとはいえ、一応人間の作り出すものであるからだろう。

だが、『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使った魔術は消せなかつた。

もしもその時の為の備えをしておくのも悪くは無いだろ。

「そうなると……何がいいかな？」

まあ後でいいか。と呟いて紅茶を飲む。

ルーシーは朝食の準備をしている為、ここにはいない。

まるで親子だな。と思つフィアンマ。

確かに傍から見ればフィアンマとルーシーが夫婦でアスナはその子供だと思うだろう。

一人は世界最強の魔術師と呼んでもおかしく無い男。

一人はその魔術師に作られた魔術生命体。

一人は魔術師に助けられた『魔法無効化能力<sup>マジックキャンセル</sup>』という能力を持つ少女。

全員が特異な存在であるが、それ故に引きあつたと考えてもいいかもしねりない。

そして、いつも通り朝食を終え、また魔道書を読み始める。時たまアスナと出かけたり、遊んだりしているが、基本的に知識の収集をしている。

但し、状況次第ではそれだけではないが。

「またが、随分と暇なんだな、お前等」

「暇じや無く、『黄昏の姫御子』がいなければ計画が進まないんだよ」

アーヴェルンクスと悠長に話す。

あの町で戦つておよそ半年。月一くらいの頻度で戦いに来ていて、最早顔馴染みである。

「今回ばかりは形振り構つてられない。これ以上邪魔されると面倒だからね」

そう言って、十人近い人形達の一人がアーティファクトの様なもののを出す。

何か詠唱の様なものを紡いだ後、景色が変わる。

「空間に作用する魔法……いや、アーティファクトか」

「ここなら全力が出せる。周りへの被害を考えなくていいだらうしね」

魔力が高まり、人形達は一斉に散る。

主たる造物主ライフメイカーから調整され、より強化された人形達は『紅き翼』を持つてしても倒しきる事は出来ず、その数は総勢で十七。

そのうちの九体がこの場にいる。

仮に戦闘を行つたのが『紅き翼』だとしても、これら全員の相戦力で戦えば無事では済まない。

にもかかわらず、だ。

「どうした、そんなものか？」

フィアンマは余裕で攻撃を防ぎ、攻撃し、格の違いを見せつける。聖人とは、その身に宿す圧倒的な量のテレズマにより腕力や脚力、五感などの身体機能が大幅に強化されており、簡単に音速を超えるのだ。それを更に魔術で強化すればどうなるかなど、想像に難くない。

更には、次々と放たれる魔術。その種類は多種多様。

十字教に限らず、北欧、日本、歐州等の神話を使った魔術。

シボリックウエポン  
象徴武器を使った攻撃など、数は幾らでもある。

炎が放たれればより強力な炎で飲み込み、それが水でも同じ事。

地力が全く違う。片や実力的には世界最強クラスの『魔法使い』の作り出した人形。片や右腕を振るうだけで星を消し飛ばせる怪物。

「相変わらず化け物だね」

巨大な石柱を詠唱によつて呼び出し、ぶつける。

確実に殺しに来ている一撃だ。人間への殺しができつる限り避けるようにと設定されているにも関わらず。

だが、その中でも感じる違和感。

(……この結界、外との関係を完全に断絶するのか)

アスナに渡した防御用のブレスレットやネックレスからの魔力を感じられない。何か有事の際、フィアンマを転移させる事が出来るようにしておいたものが機能していない。

ならば、可能性は一つ。

(俺のいない間にアスナを連れて行くつもりか)

元々ファイアンマは人数を完全に把握してはいない。当然だ、全員で戦う訳が無い。他にもアーウェルンクス達はやる事があるのでから。他にいないとも限らない。

故に、行動は速い。

影の倉庫より取りだすのは一振りの太刀。千年ほど前、とある刀匠が作り上げた代物。

千年と言う期間、そして強烈な魔力は刀身を露わにするだけで脆弱な結界を破る事が出来る。

『太刀』という言葉の語源は知っているだろ?つか。

太刀、と言う物は、元は『断つ』という言葉から来ている。

そして、その意味を最大限にまで引き出し、最早概念とまで化したその太刀を『結界の中で』振るえどりなるかなど、想像に難くない。

音も無く鞘から刀身を剥き出しにして、構える。

少なくともそれに耐えられるだけの力を、このアーティファクトは持つていたらしい。

「……また新しい武器かい？　一体どれだけ持っているのや？」

「安心しろ、コレはお前等を斬るものじゃない。ここを斬る物だ」

ザン！　と音がした。

『神の如き者』の右手には世界最強の武器が宿っていたと言つ。

そして、そのファインマ<sup>テレグマ</sup>が対応する天使の『天使の力』を壊れな  
い程度に込め、振るつた。

結界は容易く切り裂かれ、アーティファクトを破壊する。

景色が変わり、元居た森が周りにある。

そして、感じる魔力。すぐさまアスナの元へと転移した。

「遅かつたな、魔術師」

其処に居たのは、ライフメイカー造物主。黒いフードをかぶり、ファイアンマを見ている。その手の中には氣絶しているアスナ。

「随分と舐めた真似をするじゃないか、魔法使い」

周りには瓦礫の山。屋敷は半壊し、ルーシーは倒れている。

造物主の周りには四体の人形。そして、合流した九体の人形。アスナに身に着けさせていたブレスレットやネックレスが壊れている。

これらはファイアンマが作ったものだ、生半可な攻撃では傷一つ付かないほどの代物を、造物主は破壊している。

「相當に強固なものだつた。かなりの時間がたつてゐる筈だが、漸く壊し終わつたところだからな」

短い時間に感じるが、ファイアンマ達が戦闘を初めておよそ三十分は経っている。

逆に言えば、フィアンマの防壁を三十分で破壊できると言つ事。その辺の魔術師や魔法使いでは、ほぼ傷さえ付けられない防壁を、だ。

「……君は倒させて貰う」

「自慢の『主人様がいるからって、調子に乗るなよ。人形風情が』」  
フィアンマの右肩から現れた異形の第三の腕が、その身に力を溜める。

自動的に出力が調整される以上、『溜め』という行為には何の意味も無い。だが、あえてそれをする。

このまま攻撃すれば、アスナまで巻き込む可能性がある。

「ヴィシュ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト 契約により我に  
従え 奈落の王 地割り来れ 千丈舐め尽くす 灼熱の奔流 滾れ  
进れ 赫灼たる亡びの地神 『引き裂く大地』」

詠唱など耳に入らない。フィアンマの目に入っているのは造物主とアスナのみ。

滾る溶岩は地を引き裂き、その姿をあらわにする。

「邪魔だ」

唯一言。それだけを言つて、右腕を振るつ。

咄嗟に『危険性』を感じてアーヴェルンクスの前に五体の人形達

が出て、それぞれが使える最大呪文をぶつける。

初めから勝負にならなかつた。

魔法を容易く飲み込み、障壁を最大展開させた人形たちでさえ吹き飛ばす。アーウェルンクスの前にいた五体に至っては完全に消し飛ばされている。

「……やはり、脅威だな」

それだけを呴いて、造物主は『扉』<sup>ゲート</sup>の魔法で移動しようとする。

「逃がすと思っているのか？」

トン、と数十メートルを一步で詰める。そのまま右手をのばし、アスナを奪い取ろうとする。

だが、横からの攻撃と造物主が後ろへ飛び去った事で避けられる。

「『奈落の業火』！」

爆炎がファインマを包み、更に他の人形達が詠唱を始める。

雷撃、爆炎、影槍、氷結。何度も見た攻撃だ。

その間に創造主は転移し、アーウェルンクス達も転移を始めた。

攻撃など、右腕を一度振るえば全て消せる。追撃が何度も成され、時間を稼がれる。

アーヴェルンクスに続いて、人形達も転移して行く。

フィアンマは追う術が無い。魔法が使えないのだ、追うにしても追跡が出来ない。

だが、容易く逃がす筈も無く。右腕を振るつて逃げ遅れた人形達を消し飛ばす。

手応えからして、恐らく三体。

葬つた数は大凡八体。奴ら全員の数を知つて入いれば、過半数以下だと分かる。

半壊した屋敷と、右腕を振るつた所為で抉れた地形。ルーシーは恐らく造物主と戦闘をしたのだろう、半壊した屋敷で倒れている。

「そうか、そうか……ふざけやがって、クソ野郎が」

怒りに顔が歪む。

油断していた。慢心していた。傷こそないが、そんなのは些細なことだ。

心に隙があつたから、自身の力に慢心を抱いていたから。アスナは攫われた。

「良いだろ？ 造物主」  
ライフメイカ

故に、最早力を抑える気などない。完全な力を持つて、殲滅する。

「貴様がそのつもりなら、俺様は　全力で殺す」

その気になれば惑星さえも滅ぼせる力を持った男が、今　その

力を振るう。

## 第十話 誘拐（おんしょ）（後編）

次回、最終決戦。そう遅くならなこと思ひます。

感想など頂けると嬉しいです。

## 第十一話 決戦(けいせん)（前書き）

今までの中でも最長です。何故ここまで長くなつた……。

悪乗りした感がありますが、気にしないでください。

ついでで何ですが、タイトルから（仮）外しました。リメイクと言うかもう別ストーリーなのでちょっと紹介文も書き換えました。

## 第十一話 決戦(けいせん)

晴天の空。太陽が地表を照らす。

世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

それを見ているのは『紅き翼』の五人。

帝国・連合アリアードネー混合部隊の準備が準備され、『完全なるレケイア世界』との戦争が始まろうとしていた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

余裕があるのか、軽口をたたき合つ一人。

「それにしても……あの野郎、姫子ちゃん攫われやがったな。俺達より強いくせにして」

「幾ら強くても、個人ですからね……数の暴力では、恐らく勝てなかつたのでしよう」

一度相対し、勝つ事さえ出来るか分からないとまでの威圧感を浴びたあの男が、数の暴力でどうにかなるとは思えない。ナギは考えるが、頭を振つてそれを頭から追いだす。

今考へてもしづがない。田の前の事に全力をつくす。それだけ。

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おひ」

アリアドネー総長、セラスが報告をしに現れる。

それでも、混合部隊のおよそ一倍以上の数の悪魔がいる。まともに戦えば甚大な被害は免れない。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハツ！ ……それで、あのナギ殿……」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょ？ カー？」

顔を赤くしながら、ペンと色紙を渡すセラス。

「おあ？ ああ、いいぜ？ それくらい」

「そ、尊敬していました！」

緊張感の無い会話。本来なら処罰されてもおかしく無い行為だが、それを咎める者などいない。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国の皇女とタカミチ君も同じだろ？ 決戦を遅らせることはできないのか？」

紅き翼の面々はガトウからの連絡を受けるが、もつ時間がない。此処にいるメンバーだけで決行するしかないのであれどもこれを全員分かつていて。

「ガトウ、それは最早不可能です」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵、『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

『彼』の事を知っている者は思い浮かべただろう。あの少女を守っていた男を。

紅き翼。果てはアーウェルンクス達さえ軽くあしらう程の人物。

その人物が現れたのは唐突だった。

赤い髪をなびかせ、ポケットに入れて、紅き翼の前に現れる。

「テメエ……どういうつもりだ？ 姫子ちゃんを攫われるなんて！」

「ああ、俺様としても油断していたよ。あのクソ野郎。ふざけた真似をしてくれる」

怒りにゆがんだ顔。その憎悪は矛先を向けられていない近くにいた戦乙女達でさえ戦慄した。

紅き翼さえ、その憎悪には冷や汗が流れたのだ。無理も無いだろう。

左手に持っていたのは、一枚の紙。特殊な術で通信用の靈装と化している。

「準備は？」

『いつでも可能ですか』

「よし、出撃だ。大天使『神の力』ガブリエル。全て薙ぎ払え」

瞬間、空が反転する。

晴天で太陽が照っていた筈の空には満月が浮かび、空は黒く塗りつぶした様な夜へと変貌する。そして、その中を飛ぶ一つの影。

『isamt gaiodji a mcnzka』

この場にいた全員がノイズ交じりの音を聞き、高速で移動するその影を見る。

「な、何だあれは……」

誰かがそう呟く。

一メートル前後の身長。女性的な体型。のっぺりした顔と背中にある氷の翼。水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を加護する者。

旧約においては墮落都市ゴモラを火の矢の雨で焼き払い、新約においては聖母に神の子の受胎を告知した者。

常に神の左手に侍る双翼の大天使。『神の力』

天使。

『<sup>テレスマ</sup> 天使の力』として扱う事は魔術師として基本とも言える事だ。だが、それはほんの一<sup>ガブリエル</sup>部、部分的な物に過ぎない。

それの大本　すなわち天使そのものを目撃するなど、人生に一度有るか無いかと言つていいほど<sup>ガブリエル</sup>の事だ。通常ならまずあり得ない。

戦争などと言つレベルでは無い。

子供の喧嘩に爆撃機を持ちだす様なものだ。比較対象にすらならない力の差。

しかも、『大天使』。天使の中でも別格。新旧両世界で喰らいつく事の出来る人間が両手の数だけいるかどうかも怪しい。

それほどの化け物。

偶像を用いた術式で強制的に引き摺りおろした天使。だが、その操作はフイアンマでは無く、ルーシーが行っている。

怪我が完治していないのだ。そもそもフイアンマが戦わせる事すらさせよつとはしなかつた。

それでも、力になりたいと言つたルーシーの為に用意した『兵器

。

全人類相手に喧嘩さえ売る事のできる怪物の手綱を任せたのだ。

故に、その力は全力の半分に届かない程度。だが、それだけでも世界を滅ぼすには十分過ぎる程の力。

夜となつた天空に浮かぶ術式、『アストロインハンド天体制御』によつて形作られるその術の名は

『しんりく神戮』

かつて、神の怒りに触れ、墮落都市ソドムと「モラ」を一夜で消滅させたという伝説がある。そして、それを再現した魔術。

天体と言う強大で膨大な力を持つスクリーンに星と言ひ点を配置し、それらを線で結ぶ事によつて発動させる。

だが、それは天体という物を使う以上、時と場所を限定される。

しかし、天体そのものを操作し、自身に有利な夜を強引に作り出し、この星座を配置した。

全力を出せば星の半分が焦土になるほどの威力。それを、場所と威力を限定させる事で即時発動を可能とする。

端的に言つてしまえば。

「この天使は、世界を終わらせるだけの力が存在する。

例え相手が一騎当千の化け物だらうと、世界と戦える怪物だらうと皆等しく虐殺されるだらう。

魔法使い、魔術師。双方の最大戦力を尽くしたとして。

大天使に勝てる人間など、『右方のファイアンマ』を除いてしまえば存在しない。

仮にアレイスタークロウリーが生き残つていれば、勝つ事は出来るだらう。だが、死んだ人間を頼つた所でどうにもならない。

新世界にどれだけの兵力、戦力があつた所で。

鬼神兵は一撃で難ぎ払われるだらう。戦艦は一撃で沈められるだらう。魔法使いは虐殺されるだらう。魔術師は逃げる事さえできないだらう。

人類としての意味で『終わらせる』事ができる存在なのだ。

それほどの存在を間近で見て、とある者は右手で十字を切り、とある者はその姿に感嘆した。敬虔な者であれば涙しても恥じる事の無い状況だ。

氷の翼は、一度振るわれるだけで数百体はいるであらう悪魔達を引き裂き、次々と葬つて行く。

「どういう事だ……アレは、一体なんなんだよ……」

ナギの弦きに答える物はいない。

戦艦など不要。戦力など不要。

唯神の力<sup>ガブリエル</sup>が力を振るえれば、それだけで『完全なる世界』<sup>コズモエンドレケイア</sup>はほぼ壊滅する。

帝国・連合アリアードネー混合部隊は戦慄していた。自分たちが命を掛けて戦うべき相手が、いとも簡単に引き裂かれている状況を見て。

紅き翼は放心していた。異常で異質で異形で異端。圧倒的な力を前に、戦闘狂のナギとラカンさえもが凍りついていた。

ルーシーは唯、フイアンマの用意した神殿で神の力を操作していった。そして、同時に親でもあるフイアンマに戦慄さえ感じていた。

『神の力』<sup>ガブリエル</sup>は世界を終わらせる事が出来る。それほどの化け物を、フイアンマは『悪魔を掃除する為』だけに呼び出したのだから

『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を操るのは現在の西洋魔術では珍しい事ではなく、普遍的な事。

だが、圧倒的にレベルが違う。ここまでの大規模となるとまずあり得ない。技術の問題もそうだが、全人類を敵に回して完全に虐殺できる程の力をこつも簡単に取り出す事。それ 자체が異常だった。

フイアンマは唯見据える。自身の所為で攫われたアスナを助け出

す。その為だけに一步間違えば世界を滅ぼしかねない化け物を放つた。

悪魔達は見る見るうちに減つて行く。

氷の翼で、空から降り注ぐ火の矢で。

後から後からどんどん湧いているが、関係無い。増えるよりも、減る方が圧倒的に速い。

フィアンマは右手をかざす。田標は『墓守り人の宮殿』。

そして、小さく口を動かす。

直後、音が消え、莫大な閃光が迸つた

それは『墓守り人の宮殿』までの間に居る悪魔達を根こそぎ吹き飛ばし、消滅させ、宮殿の壁を破壊した。

フィアンマの方には不格好な第三の腕が出現している。

トン、と一歩だけ踏み出す。

距離など関係無い。間に床が無くとも、空中その物でも、間に障害が無ければ仮に一万キロメートル離れていたとしても、フィアンマは変わらず一歩踏み出すだけで距離を詰めるだろう。

宮殿の内部には、九体の人形達がいた。

「……外のアレも君の仕業かい？ 全く、厄介な事をしてくれた」

「知った事じや無いな。貴様らを潰すのは俺様一人でも十分過ぎるが、面倒なんだよ」

其処に、以前と同じような雰囲気は無い。

殺氣、悪意、そういうた負の感情をぶつけている。

「君には随分とやられたからね。決着をつけよう」

「抜かせ。大して力を使って無かつた俺様相手に遊ばれてる程度の人形が、今更相手になるとでも思つていいのか？」

ドン！！ と見えざる何かがファインマを中心に炸裂する。

それは殺氣だ。人形であり、莫大な殺氣を浴びる事に慣れているアーウェルンクス達さえ、肌を刺す様な刺激を感じるほどの中圧。

そして、同時に第三の腕が光を宿す。

ゴバッ！！！ と莫大な力がアーウェルンクス達を襲う。

咄嗟に幾重にも防御の魔法を使い、ダメージを軽減する。アスナがどこにいるか分からない以上、完全に力を振るう事は出来ない。

故に、一撃を喰らっても生き残った。

半壊した通路の中、アーウェルンクス達は起きあがる。ダメージこそ追っているものの、その数は減っていない。

「げ、ほつ……全く、規格外だ」

「アスナはどうだ。答える」

「言ひ訳には、いかないね」

未だ睨みつける。

不快感を感じたフィアンスマは容赦なく右腕を振るおうとした。探すなら別に方法がある。

ゴガンッ！

爆音を立てながら、『紅き翼』の面々が現れる。

「見つけたぜ、テメエ！」

「紅き翼……また厄介なのが来たね……」

「ふん、ボロボロのお前等の相手には丁度いいだろ？ 雑魚は雑魚同士で潰しあえ」

フィアンスマは右手を振り、壁を破壊して移動する。

黒いロープを纏い、造物主は術式の準備を終える。

「黄昏の姫御子……我が末裔よ。その本来の役割、果たして貰おう

造物主の目の前にはアスナがいる。

その術式は世界を終わらせる魔法。魔法世界を『完全なる世界』へと変える物。

「……速かつたな、魔術師」

「随分とまあいろいろ仕掛けていたようだが、俺様の前じゃ全部同じだ」

フィアンマの後ろには、幾重にも仕掛けられた罠、防壁。

「全く持つて、随分と舐めた真似をしてくれた」

殺氣をぶつけながら右腕を構える。

「ゴッ！…と光の爆発が飛んだ。

真正面からの強力無比な攻撃は造物主を吹き飛ばし、アスナから距離を取る。

巻き込む訳にはいかない。力が強力すぎるが故に、近くにいれば巻き込んでしまう。

「……ふ、やはり強いな……人形達が危惧するのも分かると言つ物アレら

だ

「お手製の人形なら紅き翼共が相手してやつてる頃だらうよ」

「それをことも簡単にあしらひ前の強也。やはり殺すには惜しい

」

「コツッ！… とこう爆音が響く。

「……ふざけた事を抜かすなよ。俺様よりお前の方が強いとしても思つていいのか？ たかがこの程度の『幻想』を作りだしたからど」

真正面からの手加減した攻撃を、完全とまではいかないが、防ぐ。それだけで造物主の力が計れる。

「『』の世界を『幻想』と知つてなお、戦いを挑むか

「俺様に関係無いからな」

唯、告げる。

魔術師とは本来こういつ物だ。

他者の為では無く、自身の為に動く。

それがたとえ、世界を滅ぼす事になろうとも、人類が破滅しそうとも、自身の目的の為なら、どんな被害も厭わない。

造物主の後ろにいくつもの魔法陣が浮かび上がる。

それから放たれる攻撃を消し飛ばし、ファイアンマは歩を進める。まるでそれが死へのカウントダウンともいふ様に。

「私の様な神の力を持ち得ておきながら、何故救おうと思わない！？」

「知ったことか。やりたいなら勝手にやれ。最も、俺様の癪に障るようならば密赦なく殺すがな」

「ゴバツー！」と爆発が起る。

一いつの攻撃がぶつかり合い、余波で建物が壊れかけている

ヒュン、と造物主は移動し、何処かを向く。

黒い光線の様な者はファイアンマでは無く、アーウェルンクスとナギを貫いた。

そして、そのまま強烈な攻撃を放ち、戦闘不能へと追い込む。

「余所見をするか。随分と余裕だな」

爆発的な閃光が造物主を包み、吹き飛ばす。

「……チツ、逃げ足だけは速い野郎だ」

苛立つたように囁くファイアンマ。既に造物主はいない。

「テメエ、何してやがる……」

声のした方を見れば、満身創痍となつた紅き翼がいた。

「無様だな。その程度の実力で良く生き残れたものだ」

それだけを告げ、フィアンスマは造物主を追つ。

「ゴッ！…と爆発が起きる。

それは強烈な一撃。まともに受けければ肉体など跡かたも残らない。

「チヨロチヨロ逃げ回りやがって。其処まで俺様を苛立たせたいか？」

フィアンスマの体には傷一つない。

対して、造物主の体には傷がいくつもできている。

この時点では、既に実力の差が表れていることよりも良いことだ。

「は、ははははは！ 私を倒すか人間。それもよからう、私を倒し英雄となれ！ 羊達の慰めともなるうー。だが、ゆめ忘れるな！」

造物主の後ろには膨大な魔法陣が所狭しと浮かび上がる。

「漸く本気か？ その程度で勝てるなどと思つなよ」

そして、その魔法陣から膨大な魔力を使つた攻撃が放たれる。

並みの魔法使い・魔術師ならば確実に死に至る攻撃を。

それでも、フィアンマには届かない。

「全てを満たす解は無い！　いざれ彼らにも絶望の帳が下りる。貴様も例外ではない！　神の力を手に入れた私に出来ない事が、貴様に出来るのか！？」

黒い光線の様な攻撃を一撃で吹き飛ばし、造物主を殴り飛ばす。

右腕には膨大な力が宿り、光線ごと造物主を飲み込む。

「随分と上から目線で言つんだな。その程度の事しかできず、勝手に諦めて神の名を騙る雑魚が」

実力で言つならば、アレイスターの方が余程強い。

「方法なら幾らもある。お前が探すのを諦めただけでな。お前如きが、神の名を騙るなよ」

神。

ソレは世界を滅ぼす天使を手足として使う存在。

事実として神に会い、その莫大な力の一端に触れたフィアンマだからこそ言える事。

造物主では、神の名を語る事などできない。

唯、幻想を生み出しただけの存在だ。

「貴様もいすれ私の語る『救い』こそが唯一の次善策だと知るだろう！」

魔法陣から現れる最大規模の攻撃。まともに当たればまず即死は免れられないだろう。

だが、その程度。

その気になれば星ひとつ塵にする莫大な力を持つた右腕を振るい、その攻撃は造物主を飲み込んだ。

「舐めるな。信じる者は救われる。この世界が生きる事を諦めないなら、俺様が救つてやる」

トン、と降りる。

瞬間、壁が破壊され、ナギとゼクトが現れた。

「テメエ、造物主はどこだ！？」

「俺様が倒したさ。あの程度」

「何！？ アレを倒すとは……ウツ！？」

黒いロープがゼクトを覆い、突如として魔法を放つ。

後ろからの攻撃に対応出来なかつたナギはそのまま倒れ、反応出

来たフィアンマは相殺する。

「……武の英雄に未来を造る事はできぬ。貴様達には何も変えられまいよ」

魔力の奔流で周りが白くなり、外が見えない状態になつた。いや、外から見えない状態。と言つた方が正解かもしねり。

「だが果たして……自らに問うが良い。人とは身を捨ててまで救うに足るものか?」

造物主の問いには答えない。

「……人間は度し難い。英雄よ、貴様達も我が2600年の絶望を知れ。さらばだ……」

造物主に乗つ取られたのであろうゼクトは、そのまま煙の様に消えかけ、フィアンマが放つた光の奔流に飲み込まれた。

「お師匠……」

ナギの呟きが聞こえた。

「師匠オおおおおおーーーツ」

その声を聞きながら、フィアンマはアスナを助けに向かつ。

コツン、コツン。

足音が響く。

最初に造物主と相対した場所。其処にアスナはいた。

「アスナ。迎えに来たぞ」

「……フィアンマ……？」

周りには白い光が回っている。恐らく世界を終わらせる魔法が発動したのだろう。

外を見ればわかる。いくつもの艦隊が『墓守り人の宮殿』を取り囲み、大規模反転術式を開闢させている。

だが、このまま行くならアスナは封印されてしまう。それはフィアンマの望むところでは無い。

故に、倉庫から取り出した人形を使う。

アスナそつくりのその人形は、一時的にアスナの力を奪つて、本体の代わりに封印されるだろう。

指先を少し切り、血をたらし、『魔法無効化能力』を人形へと移す。この時の為の研究だ。とはいっても、時間制限は存在するのだが。

大凡半年間。この為に研究を続けて来た。

ギリシア神話には、ピュグマリオンという男の掘った人形にアプロディティー・テという神が生命を与えた、と言う神話がある。それを元にした術式。

擬似的な生命体を作りだし、能力を封印させる。これならば、まづ気付かれる事は無い。

大規模反転術式によつて、人形は氷の様なものの中に閉じ込められて行く。

本人は転移魔術によつてルーシーのいる神殿へと移動できただろう。

「おい、どうすんだよお前。あの姫さんに助けられちまつたが」

ほぼ虫の息のナギが現れる。

氷の中に封印された偽物のアスナを見て、一度溜息をついた後、近くの柱に寄りかかる。

「そうだな……離れた方がいいぞ。お前じゃ死ぬ……ああ、俺様は英雄とやらに興味は無い。お前等に奴らを倒したという『結果』をやろう」

「何を」

「ゴッ！ とナギは蹴り飛ばされ、百メートル近く離れる。

「ゲホッ、何しやが」

瞬間、火の矢がフィアンマに降り注ぐ。

ソレは外で未だに悪魔達を掃討している神の力による『一掃』だ。

限定された範囲の爆撃が『墓守り人の宮殿』を削り取る。だが、反転術式によつて封印されたアスナには、攻撃が及ばなかつた。

ナギが次に目を開けた時、フィアンマは既に消えていた。

誤解しないよつ言つておく。

何も、フィアンマは世界を終わらせるつもりで大天使を召喚した訳では無い。

小さい事件など、大きい事件に埋もれる物だ。

昼から夜へ変わる事。天空に浮かぶ術式とそれによる爆撃の様な攻撃。そして、極めつけには紅き翼と完全なる世界の死闘。

これだけの事があつていれば、フィアンスマの事など誰も記憶に残らない。その行為を含めて。

当然ながら一部を除いて、の話だが。

アスナを助け、MM元老院から追手がかかる事を面倒に感じたフィアンスマは、アスナの身代わりを置く事にした。ソレに気付くのは五年後か十年後か。

そして、神の力を還し、ルーシーとアスナと共に、旧世界へと渡つた。

## 第十一話 決戦（せいやくせん）（後書き）

ガブリエル登場。な話。

こいつだけでも完全なる世界潰せた気がしますが、ソレやるとアスナまで巻き込まれるので無し。

フィアンマがあの程度で死ぬはずが無い、と紅き翼は分かつてゐるかも知れませんが、誰にも言わないでしょうね。

紅き翼と関係が無いとあつといつ間に話が進むんですよね。  
数年後、とか飛ばしていいですかね？

感想を頂けると嬉しいです。

## 第十話 中間（つなわ）（前編）

遅れすみません。いろいろ調べてたら遅くなってしまって……  
その間に短いです。繋ぎの話です。

## 第十一話 中間（つなぎ）

「ハハハ、見てみろルーシー。オステイアが崩落だとさ。あんな方法でしか止められないんだ、仕方ないと言えば仕方ないが」新世界に存在する魔術組織からオステイアに関する情報が、ファックスの様に送られてくる。

多くの人々を救う。素晴らしいね、全く。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい、とはアリカ姫の事だろうな。いや、女王か。

面白そうに口元を緩め、それらの資料に目を通す。

「しかし、思つた通りだな。魔法消失現象の中でも『<sup>テレグラム</sup>天使の力』を使用した魔術は消されない」

「それは、オステイアの崩落で実験していた事なの？」

「そうだ。アスナ相手に『<sup>テレグラム</sup>天使の力』を使う様な魔術は使えん。下手をすれば怪我をさせてしまうからな」

特に何かに使える訳でも無い。アスナを相手取るときに使えるだけだ。そんな物は意味が無いだろ、うけど。

どの道、『聖なる右』を使えば終わるのだから。

「だがまあ、知つておいて損は無いだろ、うつ。いつか役に立つときが来るやもしれん」

ククク、と笑いをこらえながら呟く。

『英雄』となつたナギ・スプリングフィールド。まあ俺が役目奪つたとはいへ、奴も『造物主』に勝てたのは事実だろ? な。

しかし、あのクソ野郎。フィリウス・ゼクトの体を奪つて逃げたか。どうやら奴専用に殺す為の術式を作り上げる必要性があるらしい。イラつかせる。

ルーシーが紅茶を運び、俺の前においた。

それを飲みながら、今後の事を考える。

アスナは別室で寝ている。これから世界をゆっくり見て回るものいい。アスナに外を見せてやりたいからな。

ついでに俺の術式の開発。アイデアが無い。

と、言ひ訳で、数年世界を見て回つた。

イギリスやフランス、ロシアやドイツなどヨーロッパを中心とした

年ほど。

魔術を使うには前提として『宗教防壁』が必要だ。だからアスナには十字教の信徒となつて貰つた。

信仰心があればいい。俺はその辺はあまり氣にして無いけどな。

そして、オステイアが崩落して一年が経つ。つまり、アリカ女王の処刑。原作でも中々に名シーンだったので興味本位で見に行く事にした。

空を飛ぶなんて自殺行為はしない。魔術師であれば当然なんだが、魔法使いはその辺知らないらしい。

まあ、魔法使いが何しようと魔術師あんまり気にしないからな。

「空を飛べば落とされる。イカロスの民かつての」

自分の目的果たす為に戦う事はあるだろうけど、死んだら伝えれな  
いしなあ。

「落とされる。つて、第十位の『聖人』ペテロの伝説使つた魔術?」

「お、よく知ってるな。アスナ。勉強したか」

頭を撫でて褒める。嬉しそうに顔を綻ばせるアスナ。可愛いなあ、ホント。言葉の大分流暢になってきたし。

五キロキロ程度なら見える。魔術には遠隔監視の出来るモノもあるんだよ。例えば土御門が使つてた『理派四陣』とか。あいつは三キ

口程度しか見えなかつたが、魔道図書館を甘く見ぢやいけない。

そんな訳で現在鑑賞中。

『……これより戦犯アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの公開処刑を行う！』

元老院の一人が罪状を読み上げている。長つたらしく、飽きた。ここで戦艦の一つや二つ落としたら面白そうだな。

「駄目だよ、お父様」

……考えている事が顔に出ていたらしい。ルーシーにバレた。

ついか思つたけど、魔力も氣も使えない『ケルベラス渓谷』。多分ここでも『天使の力<sup>アレスマ</sup>』は使えるんだろうな。実験してみるか？

長く生きてると暇つぶしになる様の大抵やつてしまつてゐるからな。小さい事でもやってみたくなる。時間はあるんだしつて事で。

と、そんな事を思つてゐ間にアリカ姫が落とされた。

落ちて数分。アレはラカンだらう。元老院の頭を掴んで何か言つてゐる。

『録画はここで終わりだ。で、今からここで起じるとは『なかつた』ことになる。わかるな？』

カメラが止まつた事を確認して、『紅き翼』の面々が現れ、暴れ始

めた。

よくよく思えば暴れる必要無いんじゃねーの？ アリカ女王助けたら元老院に目をつけられるし、犯罪者になるだろ？ だったらこのまま隠れした方が楽だとは思うけどな。

頭が悪いのか、感情で行動しているのか。いや、この手を選んでるあたり、感情で行動してる訳じゃないみたいだが……隠れるだけなら方法は幾らもあるだろ？

せめて一泡。つてんなら元老院に直に『千の雷』でもブチ込んでやればいいのに。

ナギがアリカ（もつ女王は要らないだろ？ と言うかメンドイ）を連れて走り回る。……アスナの血筋なんだよな、アリカって。

そう考えるとちょっとおせっかいを焼きたくなる。と言う理由にして速攻で魔術の準備。

ギリシア神話に出てくる主神たる全能の存在、ゼウスをモチーフにした術式。風系統の『<sup>テレスマ</sup>天使の力』を使用したモノだ。

天候、特に雷を司る天空神でもあり、オリュンポス十一神をはじめとする神々の王。それ以外の気象を操作する神としても知られている。

それを利用した魔術は空に雷雲が現れ、天からの雷撃を呼び、魔獸の蠢く『ケルベラス渓谷』へとその一撃を落とし、轟音を鳴らす。

威力は相当。少なくとも対軍レベル。

「ナギ達に当たらない様にしていたから大丈夫だろ？」

咳きながら『理派四陣』を通して『ケルベラス渓谷』を見る。

二人とも相当驚いていたようだが、目立つた外傷は無い。周りの魔獸が焼け焦げてるが。

「……どうして助けたの？」

アスナが不思議そうに聞いてくる。俺の性格が分かつてきたんだろう。普段ならこんなことしないしな。

「そうだな……アスナの血筋だからかな」

本音は最近作ったこの魔術を試したかっただけ。『あの野郎<sup>造物主</sup>』をブチ殺そうと準備していたが、やはり死を司る神の術式でも構成すべきかな。

バロールの魔眼とか作ってみるか。

こいつは威力はあるが、それだけ。広範囲に使うにしても準備がいる。俺以外には確実に月単位で準備期間がいるだろう。調整も難しいし。

まあ俺がやつたとばれた訳でも無いだろうし、あのシーンを見てさつと消える事にしよう。

五分後。

例のナギが告白といつシーンを見て、アスナに「ケツコンって何?」とか聞かれたりしながら、用意していた陣とか靈装とか片付けて帰る事にした。

アスナが知るにはまだ早い……いや、年齢的には遅いのか? でもそれ言つたら俺もだしな。

結婚なんてするつもり皆無だけども。そもそも相手がいない。

寿命的に。俺ほぼ無限だしな。

といつか、本格的にやる事無くなつたな。じつじよつか。

魔法世界だとアスナの事気付く奴がいるかもしないんだよな。封印されてるつて知つてるなら見間違いで済むだらうけど、念には念をつて感じで調べられると面倒。

「何処か行きたい所ある?」

「特に無い」

「無いわ」

……なら、一旦バチカンに戻るか。黒の教団最奥の暗部『神の右席』のリーダーが暇潰しで世界旅行つて何かアレだ。

仕事なんて無いし、大抵の事は他の奴らに任せればいいだろうけど。

「そして久しぶりのバチカン。つてか」

「何を言つているんだ？ フイアンマ」

出迎えたのは『後方のアックア』の席についている女。本名とか知らん。

「久しぶり、アックア」

「お、アスナ久しぶりだな。いつも可愛いなお前は」

ギュッと抱きしめながら愛でている。可愛いモノ趣味全開だなコイツ。

実力は高い筈なんだが、百合疑惑が掛かってる。特に誰も気にしないけどな。コイツ以外男だし。

「テッラとヴェントは？」

「二人ともどつか行つたわ。ここ最近特に何も起こつて無いから…ああ、テッラが面白い魔術結社がいるって言ってたわね。資料は

其処

「面白い魔術結社？」

一体何だ？ と思いつつ資料に目を通す。

……なるほど、確かに面白いな。

「魔法使いと魔術師が組んだ結社か。目的があつたか、利益が一致したか。今まで無かつた集団ではあるな」

元々魔法使いと魔術師では使う魔力がちがう。簡単に言ひとffオーマットが別だからだ。

ソレを合わせる事にかなりの労力を使う上、それをやる位なら普通にどちらかを使った方が速いと言つ事もあり、今まで存在してこなかつた。

恐らく、魔術世界での戦争が原因だらうな。

戦力として、魔法使いと魔術師の利点を合わせたモノ。それを創りだそうとしたんだろう。

「……ふむ、経験知稼ぎには丁度いいかもな。アスナ、行くぞ」

「え、アスナも連れて行くの？」

「オマエが愛でる為にいる訳じゃないぞ」

アスナはトテトテと歩いて俺の傍に来て手を繋ぐ。ルーシーは俺が

読んでいた資料に目を通している。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

「いや、もう『必要悪の教会』<sup>ネヤナコウベ</sup>が動いてるんだけど

「いいんだよ、どうせ暇潰しだしな。俺様達の方が早く見つけられるかもしかんだけ」

「それは良いけど、どうやってアンタ達の事を説明する訳? 私達一応表にはほとんど知られていない暗部よ?」

「誤魔化す」

「誤魔化すってちょっと待つ」

最後まで聞かずに部屋を出る。あのレズ女の近くに立るとアスナの教育に悪い。

魔術結社の名前は『四精靈の旅立ち』。少しは俺達の暇つぶしになつてくれよ。後十八年位暇なんだからな。

## 第十一話 中間（つなぎ）（後書き）

次回はまた戦闘？ 魔術師同士の戦闘はアレイスター以外では初めてだつたり。

神話だと調べるのがキツイ……何か使えそうなの無いですかね？ Wikipediaで調べてはいるんですが、直ぐ探せない、という。

ちなみに質問ですが、魔術サイドだけクロスオーバーとかありますか？

神崎とか出してみたいので。

感想はいつでもお待ちしております。

## 第十二話 魔法魔術（まほうもじゅつ）（前編）

短いですが、次回からは長くなる予定です。

クロスオーバー始めました（何

## 第十二話 魔法魔術（まわぬじゅつ）

### 魔術結社『四精靈の旅立ち』

精靈を魔術で操る事によつて、魔法の様に始動キーや詠唱を短縮する事を目的とした戦闘特化の結社。

元は大分裂戦争の際、帝国が魔術師に魔法使いの力を解明させようとした事が最初だ。

魔法は精靈プロジェクトに対して、魔力と言う対価を払つて魔法と言ひ奇跡を得る。その過程には、『詠唱』と言うモノが存在する。

当然、これは魔術師にも言える事だ。魔力を対価に奇跡を得る。

だが、魔術師は必ずしも詠唱が必要とは限らない。

必要になるのは陣だつたり靈装だつたりとまちまちだが、場合によつては詠唱は不需要となる。

帝国は、其処に目をつけた。

つまり、魔法を詠唱なしで使おうとしたのだ。

現在でも無詠唱魔法や対軍用の地雷式『戦術広域魔法陣』は存在する。だが、無詠唱はあくまで下位レベル。対軍用の『戦術広域魔法陣』はコスト的問題と準備時間の問題で突発的な戦闘に使えるものでは無い。

特に『紅き翼』の様な強力な力を持った英雄と呼ばれる連中と張り合おうとしたのだ。生半可じや駄目だと語ったのだろう。

そして、帝国はその開発に力を入れていたが、今まで全く違う体系を取つていた為、そう簡単に行く筈も無く。

最低限で年単位は必要だと思われていた上に、開発し終わる前に戦争が終わってしまった。

だが、足がかりをつかんでいた魔術師と魔法使い達はそのまま研究を続け、成功した。

「と言つのが今回の連中のデータだな」

「よく覚えてるね、フィアンマ」

そりゃ俺は完全記憶能力者だし。忘れる事は無い。

帝国は帝国で追つてゐるらしいが、あまり進んでいないらしい。何に使うかもわからない。魔術師なら魔術名があるだろうじ、目的があるんだろうけど。

戦闘に特化してゐる訳だし、傭兵とかやつてるのか？

アリアドネー辺りだと学問の一つだしな、魔術。そっちに持つて行つて売るとかするとまた便利になるだろう。宗教と一緒に習わせているらしいが。

何せ、詠唱が要らないと言つ事は詠唱が『出来ない』者でも魔法が使える事を示すからな。

別に其処は良いんだが、問題は連合が魔術師を敵視していると言う事。

魔法至上主義者ともいえる連中がいるからな。魔術師が魔法を使うのを良しとしない連中もいるらしい。

場所はニヤンドマ。ヘラス帝国の外側に位置していて、連合に比較的近い場所だ。ここに潜伏していると情報があった。

「アスナはまだ魔術はよく使えないだろうし、今回は俺やルーシーのをみて勉強かな」

「勉強？」

「そ、アスナは賢いからな。直ぐに使えるようになるわ」

元々魔術は誰でも使えるしな。魔力さえあれば。

「フィアンマと同じく使えるよつこ、頑張る」

「そうか、アスナなら出来るぞ」

相当な勉強が必要だけどな。基本知識さえあれば魔術は使えるものだし。

「と、見えてきた。あれが報告にあった『四精霊の旅立ち』のアジトだな」

「どうするの？ お父様」

「ん、 そうだな。 とつとと潰して知識を手に入れて、 後で再現してみるか」

言つが速いか、 掌に出現させた炎で扉をブチ破る。 古い教会みたいな場所だ。

「誰だ！？」

怒号と悲鳴。 わつきの一撃でやけどを負つた奴もいるだろうな。 すると、 相手の一人が出てきて一枚のカードを持つて、 こちらへ向ける。

「『雷の暴風』！」

お、 本当に魔術で魔法を使ってやがる。 成功してたのは本当らしいな。

見た感じ威力は普通の詠唱した奴と変わらない様だし、 後で再現してみるか。 面白そうだ。

取りあえず攻撃を風の楯で防ぎ、 そのまま風で相手に砂をかける。 地味に目に入ると痛い。

だが、 そんな事の為に懶々砂をかけた訳では無い。

『ザントメンヒン』と呼ばれる妖精がいる。

ドイツの伝承、 民話にててくる小人、 妖精の類。 砂をかけられる

と眠りこなすといふ。

それを利用し、一時的に眠らせる事が出来る訳だ。それでも時間制限はある。最大で三分。最短で一十秒。

「よく見ておけよ、アスナ。魔術はその意味を持たせられれば十分な効果を發揮する」

眠った奴から拘束していく。後で『必要悪の教会』<sup>ネセナコウス</sup>の連中に引き渡してやるが、

中に入ると、いきなり魔法の射手の雨霰。

全員、手に持っているのはカード。詠唱の意味をカードに書いたとかしたのか？ ルーン文字みたいなものだな。

アスナがいる手前、さっくり殺すという訳にもいかない。いつこうとき、ヴァントの『天罰術式』が羨ましくなるね。戦闘の必要性が無い。

取りあえず適当に、先ほどと同じ様に眠らせて行く。

ちょっと広めの教会。まだ奥があるようだな。そう思い、奥のドアを開けた

「『千の雷』……」

爆音。雷撃が迸り、雷鳴が轟く。対軍用殲滅魔法を放たれ、強力

な雷撃が俺の身を焼くつと迫る。

が、その適度でやられたる様な実力じゃ無い。

とはいって、至近距離からの不意打ち。良ければ後ろにいるアスナ達に当たるとなれば、『聖なる右』を使うしかない。

唯一一度振るだけで雷撃をかき消し、敵の姿を見る。

「……ほう、なるほどな。面白い使い方をする」

「……っ！？ 何故、生きている？」

敵の女は俺が生きている事に驚いているらしい。ま、至近距離で広域殲滅魔法使って生き残れるなんて思わないだろう。

しかし、面白い。

『三位一体』の理論を使った方法か。自身と『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を降ろす為の偶像、そして精霊を当てはめたらしい。

元々三位一体と言うのは、『三つ全てが違つ様に見えて実は同じ』と言つ事が本質だ。それを逆に利用して、三つ全てが同一だと認識を変換させたらしい。

いづなれば、自身が『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を宿した精霊となる様なモノだ。精霊そのものになるのだから、当然始動キーも詠唱も必要無い。

『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を使用すれば、使える魔法は制限されるものの魔力を使用する事無く魔法を発動できる。

さつきの奴らはルーンの描かれたカードを使った方法。こいつは三位一体の理論を利用した方法。もしかすると、他にいくつかあるかもしだんな。

使えるようになつておいても、損は無いかもしだん。一度実験してみるか。

その前に、こいつを片付けるのが先だがな。さつきから何度も雷撃を飛ばしてウザい。

「クソツ、クソツ！ 何で、何で死ない！？」

「その程度の魔術・魔法で俺様に傷をつけようなど、千年早い」

文字通りな。どうしてもといつならアレイスター・レベル連れてこいや。

これは確かに強力だが、儀式場が無ければ意味が無い。偶像を破壊出来れば、魔力を使う必要が出てくるし、そもそも三位一体の理論そのものを崩せる。

教会の地面に描かれた術式。右腕を一度振るえば放たれた魔法ごと術者を吹き飛ばして破壊する。

一度見た為、覚えた。いつか使うときが来るかもしだんな。

吹き飛ばした女は瀕死だが、死んではいないので軽く回復魔術を行使して拘束。

その場に放つておけば後で『必要悪の教会』の連中が回収するだ  
る。

「お疲れ様、フイアンマ」

「おひ。速かつただる」

「意外とあっけなかつたね」

「俺様が相手をしたからな。まあ面白い物が見れた。後で再現して  
みよう」

取りあえずはバチカンに戻るとするかな。

一週間後。

魔法を魔術で使つといつ事もある程度再現していた所で、連絡が  
入つた。

「何か用か?」

『それはこっちのセリフよ。フィアンマ、あなたまた『必要悪の教會』<sup>ス</sup>の仕事取ったわね』

「別に良いだろ？ 事件は解決。一件落着だろ？ ローラ

『そう簡単に済む話じゃないのだけど。仮にもあなたは『黒の教団』最暗部、『神の右席』の一員でしょ？』

「それがどうした？」

『誰が解決したかが問題なのよ。あなたの名前を出す訳にもいかないし、こちらとしては困るのよ』

「そうだな、誰か適当に名前をでっか上げる。実際、潰したのは俺様だが、捕まえたのはちゃんとしたメンバーだろ？」

『……ハア、何を言つても無駄な様ね。相変わらず自分勝手な男』

「それが俺様だよ。長い付き合いでしょ？ これからはまだ付き合いで多くなりそうだけどね」

『うつ言つて、連絡をきられた。

相変わらずだな。融通が効かん。ま、もう少しあの部署にいればそつ言つた事はあまり気にしなくなるだろ？』

しかし、最初に会つた時は驚いた。

ローラ・スチュアート。今は『必要悪の教会』の一員だが、恐らく後のイギリス清教『<sup>アイクビショップ</sup>最大主教』になる女。

一応イギリス清教はあるしな。『黒の教団』の傘下ではあるが。

というか、そもそも内部の派閥の一つだし。

この分だと、ウイリアムとかいそうだ。探してみようかね。

## 第十二話 魔法魔術（まわむじゅつ）（後書き）

ローラは土御門から馬鹿口調を教えられたので今はまだ普通の口調。といふか、英語ですし。

神話などの乗つていてるサイトや本を紹介していただいた方に感謝を。ありがとうございます。

今回からクロスオーバー始めました。魔術側のみですし、原石も出ませんが。

数年ずっとばす予定。いつまでも数年進んだとかだと進まないので。次回は天草式の人間が出るよー。（幼女時代の）

感想はいつでもお待ちしています。

## 第十四話 女教皇（プリエステス）（前書き）

ネタ自体は出て来ましたが、書く時間がありませんでした（言い訳）

後書きにてちょっとお知らせがあります。

……五和出無かつたなあ……（遠い田

## 第十四話 女教皇（プリエステス）

聖人。

そう呼ばれる人間達がいる。

見た目は普通。一般人となんら変わらない、唯の人間だ。

だが、実際には全く違うと言つても過言ではないだろう。

世界に20人といないと言われる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間。

偶像の理論により、『神の力の一端』をその身に宿すことができる。

具体的には、聖人の証『聖痕』<sup>ステイグマ</sup>を開放した場合に限り、一時的に人間を超えた力を使う事も出来る。

特に魔術を使用していない状態でも幸運など何らかの加護が存在する、恵まれた存在だ。

フィアンマもそれに該当する。とはいっても、神が直に聖人にしたのだが。

唯の聖人ではあるが、十万三千冊の魔道書とそれ以外の膨大な魔術の知識でコントロールすることにより、長時間力を使い続ける事が出来る。

制御そのものが出来れば、相当な量の『天使の力』<sup>テレスマ</sup>を操作する事は可能だ。

魔術師たちの中では核兵器の様な扱いをされている上、圧倒的な能力を持つ故に単独行動を好む傾向があり、ファイアンマの様に組織に属する聖人は稀。

その身に宿す圧倒的な量のテレスマにより腕力や脚力、五感などの身体機能が大幅に強化されている。

つまり、唯の人間相手なら近接戦闘で負ける事は無い。

それが、聖人。

「その聖人が、日本にいるの？」

「そう。所属は天草式十字棲教つて言つてな。一百年くらい前に伝手で知り合つた連中だ」

伊能忠敬が天草式十字棲教と繋がっていた為、其処からファイアンマも繋がっていた。と言う訳だ。

「ルーシーもあいつ等と会うのは始めてだな」

「うん」

そう頷くるルーシー。身長は百一十センチ位。肉体が新しい物に入れ代わったのだ。

もつて五十年程度。意外と長く持つた方だが、やはり天使を直に

降ろしたのが肉体に響いたらしい。

本来、天使を降ろして操作するなど言語道断。自殺行為と取られてもおかしく無い、出来る筈の無い事だ。寿命が縮んでもなんらおかしくは無い。

大分裂戦争から九年。去年の冬に入れ代わった。今度の肉体は『<sup>テレスマ</sup>天使の力』を入れてあり、対応する天使は『<sup>ウリエル</sup>神の火』。

「歳は……アスナの肉体年齢と同じ位かな」

「私と同じ？」

「ああ、友達になれるかもな」

実際にはまだアスナの肉体に作用している不老の魔法だか薬だかの効果で肉体は成長していない。最近アックアを相手にするのが面倒になってきた事もあり、日本へ来た訳だ。

一度ロシアに行つた事もあるが、ワシリーサに会わせて酷い目にあつたものだ。アスナを見るなり跳んで抱きつこうとした所を迎撃。

今度から気をつけようと心に決めている。

今いる場所は九州。天草式の本拠地は九州にあるのだ。という情報も実は嘘の可能性があるのだが、取りあえず昔使っていた隠れ家の一つに向かう事にする。

前にあつたのは十年くらい前だつたな。と思いだしながら道を歩く。

元々隠れキリストンが幕府の迫害から逃れつつも十字教を信仰するため、仏教や神道でカモフラージュに偽装を重ねた宗派であり、多角宗教融合型十字教とも称される。

その背景が使う術式にも色濃く残り、パツと見ただけでは普通の台所にしか見えずとも、実はそれが儀式場だったりするのだ。

用いる戦術もまさしく『偽装』で、本命かと思えばフェイントで、フェイクかと思えば本物の魔術が襲つてくる。

それだけではなく文武両道で、日本刀から西洋刀まで何でも振り回せる、少数だがかなり戦闘能力の高い集団。

フィアンマが使う『いくつかの種類の魔力を同時生成する事』も発端はここにあつたりする。

二十分ほど歩き、着いたのは一件の家屋。

ギィ、と音を立てて扉を開け、中に入る。

「勝手に入つて良いの？」

「別に大丈夫だろ。俺様とは知り合いなのだし、問題は無い」

フィアンマの地位の事は知らず、フィアンマと言つ一人の魔術師として知つているのだ。

地位の事は『黒の教団』でもかなりの深部にいる者しか知らない。それ以外に知っている者がいたとしても、知るに値しないと判断されれば消される。

それほどに隠された存在だ。そう易々と教える訳にはいかない。

土足のまま上がり込み、居間へに入る。

特筆すべき点は無い。それほどに普遍的でこの家の家にもありそうな居間だ。

だが、こういつた場所こそが天草十字棲教の独壇場だ。普遍的、だがそれ故に見落としがちな魔術的意味を拾い、使用する。

この居間にあるのは転移術式。隠れ家の一つとして使われているのは間違いないらしい。

「アスナ、ルーシー。こっちに来い」

一人を同じ方向に向け、術式を発動させる。

所謂風水の魔術だ。日本、陰陽道に関する物だが、元々フェイントの為に仏教や神道の魔術もある程度使える者がいる為、風水を用いた魔術を使っても何ら不思議では無い。

簡易的な、短距離の移動魔術。遠距離には未だ忠敬の大日本沿海與地全図を使つた魔術を使用しているらしい。

だが、今はこの近くに潜んでいるという事が分かるだけでも儲けものだ。少なくとも多少の手がかりはあるだろう。と判断した。

転移した先にいたのは十数名の武装した者達。じつやら敵と思われたようだ。

まあ、現在は迫害されていないとはいえ、魔術結社に乗り込んできたのだ。警戒されてもおかしくは無い。

「……ん？ お前、ラトか？」

どうしようか、と迷っていると、一人の男が出てきてフイアンマの名を呼ぶ。

「ラト？」

「俺様の名だよ。ラト・ティストロ・フイアンマ。あまり名乗らないから知ってる奴は少ないけどな」

実際、『神の右席』として活動するときは『右方のフイアンマ』と名乗っているし、知り合いにも大抵フイアンマで通している。

というか、『神の右席』として活動する事自体稀だが、後は名乗つても大抵フイアンマと呼ばれる為、ラトと呼ばれる事には慣れていない。

「お前は確か神裂雄吾、だつたな。お前の娘を見に来てやつたぞ。聖人らしいな」

「相変わらず情報が速いな、お前。自慢の娘だよ」

雄吾が親しげに話しているのを見て、敵では無いと判断したのだ

「うつ。周りの者達が武器を下ろす。

「済まないな。火織　ウチの娘の名前だ　を守ろうと少しばかり殺氣立つてゐるんだ。何せ聖人。祝福されて生まれてきた子供だからな。いずれこの天草式はこの子が率いるだろ？」

奥から出てきたのは、長い黒髪をポニーテールに纏めた少女。アスナと同じ位の身長だ。

「はじめまして、神裂火織です」

「ほう、礼儀正しいな。お前の教育の賜物か」

「いや、この子は元々こいつだ。それに教育は嫁さんがやつてるから俺は口出しきできねーの」

そう言つて笑いあう。アスナは歩いて火織の近くまで行く。

「はじめまして。アスナです」

火織を真似、自分も同じように名乗る。

「……所で気になつてたんだが、この一人の子は？」

「俺様の娘」

その言葉に、雄吾は絶句した。

あまりの驚きに劇画チックな顔になつてしまつている。

「お前に……娘、だと……」

「冗談に決まっているだろう。片方は魔術生命体。もう片方は拾つたんだ」

間違いではないのだろうが、もう少し言い方は無いものかと雄吾は思つ。

「しかし、お前が子供を拾うとはね。何があつたんだ？」

「<sup>あつち</sup>魔法世界の戦争が原因だよ。巻き込まれたのさ、下らない大人の汚い自己保身にな」

「……そうか。関西の呪術協会でも、あつちの戦争での被害が出ているらしい。子供を残して死んだ奴もいるらしいしな」

関西の情報は基本的に流れてこない。

何故なら、関西は『黒の教団』の傘下では無いからだ。理由は單純。『十字教徒では無い』から。

天草式は傘下に入れるものの、入る事はしない。今はまだ、その時ではないと思っている。聖人である香織が利用される事態は避けたいと思っているのだろう。

フィアンマの事は流れの魔術師と認識している。というか、フィアンマが組織に属しているなど信じられないのだろう。

「この二人、同じ位の年齢だな。よかつたら友達になつてやつてくれ

雄吾がアスナに向かつてそつと言つ。

肉体年齢は六歳程度だが、実際には百年程度生きてゐる。もう少しの間肉体年齢はそのままだらう。フィアンマ自身、特に気にしている様子も無い。

数年後、再開した時にいろいろ困惑するだらうな。等と香織に考える。それはそれで面白そうなので放つておくが。

「火織、こっちがラト・ティストロ・フィアンマ。お前と同じ聖人だ。で、こっちの女の子は？」

「ルーシーです」

ペーリとお辞儀をして返答する。今の子供は礼儀正しいな。と思考してくる他の天草式の連中を散らせて、テーブルに座つてお茶を啜る。

一口お茶を飲んだ所で、雄吾が質問をぶつけた。

「で、結局何の用なんだ？」

「言つただろう。お前の娘が聖人だと聞いて文字通り飛んできた

「魔術師が空を飛んだら落とされるだらうが。いや、でもお前なら確かに飛んできただけはあるけどよ」

フィアンマが普段どんな認識をされてゐるのかよく分かる一言だつた。

「其処まで出鱈目な存在では無い。まあ出来ない事は無いんだろうが、不可能に近いな」

「幾ら十万三千冊の魔道書を持つていたとしても、この魔術に関してだけはどうしようもない。」

「それほどに、絶対的な効果を持つ魔術だ。」

「聖人。俺様でも他に数人しか見た事が無い。それほどに貴重な存在だ。知りあつておいても損は無いだろう?」

「……まあ、そうだな」

「気が向けば魔術でも教えてやろうかと思つたが、ここで学ぶ事はまだ沢山あるだろう。」

「それに、聖人は生まれつき力のコントロールの仕方を知っている。本能的に、身を守る為に存在しているのだ。」

「いつか天草式から出る時でも来たら、俺様を頼つてくれて構わん。連絡は……そうだな、バチカンに来て教皇に俺様の名を出せば分かるだろ?」

「火織に、そう告げる。」

驚いた様に眼を丸くさせ、呆けた顔をするが、直ぐに戻る。

「……はい。その時は、よろしくお願ひします」

聖人は唯でさえ珍しい存在。その上、知り合いの娘だ。面倒を見るに抵抗感は無い。

「だが、その前にお前はもう少し子供らしくしや」

「い、子供らしく？」

「そう。子供らしく。遊びたいなら遊んで良い。好きなことしたいなら、他人にあまり迷惑かけない範囲でやればいい。所で、この子何歳だ？」

「七才」

「……まだ小学生か。それでこの礼儀の良さ。どんな教育してるんだ、お前？」

「俺も何でここまで礼儀正しい子になったのが分からん。嫁は其処まで厳しい教育なんてしてない筈だが」

頭を捻りながらそう告げる。どうにも嫁には頭が上がらないらしい。

「つーか、教皇にお前の名を出せば分かるってどう事だよ……」

「知り合いなのさ。いつでも連絡が取れる」

さういふと話す。普通なら機密事項扱いの筈だが、フィアンスマはそんな事は気にしないらしい。

といふか、信用するかどうか別の話ではあるが。

「お前……相変わらず変な所に人脈あるよな」

天草式と言い、教皇と言い、一見繋がりが無もそうな部分に繋がりがあつたりする。

「変と言つた。長生きしてるところんな奴と知り合つのや」

雄吾自身もフィアンマが寿命で死なない事を知つてゐる。魔術でそう言うモノを研究してゐる者もいるし、不思議では無い。実現しているのには随分驚いたものだが。

「次世代の子を育てるのが楽しみか？ ジジイだな、お前

「殴られたいか？」

「勘弁しろ。聖人の身体能力で殴られたらバラバラになつちまう」  
手加減位はするだろうが、防護魔術を使わねば骨の一本や一本は簡単に折れるだろう。

(……せうじや、<sup>クイーンオブオナー</sup>ヒリザードンとの見習い近衛侍女も聖人だった  
(な)

シルビアと呼ばれる女性を思い出す。まだ見習いだった筈だが、結構しつかりした子だったなあ。等と思つ。

「ま、ここに来たのも暇潰しだ。折角日本に来たんだし、京都に行ってみるか」

「京都と言えば、その近くにある鳥族の里で忌子が生まれたらしくぞ」

「忌子?」

アスナが首を傾げる。火織も不思議そうな顔をして聞いている  
「禁忌とされる鳥族と人間のハーフだな。鳥族の場合は白い翼が禁忌の証だとか言われてる」

今までいない訳では無かつたが、特に興味も無かつた上に鳥族の問題だ。勝手に首を突っ込むという訳にもいかない。

「所謂、『本来生まれてきてはならない子』って奴だな。俺達聖人の様な『祝福された者』の対極にいるとも言えるだろう」

「……そんな子が、いるんですか?」

「不思議か? 同じ一族でそんな使いをする事が

火織が頷いて、続きを聞いたそつに耳を傾ける。

「簡単に言えば、混血つてのが嫌なのさ。自分達の血に誇りを持っている。だから違う存在である人間との混血を嫌がる。これが黒い翼ならまだよかつたんだろうが、白となれば話は別。捷に従つて殺されるか、迫害されるか。その二択しかない」

その言葉に、驚きが隠せない。

祝福される事は有れど、迫害される事など決してない自身の状況

と比べ、顔をゆがめる。

「救われぬ者に救いを。十字教徒の考え方としてはこれはありだが、相手は半妖。最悪『黒の教団』からも追手がかかるだろ?」

最も、鳥族の里から追い出され、何処かにさまよえの話だ。人間に害を成すとされる妖怪。人間と妖怪のハーフもまた、人間に害をもたらすと思う奴もいるだろ?」

妖怪を滅ぼす為に魔術を研究する奴もいる。理由は何であれ、『滅ぼす』と言う事に拘る辺りは流石魔術師と言えるだろ?」

「ま、俺様にしても其処まで踏み込みはしないわ。これは鳥族の中の問題だ。俺様が首を突っ込む事じゃ無い」

お茶を飲みながらそう続ける。

今回の子に関して興味が無いわけでは無い。時期と可能性からすると桜咲刹那という可能性もある。

年齢は恐らく四歳位だろう。年代から考えて。子供の面倒を見るのは好きではない。自分の事が自分で出来るなら別に良いのだが。

「さて、そろそろ行くか」

立ち上がり、アスナとルーシーを連れ、部屋を出る。

場所はさうやら少し山に入った場所らしい。周りは森だ。

「じゃあな。バチカンに来る事があれば、またいつか会えるだろ?」

それだけ告げ、ファインマ達は転移した。

## 第十四話 女教皇（プリエステス）（後書き）

神裂火織の幼女時代の話。というか俺のパソコン、かんざきを変換すると神崎になるんですね。不便。

さて、ちょっとしたお知らせ。刹那、どうしまじょうか（え

選択肢は二つ。

フィアンマが連れて行くか、原作通りか。

フィアンマが連れて行くと神鳴流は使いませんが、魔術師になります。原作通りは言わずもがな。

ちなみに木乃香と知り合つかもわかりません。いや、其処を変更したら駄目か。

どうしようかな、と迷っています。魔改造アスナと魔改造刹那。後魔改造はもう一人加えるつもりですが、刹那は未だに迷っています。魔改造にしても、多分原作始まるときアーマーの影が相当薄くなる予定なんで。

と言う訳で、ご意見あればお願いします。アンケートの様な形になりますが、よろしくお願ひします。

期間は三日後の十四日午前零時までです。

## 第十五話 魔改造（アスト）（前書き）

予想以上に長くなりました。ここまで長くあるつもつは無かつたんですけどねえ。

刹那は接触しない、といつ事で落ち着きました。下手に干渉するとまた原作が変わって「ゴチャゴチャしそうなので。

## 第十五話 魔改造（アスナ）

バチカン。聖ピエトロ大聖堂。

とある一つの部屋、其処に四人の人物がいた。

『前方のヴェント』『後方のアックア』『左方のテッラ』

そして、『右方のフィアンマ』

この四人は『神の右席』といつ、黒の教団のピラミッドに存在しない隠された最奥の暗部。

その座は常に四、天使の中で特に重要な四大天使に対応する四人のメンバーは、必要に応じて『中身』だけを次々と入れ替えて存続する。

最も、最悪『右方のフィアンマ』さえいれば神の右席は機能するので何の問題も無いのだが。

本来ならば、各部署のトップでさえその存在を知る事は出来ない。知ることが出来るのは黒の教団のトップである教皇のみ。

偶然知ってしまったとしても、知るに値しないと判断された場合。始末される。

それほどの、知る事の出来ない。否、知つてはならない暗部。

そこに、アスナが放り込まれた。ルーシーは用事がある為、今はいない。

「キャーー！ やつぱ可愛いわあ！ お持ち帰りしたい位……！」

「アスナ、やつていいぞ」

「えい」

ポン。と軽い音を立ててアツクアの体が火達磨になる。

「あちつ。酷いわね、もつ」

一瞬間が空いた後、火が勝手に消える。アツクアの体には火傷の跡どころか服に焦げ目すらついていなかつた。

「次は本気」

フリーネート加工されたルーンのカードを持って構えながら距離を取り。

「さつきのといい、ルーン魔術を教えてるの？」

「まあな。ポピュラーだろ？」

「だが、応用性も高いしな。初心者に使わせるには丁度いいんじやないか？」

ヴェントが面倒そづに告げる。

ルーン文字とは元々複数の文字を合わせて使うモノだ。文字一つ一つが意味を持つ上で、いくつかの文字を合わせて効力を上げたり範囲を広げたりと応用が効く。

例えば、火を意味する『カノ』というルーンに対し、『アルジズ』と呼ばれる保護のルーンを組み合わせれば、それは火から身を守る為のルーンとなる。

別のモノでは、『カノ』に対して『ベルカナ』という成長のルーンを合わせる事で、それは強力な炎となるのだ。

単純な足し算とは少し違うが、梵字やルーンと言った文字自体に意味や力のあるモノは、大抵こういった使われ方をする。

とはいっても、慣れなければ組み合わせて使うのは難しいし、組み合わせ自体無限にあると言つても過言では無いので、ルーン魔術を使う者はまずどんなものを使うかを探す。

それは火を取り扱つた神話や、水や氷と言つたモノを使う神話。とにかく、歴史の流れる上で淘汰されなかつた神話と言う出来事を再現する事を目指す。

歴史に淘汰されなかつたという事は、それは最適化された魔術の教本の様な物だ。参考にすれば発現させるのは楽で簡単になり、より強力なものへと昇華する。

ここで今回の議案の確認。『アスナを神の右席レベルの魔術師にしよう』

「さて、アスナに魔術を教え始めて十二年。基礎的な知識と方法は全て教えた。後は詳しく述べる魔術系統なんかを学ぶだけだ」

神の右席の基本的に共通する特徴として『原罪』を可能な限り薄めたことにより、人の限界を超えた神・天使クラスの魔術を使えることが可能となる。

ヴェントの『天罰術式』然り、アツクアの『聖母の慈悲』然り、テツラの『光の処刑』然り、フィアンマの『聖なる右』然り。

フィアンマについては元からの才能もあるのだが、それは今は関係ない。

重要なのは、極端に調整した所為で普通の魔術が使えないという事。

だが、アツクアとフィアンマに關しては別。

アツクアはその特性、『聖母の慈悲』で『神の右席は普通の魔術を使えない』という制約を和らげる事で。

フィアンマは薄める原罪を取捨選択することで、ある程度「知恵の実」を残しており、神の右席としての力に加えて『人間用魔術』も火属性に限られるが使用できる。

加えて『一つの属性を操るということは、広義において他の属性に影響を与えることである』という理論に基づき、火属性を介して他の属性を操作することと、実質的にあらゆる属性の魔術を行使できる。

そもそも神の右席に入るレベルの魔術師は大抵が一流、入れなかつたとしても、候補に選ばれるだけで一流だと認められるようなものだ。

このメンバーから教えて貰うっていう事は、相当恵まれた環境なのだろう。

単純に言つてしまえば、全員規格外と言つ事なのだし。

……まあ、魔術師を名乗るなら自分で自分の魔術を作りだしてこそなのだが。

「具体的にどんな魔術教えるかは決めてんのか？」

「いや、まだ決めていないし、その辺はアスナが決める事だろう?」

初めからほぼ全ての魔術を知っているフィアンマや、調整されるために自分に合った魔術を探す必要の無かつたヴェントはその辺の事は分からぬ。

まあ、ヴェント自身普通の魔術を使っていた時期もあるが、見た目通り若い為、殆ど使っていない。それでも、魔術師は知識が物を言う。一流には変わり無い。

「じゃあ私が決め……」

「やあ

今度は強烈な爆風。火のルーンを局所的に使う事によって爆発的

な熱風を生み出したのだ。

「ちよ、酷いつ！？」

慌てて防御魔術を使い、熱風を防ぐ。下手すれば喉がやられるし、火傷は必至だろう。

幾らレベルの高い魔術師とはいえ、至近距離からの攻撃を喰らえばそれなりにダメージを受ける。防御するのは当たり前だ。

「……何か、アックアに対する行動が反射的になつて来たよな。アスナ」

「アックアも毎回やられている癖に懲り無いですよねー」

「まあこれだからな。ちなみにこの間ワシリーサに会つた時も似た様な事になつた」

被害者がアスナなので、最悪『聖なる右』使ってでも吹き飛ばすつもりだが。変態は要らない。

ちなみにヴェントが風の『流れ』を操作する事で被害はアックア一人が受ける事になつた。

「アスナ。こっち来い」

アックアの近くにいると抱きつかれる。それが嫌なのか、フィアンマの言葉を聞いた途端にダツ。と走り出してフィアンマの膝の上に避難する。

特等席として氣に入っているのか、ソリに座ったアスナは「ハハ」と笑っている。

そして、それを見てアックアがまた鼻血を出していた。

「…………やつぱり、一遍コマイシツにかした方がいいのかね」

「あたしはどうでもいいけどな。いや、アスナの安全を考えるならばとにかくした方が良いだろ」

「むしろ安全を確保するためには少しくらい無茶した方が良い気もしますがねー」

残念ながら、ヴェントの天罰術式は『自身に敵意や悪意を持つた者を問答無用で昏倒させる』魔術。欲望は敵意でも悪意でも無いしそれぞれヴェント自身に向けられたものじゃない。

「んー……アスナ自身にコマイシツにかかれるほど」の実力を身に着けさせた方が速いだろうが、時間がなあ……」

「時間なんて幾らでもあるだしょ」

「いや、早めに教えておかないとコマイシロコノンでレズだろ？ 危ない気がしてしょうがない」

正に敵は身内にいるといった状況である。いや、正確には全員が全員を身内などとは思って無いが。

唯一つの目的の為に協力する。それが魔術師だ。

アックアの実力自体はそこらの魔術師では相手にならない。増してや、魔術師として経験も知識も圧倒的に足りないアスナでは簡単にあしらわれるだけだろう。

最も、其処までガチバトルをするような事態にはならないだろうし、なつたらなつたでフィアンスマが飛んでくるので心配など要らないのだが。

「アスナは本当に可愛いですよねー。ヴェントとは大違い」

「何言つてやがるこのヒリマキトカゲ」

「ヒリマツ……敵意を向ける気は有りませんよ。唯ちよつと術式の調整をするだけですがねー」

取り出したのは一つの靈装。小麦粉をギロチンの様に変化させ、ヴェントを狙つ。

「やる気か、テツラ」

対するヴェントが取り出したのは有刺鉄線が巻き付けられたハンマー。それを振るう事で圧縮された風の術式を使って攻撃する。

一つの攻撃がぶつかり合い、爆炎によつて飲み込まれる。

「この場で戦闘を始めるとは、仕置きをされたいのか?」

右手を向け、爆炎を起した原因であるフィンガースナップを繰り返す。

掌の上に現れた炎はファインマの意思一つで規模を変えられる。今の一撃で二人ともここから弾き飛ばされてもおかしくは無かつたのだ。

最も、テッラならば『光の処刑』で防げただろうが。

少なくとも『右手』の事を知つていて、尚且つそれを行けられてゐるとなれば、この場で戦闘などする訳にもいかず。

「チッ。 しようがねえな」

「IJの場合は矛を收めましょうかねー」

渋々といった様子で席に着き直す一人。

アツクアも鼻血は止まつた様で、いそいそと席に着き直す。

「で、最終的にアスナはどんな魔術を使つつもりなんだ?」

ヴェントが腕を組みながらそつと聞く。結局は其處に集約されるのだ、聞くのが手つ取り早く。

「んー。 分かんない。 フィアンマはルーン以外にもいろいろ教えてくれたけど、多過ぎて絞り込めない」

「一体何を教えたんですかねー?」

「ルーン以外だと、神道に近代西洋魔術、鍊金術、陰陽道、カバラとかいろいろ」

「どんだけ教えてんだよお前……」

「もはや異教徒とか言つレベルでは無いですねー」

異教徒というか、十字教という一つの教義においてここまでいろんな魔術を使えること 자체がおかしいのだ。

厳密に言えば、多数の宗教の知識を魔術を使う為だけに得ている。十万三千冊の魔道書を使うという事は、当然そう言つた別宗教の魔術も存在する。

だからこそ。知識が異常なまでに揃つてゐるからこそ、フイアンマには扱える。

アスナには天草式の様な魔力精製の方法で魔術を使わせている。十一年で良くもまあここまで大量の魔術の基礎を叩きこめたものだと、呆れ半分称賛半分といったところだろう。

「お前、どっちかといえば魔術師つてより魔導師の方が近いんじゃねーの?」

「そうかもしけんな。後世の為に魔術師を育てる。確かに魔導師の方が近い」

「どうせなら私にアスナちゃんを育てさせ

「ていい」

投げたのは符。但し、爆炎を伴つて槍と成す。陰陽道の符。

「ちよつ、まだ話してゐ途中だつて！」

口調はそれだが、慌てることなく符を握り潰して消滅させる。やはり魔術師としての年期が違つ。

そんなとき、ガラツ。といふ音と共に教皇が入ってきた。

「……何をしてるんだ、お前達は」

「「「アスナ魔改造計画」「「」」

全員が声を揃えてそんな事を言つ。呆れた教皇は頭を抱えてそのまま近くの椅子に座り、フィアンスマ達の方を向く。

「基本的に俺様達は暇だからな」

「あたし達が自分から動かない限り、もしくはあんた等教皇が何らかの意思を示したときじゃない限りは動かないしね」

「娯楽は幾らあってもいい物ですよねー」

「私はアスナちゃんと遊びたいっ！？」

いい加減面倒になつたのか、ルーン魔術で椅子」と吹き飛ばすフィアンスマ。

ぶれない奴だ、と呟く。

「……まあ構わないがな。フィアンスマ、お前イギリスの女王と知り合いだろ？」「

「ん？ ああ、エリザードの事か？」

「お前に話があるらしい。何かやつたのか？」

「さあな。心当たりがあり過ぎて思い浮かばん」

「実際、いろいろやつたものだ。

カーテナ＝オリジナルを革命中にくすねたり、ローラと一緒にエリザードをドックリにかけたり。

前者のがばれたかな？ と思考するが、取りあえず行ってみようと思い、アスナを連れて聖ピエトロ大聖堂を出る。

イギリスト。

魔術の国イギリストに発した「悪い魔術師から市民を守る」という方向性の極まりすぎた結果、他の十字教勢力と比較して、魔女・異端狩りや宗教裁判などの対魔術師技術に特化している。

魔術対策で様々な術式や文化を取り込むことに積極的なため信仰の制限は緩く、異教でも枠組みを保ったまま入信が可能。

そんな組織『必要悪の教会』がある場所、イギリスト。

「おー。良く來たなフィアンスマ。久しぶり」

国家元首はジャージで迎えてくれた。

クイーンレグナント  
英國女王と呼ばれるエリザード。年齢は四十前半であり、カーテ  
ナ＝セカンドの持ち主。

あんなのになるなよ。ヒアスナに耳打ちし、ここまで連れて来て  
くれた騎士団長に劣るの言葉をかける。

「……相変わらずだな、お前。大変だろ？」騎士団長

「……ええ、まあ。もう慣れましたし」

慣れるのもどうかと思つが、このままだと騎士団長の愚痴を受け  
る羽目になりそなので、無視。

「で、俺様を呼び出すとは一体何の用だ？」

「暇なんだ、チエスしないか？」

そのままロターンして部屋を出ようとするが、

アスナもそれに続いて部屋を出ようとするが、騎士団長から止め  
られる。

「なんだ、俺様は忙しい。チエスをやつてほしいならローリーでも呼  
び付けてろ」

「まあ何だ。子供を紹介しておきたくてな」

フィアンマの言葉を全部スルーし、自分勝手に気ままに会話を進めて行く。

右手を向けた自分は悪くない。とフィアンマは心の中で思った。それに気づいた騎士ナイトリーダー団長が何らかの魔術攻撃をしようと気付いて止められたが。

「リメニアの事は知ってるよな。キャーリサも。そしてこっちがヴィリアンだ」

それぞれ特徴的な子供達が出てくる。

リメニアは二十代後半に入ったばかり、キャーリサはまだ十代、ヴィリアンは十代後半に入ったばかりだ。

「俺様と会わせて何がしたいんだ、お前

「娘自慢に決まっているだろ?」

「帰つていいか?」

呆れ果てて、もうじけている氣力を無くしたフィアンマ。もう良くな? もういなくともよくね? といった感じである。

エリザードが自分の娘達とフィアンマを会わせたのは、速い話が政治的なものだ。

『神の右席』として、黒の教団を頼で使える人材であるフィアンマ。

本来ならエリザードでさえ気付かれる事は無いのだが、『頭脳』・『軍事』・『人徳』の三つをバランス良く備えているからこそか、気付かれた。

教皇とも知り合いであり、ローラとも知り合い。フィアンマが神の右席だと気付いたのもある意味必然とも言えるかもしれない。

エリザード的には結果的に『友人の娘』という事で、万分の一位でも守つてくれればいいなーという考え方である。

つまりはあまり期待して無いという事なのだが。

それでも、フィアンマの実力は一人で国とタメを張れるほど。

本来、国の間での戦力などの睨み合には、国と国という単位でする物だ。

それが更に戦争という枠組みが出来上がれば、国と国が混ざり、連合が出来上がる。

そして、『右方のフィアンマ』という『個人の戦力』は、それとほぼ同等と捉えられている。

個人の範疇では無く、最早国単位で敵対行為をしなければ相手にすらなれない怪物。それと『知り合い』というだけでも、事情を知るものであれば相当なアドバンテージだ。

大き過ぎる力は、存在するだけで周りへと影響を及ぼす。

あまりにも強大で、強靭で、圧倒的で、絶対的。敵対行為すらし

ようとは思わない。そんな存在。

……本人的には、実際はそんな面倒事はやりたい訳ではなく、適当に遊んで暮らせたらいいなー位にしか思って無いのだが。

「お前の娘だろ、その子？」

「まあ、そうだ。血は繋がつて無いが」

赤毛、眼付、魔術の才能。その辺を吟味して、エリザード的には実の娘じゃないのかと思つていたらしいが、当てが外れた様だ。

ちなみに一年前に『墓守り人の宮殿』の封印は解け、『魔法無効化能力』ヤンゼルも戻ってきた。

人形に封印していた為、この十年間使えなかつたのだ。

肉体も元通り成長するようになり、今はイタリアの学校に通つている。性格的に合わないのか、あまり友達と呼べる子はいない様だが。

ついでに言うとルーシーも同じ学校である。

「いろいろ理由があるだろうから詮索はせんがな、誘拐だけはするなよ？」

「お前が俺様をどんな目で見てるかが良く分かる一言だな」

「冗談だと分かつてるので特に言及もしないが。これが本気なら二時間ほど問い合わせたい所である。

「……最近魔法使いがウェールズに良くなつていてな。 MM元老院の手先だ」

「ああ、 そう言えばナギ・スプリングフィールドの息子がいるんだつたな」

「ほう、 知つていたか。 なら話は速い。 奴ら、 その子を狙つてる様だぞ?」

ナギの息子では無く、 アリカの息子という事が、 MM元老院にとつては不要な事だった。

だからこそ、 ナギが消えた現状でネギを始末すべく動いている。

フィアンマの知る限りは後一年は大丈夫だろうが、 その後の事は知らない。

「奴ら、 私達の許可も取らずに我が物顔でウェールズを歩き回つてゐる。 困つたものだよ、 全く」

やうひうと思えば、 恐らくあつといつ間に制圧できるだろ?。 MM元老院などその程度。

あくまでもカーテナの力を扱えるイギリス国内の話に限るが。 少なくとも魔法世界においても相当な被害を出す事が出来るだろ?。

「奴らはそう言つモノだからな。 魔法使いが魔術師に劣つてゐるなど考へもしない」

魔術師は自分の為に。魔法使いは他者の為に。そう言つた考え方を持つ者は多い。

「最近は不穏な動きが目立つ。特にイングランドなど」

「伝令です！ イングランドにてテロが発生、要求をしてきてます！ 敵は恐らく魔法使いと思われます！」

「ほらな、こうなる」

「大変だな。暇潰しついでに手伝つてやるうかいだ。

表に出るのは勘弁だが、こいつた事件は暇を潰すにはもつてこいだ。

「なお、一般人を楯に取つてゐる模様。日本人です！」

「大使館に連絡をしておけ、テロの被害に合つかも知れんとな。名前は分からんのか？」

「テロには屈しない。イギリスはテロに屈する様なやわな精神は持つていない。

「先日イギリスに入った日本人の様です。ファミリー・ネームは大河内、倉田、黒田。総数九名です！」

ふと、フィアンマには嫌な予感がした

## 第十五話 魔改造（アスナ）（後書き）

ほのぼの右席。ジャージ女王の登場です。

右席はあとはウイリアムだけですね。アックアは華々しく散らせます（マテ

人質になつた人は分かる筈。原作キャラですたい。フィアンマファミリーの予定ですたい。

理由はかなり無理やりになる予定です。

次回、ブリテン英國

魔術と一般人が交差するとき、物語は始まる

……とか、アニメ風に予告してみたり。

## 第十六話 英国（フロテン）（前書き）

今回、「都合主義のオンラインパレード」（オイ  
独自設定等も出ます。

それでもいいと言つ方はお進みください。

……更新遅れて申し訳ないです。

## 第十六話 英国（ブリテン）

イギリスにおいてのテロ。

イングランド地方において、魔法使いが起こしたものだ。

目的はイギリスに対する魔法使いの価値を上げる様に要求する事。

魔法大国と呼ばれるイギリスにおいてはウェールズ地方一帯でしか魔法は学べず、国への影響力はゼロ。

魔術はイギリスの中枢まで入り込んでおり、『王室派』『騎士派』に並ぶ『清教派』が存在している。

魔法使いは、それが不満なのだ。

魔法世界において、膨大な影響力を持つ魔法使い。

現実世界において、多大な影響力を持つ魔術師。

魔法使いより魔術師をより強大で危険だと見るのは当然だ。

何故ならば、魔法使いは一人でも集団でも出来る事は限られている。だが、魔術師は違う。

集まれば結社となり、例え一人でも目的の為なら世界を滅ぼす事がえいとわない。そんな奴らがいる。なら、そんな連中に対しても対策を練るのは当然だ。

魔法は魔力を使う事と詠唱さえ出来れば使う事が出来るという『即時性』が利点だが、魔術は多量の時間と魔力で行つ『大規模』な事が利点だ。

無論、即時性を持つた魔術もあれば大規模な魔法もあるが、基本的な区分としてはこの様な感じとなつてている。

「無駄に騒ぎを大きくしゃがつて。要求をしてその後突っぱねたらテロの流れじゃないのか、普通？」

「こういう事が出来るとアピールしたいんだろつよ。年単位で準備が必要になる事もある魔術と違つて、魔法は即時性が売りだからな」

エリザードとフィアンマはのんびりとした様子でテロの状況を聞きつつ話を進める。

「宗教毒が及ぶ事も無く、ある程度の素質さえあれば誰でも使える魔術。宗教毒があるが、才能が無くても使える魔術」

「利点ならどちらにもある。だが、思想が違う、か」

ある程度の常識を持ち、やるべきではない事を弁えている魔法使い。

普通の手段では叶えられない願いを叶えるため、どんな被害も厭わない魔術師。

魔法使いでもやる奴はやるし、魔術師でも常識人はちゃんといるのだが。

「大使館から連絡です。出来得る限り無傷で人質を助けて欲しいと  
「私としても当然そうするつもりだ。だが、あまり無茶な事は言わ  
ないで欲しい」

テロが起こっているのに、無傷で救出などというのは難しい。相  
手が自爆を考えているなら尚更だ。

「……確かに、人質の中に大河内という家族がいたか」

「はい。三人家族で、イギリスへは旅行に来ているようです」

「運が悪いな。関係者か？」

「詳しい情報は取れていませんが、恐らく関係者ではありません」

なら、事が終わつた後で記憶処理をする必要がある。魔術は別に  
漏れても構わないが、魔法は漏れると困るらしい。

自分たちのケツは自分たちで拭けといいたいエリザードだが、そ  
もそも魔法使いの機関を置いていないので当然不可能である。

「ふむ……俺様が行こう」

瞬間、エリザードが動きを止めた。

「……スマン、聞き間違えたかもしけん。もう一回言つてくれ」

「何？ 俺様が行くと言つたんだ」

「何イ！？ お前が行くのか！？」

「俺様が行つちや悪いのか。傷一つ無く救い出して来てやるが」

「確かに出来るだろ？……お前、本当にファイアーマンか？」

「どうこう意味だ」

小さく怒氣を孕ませて告げる。元々自分の為にしか動かない奴なので、こりとう反應を取られても何らおかしくは無い。

「何、ちょっと興味が出ただけさ」

それだけ告げ、アスナを連れて部屋を出た。

エリザードは椅子に座り直し、息を吐く。

「大丈夫なのですか？ あの人一人に任せて」

「……ああ、この件はもう解決したとみていいだろ？」

現状、実力的にファイアーマンに勝てる人間は存在しない。テロを起す程度の力しか無い魔法使いに負けるとも思えず。

「取りあえず、紅茶を」

ジャージのまま、静かにそつと口づける。

イングランド某所。

とある建物に魔法使いと人質である数名の人物がいた。

中には小さな子供もあり、縛られている状態で怯えて親の傍に寄つている。

「……まだ返事は無いのか？」

「焦るな。こちちらには人質がいる。無下には出来ん筈だ」

コツコツと覗き揺すりをする男を宥めつつ、もう一人の男は手に持った剣の手入れをしている。

侵入者を警戒し、至る所に場所を割り出す為の探知魔法をかけている。並みの魔法使いや魔術師ならこれで見つけることが出来るレベルだ。

潜んでいる魔法使いは一ヶタを悠に超し、しかもそれぞれが結構な使い手。自信はあった。

だから、彼らは『運が無かつた』としか言いようがない。

「やあ、人質を取つて暇そうにしているテロリスト諸君。態々捕まえに来てやつたぞ」

赤い服と髪。細身のその肉体を視界に入れつつ、警戒する。その横には髪を後ろで一つに纏めた少女。アスナの姿もある。

「何者だ！？」

剣を構えつつ、問う。近くに潜んでいる仲間に念話で連絡をするが、返事が無い。

「馬鹿正直に答える奴がいると思つた？」

手をポケットに入れたまま、構える事無くそつ告げる。

「魔術師さ」

瞬間、一人とも後ろから吹き飛ばされる。聖人の力を込めたその蹴りは生半可な威力では無く、数メートルをノーバウンドで飛ぶ。

意表を突かれたが、受け身をとつて何とか体制を立て直す。そのままファインマを視界に入れようとしたが、いた筈の場所にはない。

「何処を見ている？」

その言葉に引き摺られる様に後ろを向くが、其処にもいない。

訝しげに顔を歪め、身体強化の魔法を使って背中合わせに構える。これで死角は無いとばかりに。

だが、注意していたにも関わらず、アスナは一人の男の胸にそれぞれ一枚のカードを張り付けた。

文字はイサ。意味は停止。

予め作っておいたワイヤーの術式でカードの意味を強化し、二人の精神を停止させる。これで二人の意識は落ちた。

「よし、上出来だ、アスナ」

褒めながら撫で、一人の魔法媒体を破壊して縛る。これで逃げる事は出来ないだろう。

幻覚を一時的に見せる事は簡単だ。火のルーンを使った蜃気楼などもあるのだし。

「さて、人質の諸君。大丈夫か？」

縛られたままの人質。ロープを切つて解放しつつ、体に違和感が無いか確かめさせる。

数分で全員のロープを切り、解放を済ませる。そのままエリザードへ連絡を入れ、事件が解決した事を伝えた。

「大丈夫？」

「うん……ありがと」

アスナの方を見れば、黒髪でポニー・テールに纏めた女の子と話し

てこる。日本語はちやんと教えてあるので会話は出来ているらしい。

魔法世界では通訳の魔法もあるらしいが、魔術にそんな便利な物は無い。自力で覚えるしかないのだ。

(……んん?)

多少の違和感。違和感というよりは氣になるとこう程度の事が、アスナと話す女の子を見る。

そして、小さく笑う。少しばかり面白い物を見つけた、とでもいう様に。

女の子を観察していたファイアンマの下に、一人の人物が来た。

「少し、聞きたい事があるのですが?」

黒髪で長身。顔立ちからアスナと話している女の子の父親だと推測し。

「何か用か?」

「いえ……先ほど魔術師と名乗っていたようなので、気になつて」

「関わらない方がいい。一いつの事は知らない方が安全だぞ」

「ああ、少し言葉が足らなかつたようで……裏の事は知っていますよ」

その言葉に、眉を顰める。一般人だと聞いていたが、魔法・魔術

の事を知つてゐるという事が。

「職業柄海外に行く事も多いからか、意外と目にするものです。その殆どは魔術師のものの様ですが」

それは当然だろう。魔法使いは秘匿を重んじる。だが、魔術師はその辺りが杜撰だ。魔術そのものは知られても、術式などの技術を知らなければどうという事は無いのだから。

「それで、俺様に何の用だ」

「……うちの娘の事で、少々。あの子はアキラと言つんですが」

少しばかり気にかかる事を見抜かれたか。それとも、元からあの子の資質を知つていて、観察しているフイアンマに何かしらの感情を抱いたか。

表情に出したつもりは無かつたんだが、と反省し、男の問いを聞く。

「本物の魔術師から見て、あの子はどう思いますか？」

「そうだな。……簡単に言つてしまえば、聖人に近い。聖人の事は知つてるか？」

「聞いた事位は」

感じられているのは、微量の天使の力。<sup>テレスマ</sup>性質は恐らく神の力だらう。<sup>ガブリエル</sup>

だが、本当に微量だ。あれでは、身体能力が一般人よりほんの少しづかり高い位が精一杯だろうとあたりを付け。

同時に、原作キャラにそんな奴がいたのか。と驚嘆する。

「あの子は何が得意だ?」

「何、というと? スポーツであれば水泳が得意な様ですが」

なるほど、と納得する。水の性質を有する神の力の天使の力があるのだ。水に関する事であれば加護が働くのだろう。

テレスマ 天使の力とは、元から性質が決まっている。それを扱う聖人も当然得意な魔術というのは出てくる。

得意というよりも、特化と言った方が近いかもしれない。

普通の人間が使つて、一定の威力を出したとしても、聖人はそれを易々と超える力を発揮できる。

一点特化では無く、いうなれば全点特化。普通に魔術を使つても普通以上の威力を出すからこそ、聖人と呼ばれるのだ。

その中でも、得意不得意で更に分かれるのだが。

だが、アキラは違う。聖人としてはテレスマ 天使の力の量が少な過ぎる。

少しばかり普通より魔術を扱う事に長けている、少しばかり身体能力が高い、少しばかりの幸運。

聖人のなり損ないと取つてもいい位だ。フィアンマ自身が聖人の為、その差は顕著に表れている。

「昔から運動では他の子より出来て、少し運がいい位でしたが……最近、少しおかしな事があつて」

「おかしな事?」

「麻帆良学園都市、という場所を知つてますか？ 日本の魔法組織で、関東魔法協会という組織の本部がある場所です」

「ああ、知つている。そこで何かがあつたのか？」

「……魔法使いには気付かれ無かつたようですが……あの子が、何かしらの術を使いしたんですよ」

「術を行使した？ 魔術か？」

「恐らくは。魔法には詠唱が必要らしいですし、練習も必要と聞きますからね」

別段、ありえない事では無い。

魔術 자체、魔力さえ練る事が出来れば素人にさえ使えるのだ。何かがきつかけとなつて使える事も、無いわけでは無い。

だが、あくまでも魔力が練る事の出来る場合に限る。

魔力は呼吸法などで血液の流れや内蔵のリズムなどを無理矢理いじることによつて、普段とは違うエネルギーを精製することができ

る。

それらは知らなければ出来ない事だ。何せ、普通に生きていればまず使う事は無いであろう呼吸法などを使うのだから。

しかし、ファイアンスマや神裂はもう一つの方法がある。そして、恐らくはアキラもこからだりだ。

### 『天使の力』 〔テレズマ〕

聖人であるならば、肉体に宿っているそれを使う事で発動できるものもある。だが、それは自身の肉体強化にあてているテレズマを減らすと言つ事。

「高速戦闘中などに使えば、まず隙を見つけられて潰されるのがオチだろ?」

「水を生み出したんですよ。クレヨンで何か書いていたと思えば、突然水があふれ出して……」

恐らく術 자체は簡易的なモノ。

色や書き方、陣の手順などが一致すればありえない事では無い。それでも相当な確率ではあるが。

「なるほどね……面白い素材だ」

少なくとも、本当に才能の無い魔術師よりも余程レベルの高い魔術師になるだろ?」

才能が要らない技術と言つても、その中でも才能の差といつのは必ず存在する。『神の右席』然り、『必要悪の教会』然りだ。

アスナと仲良くしてゐみたいだし、育ててみるのも面白いかもな。等と思つてゐるフィアンマ。

流石にアスナとは事情が違つので無理矢理やられさせつつは思つていなのが。

「……あまり知られてはいないのですが、麻帆良は少しおかしな場所でしてね」

「知つてゐるよ。学園全体に認識阻害の結界を張つたり、世界樹があつたりする場所だな」

「ええ。どうにも、彼ら自身がその認識阻害に毒されていふようにして」

「……く、くくく。自分たちで張つておきながら、自分たちに悪影響を及ぼしていふのか？」

「そうですね。魔法の秘匿をしなければならない筈ですが、彼らはそれが緩すぎる。しかも夜な夜な戦闘まであつてゐる始末。あの町を出てもいいのですが、妻はあの町で働いていますし、アキラは学校の友達とは離れたくないでしようから」

それでも、安全性が考慮されていないのならば、麻帆良では無い別の町に移る事も考えてはいる。

多少嫌われようと、安全を一番に考える事が父親として最優先だ

と思つてゐるのだ。

「それで？ その先が本題だろ？」

「はい……あなたは、他人から見て自分の事を信用できると言えますか？」

「言えないな。俺様は十中八九誰もが信用しないタイプの人間だ」

即答。別に信用されようとされまいと大して違いは無い。フィアソマはそんなことなど気にしないタイプなのだし。

「……出来れば、あの子に身を守るすべを教えて欲しいのですがね」

「何も知らない赤の他人にか？ 変わっているな、お前」

「いえ、あの女の子を見ていると、あなたの教育が分かりますから」

アスナの事を見ながら、男はそんな事を言つ。

「さつきの戦闘の後も、あの子はあなたに撫でられて嬉しそうでしたしね。本当に誰もが信用しないタイプの人間なら、ああいう子は近づかないでしょ？」

それは自身の経験から来る確信めいたモノ。

どの道、聖人を創りだそうとしている結社も存在する。もしかすると、あの子が実験台になる可能性もある。

「アスナ」

「何、フィアンマ?」

「その子と仲良くなつたのか?」

「うん。アキラちゃんって言つんだって」

ルーシーは家族だ。友達という括りの人物が出来て、アスナも嬉しいのだろう。顔を綻ばせている。

「……ふむ。なら、日本に移り住むか? アキラ、といつ子と同じ学校に通つてもいい」

「本当?」

驚いた顔で、フィアンマを凝視する。隣で聞いているアキラも同じだ。

「どうにも、イタリアの学校には馴染めていない様だしな。仕事の方は気にしなくていい。どうせ俺様が必要になる事態等起こりん」

余程の事が無い限り、ではあるのだが。

教皇が神の右席の力が必要だと言い出しても、フィアンマ以外の三人で何とか出来るだらうと思つている。

そもそも神の右席の力が必要になる事態そのものが、滅多に起らないのだが。

「大河内、といったか。お前の娘、最低限レベルまで育てもいい。

あくまで身を守れる様にするだけだがな

「構いませんが、私も見張らせて貰いますよ。流石に娘と一緒にいた  
緒にいさせんほど、信用はしてません」

「構わない。どの道身を守れるレベルまで教えた後はあの子に  
選択を委ねる」

フィアンマにしても、アスナが笑顔でいられるならそつちが良い  
だろ？、と判断しての事だ。

魔法機関があるが、何かしらの干渉をしてくるなら潰せばいいと  
考えており。問題は無いだろ？と思考する。

## 第十六話 英国（フロテン）（後書き）

無理矢理感があつましたが、 麻帆良行き。

とにかく、 こゝでもしないとファイアーマン本氣で麻帆良に行く理由が無いです。 〃

アキラは魔改造。 ファイアーマンパーティはこれで終わりの予定。  
千雨はどうしようかと悩んでいる途中です、 過剰戦力な気がしない  
でも無い。

…… いえ、 フィアンマがいる時点で既に過剰戦力ですが。

次回は麻帆良での日常編を予定。

## 第十七話 学園都市（まちゅう）

神父といつ職業は極めて便利だ。少なくとも俺はそう思つてゐる。何せ、髪の色は同じでも顔が似ていない、髪の色 자체が全く違う上に顔が似ていない一人の娘を連れて何処かへ出かけても、神父といつものが神聖な職業として認識されているおかげか、変な噂が流れない。

逆に孤児を引き取つて育てていると言ひづらまで立つてゐるらしい。これが普通の職業だと、ちょっと変わった職業ならアスナ達といふと通報されそうだ。誘拐されたとか思われそうで。

外見というか、雰囲気的な問題といふか。神父といつ職業で隠している感じだな。特にやましい事をしてゐるつもりは無いのだが。いろいろと悲しいが、今更なので特に落ちこまない。

「よ、ひとつ。これで最後だな」

住宅街から少し離れた場所にある一軒家。それなりに大きい。

ここが俺とアスナ、ルーサーの家となる。住宅街から外れている所為か、意外と安かつた。俺の資産が桁外れなだけかも知れんが。

今現在、ここに結界を敷いてゐる。結界といつのは、境界だ。『結界がある』といつると自体を悟らせない事が、結界を作る者として一流らしい。

小難しい事言つてゐる様に聞こえるが、實際には「ここには何も無い」と思わせればそれでオーケー。結界 자체も悟られないなり認識のしようがない。

魔術師の工房だからな。侵入者が来ると死人になる。

俺は構わないが、アスナ達にはちょっと刺激が強いだろうし。といふか、帰つてきたら死体があつたとかショック過ぎるだろう。

荷物は引つ越して来てから大凡三日程度で大体片付け終わり、中々見栄えのある部屋になつたと思つてゐる。物は多いが。

魔術的な役割を持つ品物を配置すると言うのも、立派な魔術だ。天草式のやり方を真似てゐる。一見そつは見えなくて、魔術師の儀式場だつたりとかするからな。

「ただいま、フィアンマ」

「ただいま、お父様」

「お帰り、二人とも」

アスナとルーシーが帰つて來た。一人には夕食の買い出しを頼んでいたんだ。いわゆるおつかい。

残つた荷物を片付けるのと結界を敷くので、意外と時間を喰いそうだつたから頼んでいた。二人から買って來た物を受け取つて冷蔵庫に入れたり冷凍庫に入れたり。

主夫か、俺は。

まあそれは置いておくとして、現在の時刻は四時を回ったばかり。夕食の準備をするには少し早い。

ちなみに、アキラとその父親に魔術を教え始めた。それが用件だから当たり前といえば当たり前のんだが。

アキラはビックリして固まつたりしてたし、一いついつ反応は毎回見ていて飽きない。父親の方は魔術を使う氣は無いらしい。唯変な事をしないか見張るだけで。

最初はアスナにやつた様に聖書を読ませたり洗礼を受けさせたり。宗教防壁を築いている最中。魔術を使うにはまだ時間がいる。

どの道もつすぐ夏休みだ。時間はたっぷりあるから問題は無いだ  
うつ。

「麻帆良祭？」

「うん。アキラが行こうって誘つてきてるの。行つていい？」

祭りと聞いてわくわくした目でじっと見る。其処まで楽しみか。

「ルーシーもか？」

「うん。いいでしょ、お父様？」

「ひたちもわくわくした田で見てくる。そんなに行きたいのか。祭り。

そう言えば、そう言つたのはあまり行つた事無いなあ、と思ひだす。特に何かある訳でも無さそつだし、大丈夫だろう。

「そりやいいが……迷子になつたりするなよ？ あいつの親御さんもいるだろうし、迷惑かけない事

「「はーい」」

……本格的に主夫だな、俺つて。

まあいいか、ひたちもひたちで用事がある訳だしな。今の内に話を付ける必要がある。何か面倒事を起こされるのは御免だ。

町の中を見ながら歩き回る。基本的に赤い修道服を着ている俺だが、普通の服を着ている。違和感は無い筈。

修道服が普段着になつてゐしなあ。と思いつつ、屋台等を見ながら図書館島を田指す。

図書館島では図書館島探検部が探検大会とか言つのをやつてゐるが、俺の用事はそこでは無い。

もつと奥。もつと深い場所に用がある。

チャチなトラップを解除・回避して奥へと進み続け、とある場所まで来たところで、一体の気配。

「ギヤオオオオオオオオ！－！」

竜。どちらかといえば、ワイバーンに類される種のドラゴンだ。

だが、この程度の生物には用も無ければ興味も無い。竜殺しの魔術など構築する事は簡単だし、その気になれば聖ジョージの竜の一撃を再現する事も可能だ。

敵意を持つてブレスを吐く竜。だが、そんな物は通用しない。

真正面からブレスを抜け、顔面を蹴り飛ばして氣絶させる。聖人の力で全力の蹴りをかました。しばらくは起き上がれないだろう。

そして、その奥。扉に手をかける。

中には学園の地下とは思えない光景が広がっていた。木々や湖、

妙な建物。

その中。建物の上に、その人物はいた。

「よう、久しぶり、と言つておこいつか」

「あなたは……そうですか、侵入者とはあなたの事でしたか」

「あの竜を通して見ていた訳じやないのか」

「私とてそんな事は出来ませんよ。あなたなら可能かもしれません  
がね」

まるで長年の友人と会ったかの様な気軽な会話。だが、その間には敵意がハツキリと存在している。

「それで、何かご用でも？」

「分かつてているだろ？　俺様がここにいると言つ事が、どういつ  
事か」

「黄昏の姫御子……アスナ姫関連ですか」

紅茶を飲みつつ、アルビレオはそう答える。

「お前等が余計な干渉をしないなら、俺様も手を出さないでいてや  
るがな。余計な事をするようなら」

「分かつてますよ。あなたを敵に回す恐ろしさは、あの大戦で良  
く理解しています」

大天使ガブリエルの降臨。そして、造物主をものともしない力。こいつが全て知っているかは分からぬが。

ガブリエルに関しては、人間にどうできる存在では無い。だが、無理矢理召喚して、敵対象を悪魔とすれば勝手に動いてくれる。

天使が悪魔を殺すのは当然のことだろう。

「数年前。お前等がここに『アレ』を封印したのも分かってる。封印しか出来なかつたのもな」

「……私はそれを見張つているだけ。アスナ姫をどうこうしようとは思つていませんよ」

「お前はストッパーだよ。俺様が邪魔に感じているのは近衛近右衛門だ。アイツはアスナの正体を知れば、いざれ何かにつけて利用しようつと企むだらうからな」

武力的な問題では無い。政治的な問題。アスナの利用価値は様々だ。その能力にしろ、血縁にしろ、利用しようと思えば幾らでも利用できる。

魔法使い達の住むこの町に、アスナを住まわせるのは多少なり抵抗があつた。今までの扱いを考えれば当然の事だが、アスナは仲の良い友達と入れた方がいいだらうし、何より俺がいれば大丈夫だろうと思つての事だ。

アスナ自身も魔術が使えるし、ルーシーもいる。……多分、アスクアの奴も動くだらうな。後ワシリーサ。

「学園長ですか？」

「アイツにしろお前にしろ、戦闘力などはながら俺様に匹敵するなど思っていない。だが、アスナを利用する事だけは許さん。その時は麻帆良が地図から消えると思え」

右手を向けつつ、そう告げる。

「フフ……随分と過保護なのですね」

「どうらかといえば、お前等の為に言っているのだがな」

アックアとワシリーサのコンボはキツイぞ？ ガチで強いからな？ あいつ等。普段は変態だが。

俺が動くまでも無く、麻帆良終了のお知らせが出る。

「私達の為、ですか。肝に銘じておきましょう」

「そうしておけ。アスナの事を特定させる様な事は教えるなよ

右手を下りし、ポケットに無造作に突っ込む。

そのまま踵を返して歩き始め、ドアを開けて外へ出ようとする。

「ああ、やうだ」

ふと足を止め、後ろについて来ていたアルビレオの方を向く。

「ヒヴァンジエリン・A・K・マクダウェル。アレとは知り合いか？」

「ええ、昔馴染みですが」

「一度殺しかけた事がある。今また俺様を見れば殺しに掛かってく  
るだろ？な。もちろん、俺様は手加減などしない」

「……気付かれない様にしろ、と」

「俺様は別に構わんがな。あれがどう動くかは、お前ら次第だ」

それだけ言って、その場から消える。座標は手に入れた。何かあ  
れば、地下ごと吹き飛ばせばこいつも生きていられないだろ？。

地盤の問題もあるが、そんな物はどうだつていい。敵対するなら  
滅ぼす。それだけの話だ。

「……赤い髪の男?」

「ええ。彼とその傍にいる女の子。彼らに對して何かしらのアクションを起こせば、麻帆良が地図から消えると言葉されましたよ」

「それは、本気なのかの?」

「出来るでしようね、彼なら。私達『赤き翼』の総戦力を持つとしても、傷一つ『えられるかさえ分かりません』

学園長室。フードを田深にかぶつたまま、アルビレオはそつまつ。

学園長は頭を悩ませる。その二人に余計な事をすれば、被害は魔法関係者だけでは済まない。一般人まで被害が及ぶ可能性もあるのだから。

「出来るのは分かったが……本気でやるのかの?」

「学園長。魔術師とは、目的の為なら手段も方法も厭わない連中が殆どですよ。あなたはよく分かっているでしょう?」

「……やじりやの」

「それと、キティにも会わせない方がいいでしようね

紅茶を口に含みつつ、またしても面倒事を告げる。

「H'カアかの? 何か因縁でもあるのかの?」

「大ですよ。一度殺しかけた事もあるそうです。彼が十字教徒

である事を考へると、それさえ優しい対応に思えますがね」

実際、異教徒は人間では無いと思つてゐる者もいる。そう言つた連中は殺す事に戸惑いなど覚えない。

吸血鬼であるHヴァンジエリンなど、生かす意味がない。

「ふむ……厄介じゃのう……所で、その赤い髪の男の容姿は分かるのかの？」

「みれば一目でわかりますよ。異質な雰囲気を纏つていますしね。容姿は何か写真でも残つていればよかつたのですが」

「お主のアーティファクトはどうだじゃ？」

「無理ですね。隙が無い。そう簡単に収集させて貰えるとは思えませんし」

「どうか。では、気を付ける様にしようかの」

アスナの事は伝えたが、学園長にそれが誰かを特定させる様な事は言わなかつた。

つまり、アスナが唯一一般人では無いと言つただけ。姫御子である事実は教えていない。

必要ではないし、明かす意味も無い。明かせばどうにかして利用する事を考へるかもしれない。一度相対して完膚なきまでにやられた身としては、それは死刑宣告にも近いものだ。

不必要に誰かを撒きこむ事が出来なくなつた。これが、フィアンマの狙い。

一般人をむやみやたらと巻き込まない様に配慮して、アスナの詳しい事、容姿などを伝えない様にと言つた。

これでは、偶然巻き込んだ一般人の筈の人物がそのアクションを起こしてはならない人物となれば一巻の終わり。むやみに動けなくなつた訳だ。

アルビレオもそれが分かつてゐるのか、その口元は笑つてゐる様にも見える。

(……本当、過保護ですねえ……)

一般人までその庇護を与えるとは。と呴いて、学園長室を後にした。

## 第十七話 学園都市（まち）（後書き）

アルビレオと学園長に釘を刺す話。これ3-Aが出来ないフラグじやねーの? www

と、思い出したけど、1Jの学園長だし多分3-Aは造るでしょうな。  
一番田とか三番田のアーウェルンクスとの絡みを書こうと思つてた  
んですが、すっかり忘れていつの間にか十年前過ぎた（え  
ハツハツハ、時間は確かめるものですね。まあ大した事では無いの  
で特に気にしませんが。

次回はちょっとキンクリ。原作六年前の出来事です。ネギとじょ  
うと違う事件が起こります。

感想お待ちします。

ついでですが、アスナとルーシーのファミコーンームビーフしましょ  
うか。

学校に行く以上必要だよねって話でして、フイアソマだと……じょ  
うとあれかなあ、と思いますし。

エンテオフォシアだと魔法関係者気付きますし。

そんな訳でファミコーンームに良い案があれば書つて頂けると大変  
うれしいです。

## 第十八話 約束（じゅく）

「アスナ、帰る？」

「うん」

ルーシーが帰る準備を整え、私の傍に来てそう言った。

麻帆良の小学校に転入してから三年。私達は九歳になった。特に話す様な事は無いけど、転入した直後はイタリアから来たって事で結構質問攻めにあった。

名前はアスナ・ジャンヌ・ラツィオ。洗礼名のジャンヌとイタリアの地名を組み合わせた物。

フィアンマは「ジャンヌとは縁があるからな」とて言ってたけど、あつた事あるのかな。

ルーシーはルーシー・アンナ・ラツィオ。アンナは至聖生神女の母聖アンナ。マリアの母として有名。ちなみに預言者アンナという人もいるらしい。

フィアンマは「アンナと聞くとシークレットチーフのアンナ・シユブレンゲルを思い出す」って言ってた。

『黄金夜明』のメンバーの一人だったフィアンマは、会った事は無いけど知つてはいるらしい。

家に着き、ドアを開けてわざと中へ入る。

「「ただこま」」

「ん、お帰り。昼飯は用意してあるから、早く手を洗つて来い」

フイアンマに言われ、カバンなどを置いて手を洗い、昼食をとる。今日は終業式だったから、昼まで帰つて來た。明日から夏休みだ。宿題が多いけど、分からぬ所はフイアンマが教えてくれるから直ぐ終わる。

アキラも早んで一緒に宿題をやつ。やつした方が速く終わるだろつ。

そう思いながら昼食を食べ終え、食器などを片付ける。

「ああ、やうだ。一週間ぐらくなはアキラの魔術の練習をするが、そこから先はちよつと出でかけるや」

「出掛けらつて、じこっし。」

「バチカンに顔を出して、後は知り合ひの所だ。イギリスにもいかなきやならん」

バチカン……去年、アキラが一緒に行つたけど、アックアが暴走して大変だった。いつも通りの平常運転だつたけど、アキラが涙目だつたから。

水系統の魔術に相性がいいアキラはアックアに少し手解きを受けて、また少し魔術の腕が上がつてた。

フィアンマの得意系統は火だけど、全部の系統をトップレベルで扱えるのが凄い。ルーシーには土系統の魔術を教えてたし。

本当は『神の右席』は会うのはいけないらしいけど、別に『神の右席』としてじゃ無く、フィアンマの友人という事でアキラに会わせた。フィアンマは会わせた事にちょっと後悔したみたい。

イギリスと言つと、『清教派』の所だらつ。トップのローラつて人はフィアンマとよくお茶を飲む仲だつて聞く。

「知り合いの子供の世話……というか、アスナも知つてる子だからな。会えれば分かるだらつ」

「知つてる子？ 魔術師で同年代の子つてあまりいないと思つナビ……。

「知り合いのところつて、その子のいる場所？」

「違う。今のルーシーもアスナも会つた事は無い筈だ。ここ数年行つて無いしな」

ルーシーの質問にフィアンマは即答する。

ここ数年行つて無い……私と一緒に暮らすようになつてから、フイアンマが何処かへ出かける事は沢山あつたけど、いかない場所もあつたんだ。

“今の”ルーシーって言つてる辺り、前の肉体の時は行った事があるみたい。

普段は教会で神父として仕事してるらしい。立場上、上の人命令に従うつて言つても、フイアンマが一番上でローマ教皇さえ顎で使うから気にしてない。

そもそも、正確には司祭ですらないし。資産は放棄する気なんて微塵も無いみたい。信徒から見たら本当に神父か疑うと思う。全部唯の人間じゃ分からぬ様にしてあるみたいだけど。

宗教と魔術も厳密には分けられてはいるらしいけど、魔法使いの居場所である麻帆良ではあまり関係が無い。

「ま、準備はしつかりする様にな。アキラも多分行くだらうし」

アキラとはもう家族ぐるみの仲だ。旅行に一緒に行く事も多い。アキラのお父さんがフイアンマを信用しているかららしい。

そう言えば、麻帆良に来たばかりの頃、「認識阻害というより世界樹の加護と言つた方がいい……といつか、加護だろうこれ」とか言つてた。

常識がずれていると言つていたし、実際に見て私も魔法使いが魔法の存在がばれない様に認識阻害をかけているのだろうと思つてた。

でも、フィアンマはこゝにきてその考えを捨てた。世界樹の加護で『物事に大幅に寛容になる』かららしい。

最も、良い事ばかりでは無いらしいけど。

一週間後。

アキラと一緒に魔術の練習を終え、まずはバチカンに向かう事に。飛行機に乗るのは初めてじゃないけど、途中でハイジャックにあつた。あつという間に全員氣絶させられてたけど。

倒したのは「一般人を巻き込むのは許せないのである」とて話す聖人だつた。フィアンマはハイジャックがあつた事に気付かず寝てたけど。

いろいろあつたけど、そんなこんなでバチカンに着いた。

「じゃ、教皇と同僚に挨拶してくるから、おとなしく待ってるんだぞ」

『はーい』

軍資金お小遣いを貰つて、イタリアの町を観光する。観光と言つても、一

時期住んでたから美味しい料理の店に行くだけだけだね。

「綺麗な街だね。前ここに住んでたんでしょう、いいなあ」

「まあね。でも、いろいろ大変だったよ」

イタリアの学校の子は私はあまり馴染めなかつた。ルーシーもだ  
けど。

麻帆良の子とは直ぐに仲良くなれたし、何が違うんだろう。

「あつた、ここだよ」

前に住んでいたのは学校に近い場所だつた。流石に聖ピエトロ大  
聖堂から通う訳にもいかなかつたから。

その近く、パスタのおいしい店。小さいけど、店主はいい人だ。

アキラは小学生の女の子三人で入れるかちょっと不安だつたみたい  
いだけど、店主と親しげに話す私を見て安心したみたい。

「アスナとルーシーってイタリア語も喋れるんだよね。凄いなあ」

「まあ、勉強したからね」

「お父様に教えて貰つたから」

フィアンマは全部の国の言葉を知つてゐるんじゃないかと思つ程に  
いろんな言葉を話せる。挙げればキリがないほどだ。

「」の間は古代の文書を読んでたし。

お喋りをしながら昼食を食べ、軽く歩いてからバチカンの総本山、聖ピートロ大聖堂の中に入る。

フィアンマの権限……というか、教皇の権限で入れるよつにカードを作つて貰つた……といふか、作らせたらしい。半強制的。

フィアンマは奥だらつから邪魔する訳にはいかないだらつ。でも、する事が無くて暇だ。

行つた事の無い場所に行つてみたいなあ、と思つたので探検してみる事に。かなり広い所為か、行つた事の無い場所も多い。

「結果、迷子」

「どうしたの？ 急に咳いて」

何処かで道を間違えたのだろう。迷つてしまつた。複雑では無いけど、広くてここが何処か分からぬ。

「おや、どうしてこんな所に子供が？」

後ろから声がしたので振り向いてみると、初老の男性が杖をついて歩いて来た。

「そのカード……ふむ、私はやつた覚えが無いから、私では無く前の……」

私達の方を見ながら何やら咳正在中いるけど、誰だらうか。教皇は

去年あつたから分かる筈だし。

「じじで何をしているのかね？」

「広いから、探検」

「でも、じじが何処か分からんんです。外への道を教えてもらえますか？」

私がぶっきらぼうに言つと、ルーシーがフォローするように続ける。

「ハハハ、迷子になつてしまつたか。仕方無いだろくな、広いから。ついておいで」

笑いながら先導し、外への道を教えて貰つた。外にはフィアンマが待つており、魔術で探知しようとしたのが、空中には円形の術式が浮かんでいる。

「ん？　じじの中にいたのか、お前達。探したぞ」

道理で反応が無い筈だ、と続ける。莫大な魔術的な仕掛けや、領土を保護するための防護陣などが施されている旧教勢力最大最高の要塞だからだろうか、フィアンマでも探知できなかつたらしい。

「世話をかけたようだな、教皇」

「いや、構わん。私にはお前に子供がいる事の方が驚きだがな」

「血は繋がつて無いし、一人は俺様の娘ですら無い」

「そうなのか？」Jの赤髪の子は似てると思つがな」

……え、教皇？

「教皇？ つて、まさか……」

「氣付いて無かつたのか？ ローマ教皇だ。前に選挙があつて新しく変わつたんだよ。前の教皇はもう歳だつたしな」

補足するよつてフイアンマが続けるが、アキラは凄く驚いている。

教皇に会えること自体、凄く名誉なことみたいだし。フイアンマと一緒によく会つてゐるからそつは思わないけど。

つていつか、結局選挙で決められてるしね。

「用事は済んだ。後はイギリスを回つてアイツの所だ」

バチカンに一泊するらしい。書類関係の事と適當な仕事だけで直ぐ済んだらしいから、今田も魔術の勉強だ。

魔術は理論。法則ルールを理解してないといけないから、勉強にも応用が効く。算数とか。

魔術を学ぶのは苦じや無い。フイアンマの説明は分かりやすいし、時々いろんな雑学をしてくれるから楽しい方だ。

アキラもそう思つてゐみたいだし、ルーシーは私達より長い間フイアンマから魔術を習つてきて、私より詳しい。

系統は違うけど。

私専用の靈装も作ってくれたし、今私はそれを使って発動する術式を構築中だ。

やっぱり魔術を作るっていうのは難しい。神話なんかを元にしているモノがほとんどだけど、私が作ろうとしている魔術は神話にはあまり例を見ないものだ。

それでも、頑張ってみる。

イギリス、ロンドン。聖ジョージ大聖堂。<sup>セントジョージ</sup>

『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>の本拠地、そしてイギリス清教の実質的な頭脳でもあるらしい。

「『』<sup>ネセサリウス</sup>が対魔術師機関、『必要悪の教会』？」

「そうだな。無駄に大規模な事件を起こそうとしたり、変な術式を作つてイギリスに敵対すると『背信行為』として追われる羽目になるぞ」

実力で言えば、イギリス清教最大規模。汚れを一手に引き受けると言つ仕事柄の所為か、実力の高い者が集まつてゐるらしい。何人か会つた事あるけど、みんな強そうだった。

対魔術師戦に特化している人物が多くて、フイアンマでさえこの組織と真正面から敵対するのは避けたいと言つてた。

それ位強い人たちがたくさんいる場所らしい。アキラはちょっと怯えてるけど。

「でも、そんな所にお父様は何の用なの？」

「ん？ いや、神裂の子供 火織が一人イギリスに行つたらしくてな。何かあつたら頼れと言つてたからバチカンに行つて俺様の事を教皇に話した所、連絡が来たと言つ訳だ」

「ああ、火織。五年位前に会つた聖人の子？」

「そう、聖人だ」

そう言いながら、フイアンマは何処かへ歩きだす。私達はその後に続いて歩いて行く。

数分ほど歩いていると、長い黒髪の女の子の姿が見えた。

「神裂」

フイアンマは唯一言、呼ぶ。

その一言に気付いたのか、その女の子は振り返る。身長は高くて、近づいてみるとアキラに似ている様にも思える。

同じ日本人で聖人という特徴を持つている所為なんだろうか。長い黒髪、高い身長、顔のつくりまで似ている。

聖人は神の子の特徴を宿すと言つし、それで似通ったのかなあ、とも思う。

「フィアンマさん、お久しぶりです」

近くで見ると、余計に大人っぽく見える。胸も大きいし、スタイルもいい……でも、太ももで切ったジーンズを着ているのはちょっと……。

「久しぶりだな。元氣にしていたか？」

「はい。天草式でいろんな事を学んで、世界を見てもつと学びたいと思つたのでイギリスへ」

「なるほどな。良い経験が出来ると良いが」

聖人の力は強大。みんなが利用しようと動くだらうし、聖人がいるぞつて誇示して力の大きさをアピールするかもしねれない。

……実際、私がやられたときは國家機密だったけど。みんな私の力を利用しようとか考えて無かつた。魔法使いは大嫌い。フィアンマがいなかつたら魔法使いのいる場所なんて居たくも無い。

「ふむ。イギリス清教に入るなら、上の奴に話を通してみよう」

「本当にですか？」

「ああ、約束だつたしな。頼つてくれて構わん」

といいながら聖ジョージ大聖堂の中へ入り、一人の人物と会つた。

「そつちの子は？」

「神裂火織。聖人だ」

「聖人？ また珍しい人材連れてきたものね、暇なの？ フィアン  
マ」

「つるせーな。年齢詐称女。お前ほどじやねーよ」

「誰が年齢詐称女ですって？ それに暇じゃないわ。イギリス清教  
のトップ、<sup>アーヴィング</sup>最大主教としての仕事もしつかりしているわよ」

胸を張りつつ、そう答える金髪の女人。正直十代後半か二十代  
にしか見えないけど、フィアンマ田ぐババアらしい。

火織とアキラの方を見てみると、何を言つてるのか分からないと  
言つた顔をしてる。英語で喋つてるからだろう。言葉の壁は厚い。

「まあお前の事はどうでもいい。こつちの子の事だが……」

「聖人なら大歓迎よ。戦力としても申し分無いしね。後は実戦経験  
でも積ませればいいかしら。どう？」

急に話を振られ、おろおろする火織。英語だから何を言ったのか分かつて無い。

「聖人だから大歓迎だつて。後は実戦経験でも積ませればいい? つて聞いてる」

「あ、ありがとう。え、つと、大丈夫です。後、出来れば英語も教えて欲しいのですが……」

火織が話す事を英語に訳す。フィアンマはそう言えば英語話せなかつたな。と呴いてる。ローラさんは頷きながら私の方を見る。

「慣れて無いでしょうし、言葉の方は日本語が話せる人と暫く行動して貰う事になるから、後で紹介するわ」

それを火織にそのまま伝える。火織はほつとした様子で胸を撫で下ろし、私にお礼を言つてきた。

「ありがとうございました……でも、アスナつて私と同じ年じゃ……」

「昔ちょっと呪いをかけられて、肉体が成長して無かつたの」

アキラに聞こえない様気を付けながら話す。フィアンマはローラさんとまだ話してるみたいだし、聞かれては無いと思う。

話がついたのか、こっちを見ながら日本語で話出した。

「火織のサポートには土御門っていう日本人がつく。しばらく英語を教えて貰いながら仕事をするようにな」

「分かりました。ありがとうございます」

「礼は良いや。しっかり学んで立派な魔術師になれ」  
「フィアンマの立派な魔術師というのは、一流という意味だ。  
魔法使いのアレとは意味合が全然違つ。

そのまま近くのフィッシュ・シュー・アンド・チップスで軽めの昼食をとしながら休憩し、これから仕事を話す。

「んー。意外とあつそり片付いたからな。ロンドンの観光とかをしてもいいかも知れん」

「アキラは初めてだから、丁度いいんじゃない?」

ルーシーはアキラを見ながらそつそつ。私達も最近はあまりロンドンは来ない。学校があるし、特に用事も無いから。

「でも、フィアンマさんの用事があるんでしょう?」

「気にしなくてもいいんだがな。まあ、そつても気にするだろうし、先に片付けて観光でもしようか」

ちょっと嫌な予感もするしな、と呟いたのを、私は聞き逃さなかつた。

大抵フィアンマの嫌な予感は当たる。前にも似た様な事があつたのを思い出す。

「ロンドンからはちょっと遠いかな。具体的な場所は森の中だし、あそこじや転移系統の魔術も魔法も使えん」

そう言いながら地図で場所を確認するフイアンマ。土地開発なんかで地形や道が変わっている事もあって、フイアンマの記憶と違う所が出たりするらしい。

「ま、大丈夫だ。直ぐに着く」

笑いながら言つフイアンマの後に、一抹の不安を抱えながら続く。

ザツザツザツ。草を踏みしめ、歩く音が森の中に響く。

「こんな所に人が住んでるの？」

「まあな。住むのに不便は無い筈だろ？。念るのは数年振りか。ここ数年会って無かったからなあ」

まだ生きていると良いが、あのババア。と呟きつつ、フイアンマは先を歩く。

私達が危なくない様に突き出た枝を折ってくれたり、足元が大丈夫なように草を踏んで道を作ってくれたり、地味に気にかけてくれている。

そうやって進む事十数分。一軒の小屋を見つけた。

小さい家だ。森の中に立つ一軒の家。雰囲気がある。

「元気にしてると良いがな、ラフレンツェの奴。もしかすると次世代に移ったかも知れん」

そして、フィアンマは扉に手をかけた

## 第十八話 約束（じょうじく）（後書き）

はい、ここで終わりです。次回詳しくやつしていく予定。

神裂ネセサリウスに入るの回。土御門は原作でもこの頃既に居た様なので抜擢。

後は地味にウイリアムさんとか。ローラは未だ普通の口調。

名前、洗礼名はW.E.K.Eとかいろいろ駆使して書きました。

情報提供：インフルさん、Spencerさん。ありがとうございました。

次回はネギまで語つ六年前の事件。アレは冬ですが、こっちは夏。  
別の面倒事。

元ネタはサンホラより『エルの絵本（魔女とラフレンシエ）』です。  
聞いた事がある方はストーリーが予測できるかもしれません。ある  
程度オリジナルな設定とか作っていますが。

次回、  
オルドローズ  
隻眼魔女  
感想お待ちしています。

## 第十九話 隻眼魔女（オルドローズ）

昔の話だ。

昔、とある国を追われた魔女が居た。

魔女は一人の子供を拾い、育てる事にした。名前はラフレンツェ。銀の髪と緋色の瞳、時が経つほどに美しく育った女の子だった。

だがある時、とある魔術師が一つの魔術を発動させる。

その術式は死者を冥界よりこの世に呼び出すと書つモノ。当然、それを阻止するために動く者達が居た。

だが、その殆どはやられ、残った者が国へとその情報を伝えた。

魔女はラフレンツェを生贊に、とある術式を作りだす。それは呪い。身体的特徴を持ち出し、後世まで呪いを引き継がせる必要のある魔術。

冥界より死者を呼びだそうとした魔術師は、とある一人の魔術師によつて殺された。

その魔術師は、圧倒的な力で溢れ出した亡者たちを沈め、冥界への扉を閉める事に成功した。

そして、その扉の鍵の役割を果たすのが、『ラフレンツェ』。

魔術師を倒した男の名を、ラト・ディストロ・フィアンマと言つた  
ラフレンツェの呪いをかけた魔女の名を、クリムゾンの深紅の魔女と謳われた  
オルドローズと言つた。

聖なる右を持つ魔術師と、隻眼の魔女という名で高名な魔術師。  
二人はこれをきっかけに出会い、そして後世へと呪いを残す事を決めた。

これは、ファインマに呪いを残す事が出来なかつたという事もある。或いは聖なる右で何とか出来たのかもしれないが、如何せん、完全に扱えていない頃だつた。

空中分解こそ起こさなかつたが、その特異なる能力を完全に扱うには、練度も年期も足りなかつた。

世界へと影響を与えたその魔術を封じ、鍵の役目となつてその土地に縛られている『ラフレンツェ』といふ女。その、呪いをかけられた末裔。

その呪いが、未だに受け継がれている。

日は既に昇り終わつて沈み始め、もう直ぐ夕方だと知らせる時間

キイ、と軽く軋む戸を開け、フイアンマは中を見る。

中には、銀色の髪と緋色の瞳。十五、六と言つた年頃の少女がいた。少女はフイアンマの姿を見て警戒したが、何かに抑え込まれた様に警戒心は薄れる。

「え、っと、誰ですか？」

「……ふむ。先代は死んだか。流石に歳だつたようだしな」

少女の容姿でそれを判断した。死の淵に呪いは受け継がれる。受け継がれていると言つ事はつまり、先代は死んだと言つ事。

「おばあちゃんの知り合いでですか？」

「ああ、フイアンマという。話は聞いているか？」

「あ、フイアンマさん。聞いた事があります。私が拾われたのは五年くらい前ですから、あなたの話はよく聞いています」

「そうか。それならいい」

玄関口でそんな会話を続ける一人。アスナ達は後ろでその会話を聞いていた。

「ほれ、三人とも。挨拶して入れ」

フイアンマが促し、三人がそれぞれ挨拶して入る。中は綺麗に掃

除されていて、清潔感がある。

先代とは大違ひだな。と心中で呟きつつ、適当に椅子へと座つた。

「飲み物は紅茶で良いですか？」

「ああ、何でも構わない」

アスナ達も特に要望は無く、五人分の紅茶をポットに入れて用意する。

「最近は来れ無くて悪かつたな。いろいろ忙しかったんだ」

「いえ、大丈夫ですよ。一人じゃないですから」

その言葉に、眉を顰めた。

この辺りにはフィアンマの張つた強力無比な結界があり、人が入る事はほぼ不可能。フィアンマ自身なら結界を破壊して入る事も可能ではあるが、それが出来る魔術師は世に数人いるかいないと言うレベル。

詰まる所、この場所に来る事の出来る人間など、殆どいないのだ。

「一人じや無い、か」

それが小動物 猫や小鳥辺りならいいのだが。

「それは、誰だ？」

「名前はオルフェウスって言つんですか？」

頬を紅く染めつつ、ラフレンツェはそつ答える。フィアンマは、最悪の事態を予期した。

その姿は、恋する乙女のものと云つ感じだ。だが、それは本来ありえない。

ラフレンツェは、呪いが受け継がれた時点で恋心などを抱く事など無い。何故なら、呪いが心まで侵しているからだ。

鍵である少女の純潔。それを守り通すと言つ事の為に、恋など以外の外。ばかばかしいと思うかもしれないが、実際にやれば世界が滅んでもおかしくは無かつた魔術を封じているのだ。

大地に刻まれた戦術魔法陣。タクトィカル・サークル  
オーリジン龍脈を利用してある意味での魔道書の『原典』。フィアンマでさえ破壊する事の出来ない様なモノが、ここにはある。

ラフレンツェも、祖母が死んで口を開きだし、誰も来ない、誰もいないこの場所ですつと暮らして来たのだ。

呪いが薄まつた？ 否、フィアンマならばそれ位は見抜ける。呪いが薄まつたなら、同時に身体にも特徴が現れる筈だ。

(違うな、これは )

誰かの、仕業だ。

「 フィアンマさえ、一目では見抜けぬほど巧妙な術式。だが、不可能では無い。」

「 観察眼がいくら優れているといつても、どれだけ大量の知識を有しているといつても、見るだけで魔術の全てが分かると言ひ訳ではないのだ。」

「 ……それで、その……人に話すのは凄く恥ずかしいんですけど……昨日の夜、彼と一つになれました……」

「 真っ赤にした顔をみて、これが普通の女の子ならば、この恋は応援してやりたくなる物だろう。」

「 だが、フィアンマの取った行動は、ラフレンシエの首を絞める事だった。」

「 左手で首を掴んで拘束し、右手でワイヤーを操って瞬く間に術式を構成していく。」

「 ……な、何を……」

「 最悪だよ。全く。最悪の事態だ。俺様は常に幸運な方だと思つてたんだがな」

聖人であり、聖なる右を持つフィアンマは幸運だ。聖人であるだけで、特に魔術を使用せずとも何らかの加護が存在し、聖なる右は多くの十字教的超常現象を自在に行使できる為、常に何かしらの加護が働く。

聖なる右を使えば、呪い 자체を解く事は簡単だ。だが、解く訳に

はいかない。それをやってしまえば、世界が終わる。

だから、一旦の場所を世界から『隔離』する。

閉ざされた場所。結界で外界との接触を断たれた世界で、呪いを復元させるのだ。

呪いは完全に体に定着している。この状態の魔術が、何者かによつて外部から『書き換えられて』いる。

数年間姿を現さなかつたツケだらう。もつと短いサイクルで周期的に来ていれば、ここまで事態になる事は無かつた筈だ。

恐らく、長い時間をかけて書き換えられたであらう術式を、強引に、短時間で、『書き直す』。

激痛が伴うだらう。もしかすると人格が崩壊する可能性もある。肉体的なものも、精神的なものも、痛みは想像を絶する筈だ。

それでも、誰かがやらなければならぬ。

「悪いが、さつさと終わらせ」

バチン！　と、左手が弾かれた。その光景に目を見開く。

赤黒い何かが、ラフレンシエの体を覆う。氣味の悪い何か。この世のものとは違う、何か別の存在。

見ているだけで吐き気がする様な、嫌悪感を誘う色。その色彩だけで平衡感覚を失いそうな、妙な感覚に陥る。

「まさか　つ！」

外を見る。夕暮れ時、日が沈むころ。

最悪だ。

ついて無い。全く持つてついて無い。と、小さく呟く。

「アスナ、この時間帯。教えただろう？」

アスナはファイアンマの行動に驚きつつも、その行動を見ていた。  
そして、ファイアンマに問い合わせられ、外を見る。

そして、答えるは、

「おうまがとき  
逢魔時……？」

おうまがとき  
逢魔時、おおまがとき  
大禍時とも呼ばれる、昼と夜の移り変わる時刻。

たそがれじき  
黄昏時のことと、古くは「暮れ六つ」や「酉の刻」ともい、現  
在の18時頃のこと。

逢魔時とは、古くから言い伝えられていた時分。昼と夜、即ち現  
世《この世》と常世《あの世》の交わる時間帯。

「そう、逢魔時だ。ラフレンツォといつ呪いが封じていたのはな、  
これなんだよ」

軽い説明ならした。本当に軽いもので、大した事は教えていない。

ラフレンツェという呪いが封じていた物。それは、『道』だ。

あの世との世を繋げる、ふざけた魔術。あり得ない、ありえてはならない魔術を、発動させた奴がいた。

「いつの時代にも、死んだ者を求めるバカはいる。それを本氣でやるうとした奴が、作り出した魔術だ」

古代エジプトにおいては、靈魂は不滅とされ、死者は復活するとされていた。オシリスが死と再生を司る神として尊崇される。

それ以外にも、日本では黄泉の国、インドでは死者の国などともいわれ、死とは宗教に置いて何かしらの仮説がなされているモノだ。

それらをいくつか組み合わせた、かなり分かり辛く、把握し辛い魔術。これを作った魔術師は相当な腕なのだろう。魔術師としての技量はファイアンスマにさえ匹敵する。

死者を冥界から呼び戻す、生死の狭間を超える為の、あつてはならない魔術。

これを使えば、本来一方通行であるこの世からあの世への道が、相互通行になってしまう。そうなれば、世界には死者が溢れ、混沌に陥る事になるだろう。

そもそも、オルフェウスという名を聞いた時から嫌な予感はしていた。

オルフェウスとは、古代ヘレネス（ギリシャ）神話の英雄的芸術

家の名だ。

演奏を教わり、その音楽の魅力には敵することができないほどで、人間ばかりか、野の獣まで聴きほれ恍惚するほどだった。さらには樹木や岩までが影響され、樹はさし寄り、岩の冷酷さが和らいだといつ。

オルフェウスは妻エウリディケーを冥界に取り戻しに行くという伝説・物語で知られている。

つまり、その男は、冥界にいる誰かを連れ戻そうと、このふざけた魔術を復活させたのだ。

「一田外へ出るが。」これは危ない

早口にそつ言い、壁をブチ抜いて外へと出る。

空は茜色に染まり、太陽が沈む方向と逆方向には夜空が見えた。大地には幾何学的な文様が浮かび上がり、龍脈から力を得て、その魔術が発動しようとしている。

地面を見れば、所々が黒く滲んでいる。これは恐らく大地が『何か』に浸食されているのだろう。

それを見て、フィアンマは影の倉庫から神楽鈴を取り出し、鳴らす。

「ことよさしまつりき、かくよさしまつりし、くぬちにあらぶるかみたちをばかむとはしことはしたまひ、かむはらひにはらひたまひ

て」ととひし、いはねきねたちくさのかきはをも「おやめて」

『大祓』<sup>おおはらい</sup>の祝詞。神道の魔術による禊<sup>みそぎ</sup>の結界。

りいいん と、鳴る音色。その場所だけが、空気が変わる。

神秘的な音が重なり、より強く、より強靭に結界を構成していく。祝詞を唱え終え、結界の強度を保たせるために更に地面に術式を描く。そして、周囲には火を。

火とは元々『浄化』の意味を併せ持つ。『死と破壊』とも取れるし、『再生と浄化』の意とも取れるモノだ。死靈達に対して、強力な意味を持つだろう。

「……ふむ、まあこれ位やつておけばいいか」

ワイヤーを使って地面に描いた術式を見て、そう呟く。

「……今までやるの?」

「どうか、何が起つてゐるの? これ

「これ位やらなきや駄目なんだよ。後、出来ればこの後の事は見ない方がいいだろ?」

ルーシーとアスナの問いかにそつ答える。聖なる右を発動させ、先ほどまでいた家を見据えた。

そこは、既に黒い何かに覆われており、気味の悪い何かが這いず

つてゐる様にも見える。

これが、あの魔術の結果、なれの果てとも言えるだらう。

歪な形でこの世とあの世が混じり合い、中途半端に顕現した死靈。それらがこちら側の存在を喰らつて実体を得ようと這いすり寄る。氣味が悪くて仕方がない。

これより、夜が深まる度にこの『死靈』達は力を増していく。さつさと始末を付けなければ、不味い事になるのは自明の理だ。

「アスナ、連絡用の靈装は持つてるな？」

「うん。誰に連絡するの？」

「ローマ教皇。後はワシリーサだ」

ワシリーサと聞き、アスナは苦虫を潰した様な顔をする。そこで嫌か、と問い合わせたくなる表情だ。

「そういうやな顔をするな。死靈や惡魔退治は『殲滅白書』の方が専門だ」

黒の教団の一派閥であるロシア成教。心靈現象の解析と解決を目的としている。

よつて、他の十字教にない特長は『オカルトの検閲と削除』であり、「在らざるモノ」である幽靈・亡靈・惡靈といった分野を専門とする、所謂ゴーストバスターズ。

「生前を語るのは悲しみにつけいる偽物か天国にも地獄にも行けない罪人である」という判断から、「生前を語る存在はすべて殲滅対象」という方針の下に活動する

「後はアックアだ。戦力として使えるだらつ」

実際、テツラはともかくヴェントは死靈に対しての手段は持ち合わせていない。テツラにしても、実体を持たない相手に『光の処刑』は効くか分からぬ。

フィアンマは聖なる右を、アックアには聖母の慈悲を利用した聖杯の水を扱う事で対処が可能だ。

死靈は直ぐそこまで迫っている。辺りは暗く染まり、夜空にきらめく星は明かりとしては心許無い。

「お前等はここで待て。結界から出よつなどと思つなよ。後はこの梓』を鳴らし続ける。対策は十全にしていても足りない。最悪、喰われるぞ」

そう言って、結界から一歩出る。

途端に襲い掛かってくる『何か』。黒いソレは嫌悪感と不快感を嫌が応にも感じさせる。

フィアンマはそれを相手に、唯一度、聖なる右を振るつのみ。

莫大な閃光が迸る。爆音とともに死靈達は消し飛ばされ、冥界へと送り返される。

たすけてくれ……助けてくれ……

死者達の怨嗟の声が聞こえる。一度と戻る事の出来ない場所を求める、死者達は生者を探してさまようだけ。

「ここから出してくれ……

頭が痛くなる。気分が悪くなる。

本来聞こえない声、聞こえてはいけない声。冥界から生者を求める声。

空は黒く覆われ、星が見えない。だが、手元にあるルーンのカードで火の魔術を使つ事で、ある程度の明るさは保てる。

「対魔靈には十字架を、つてか」

影から取り出すのは十字剣。ヒカルシズム祓魔式ヒカルシズムの為の剣だ。聖なる右を発動している以上、武器等何の意味も無い。

だが、これは戦闘の為の物では無い。

剣が壊れない程度に『右手』の力を込め、地面へと突き刺す。それだけで、地面を覆う氣味の悪い黒い何かが薄れていく。

結界からそう遠くは無い。この辺り一帯に二重の結界を張る必要がある。幾重にも張り巡らせて置かなければ、抜けられる可能性がある。

要所の点ポイントに突き刺し、ワイヤーを使って円を描き、より詳しく陣

を描ぐ。これで神道とは別の結界の出来上がりだ。

本来なら他にも歩方を使つた魔術などで結界を張りたいが、如何せん、時間が無い。

これ以上は時間を無駄にできない。そう思い、死者達を『右手』を使って送り返しつつこの術の中心点へと向かつ。

かくして、楽園への扉は開かれた。

## 第十九話 隻眼魔女（オルドローズ）（後書き）

神道等の魔術はレンタルマギ力を参考にさせていただきました。タグにレンタルマギカつて書いた方がいいですかね？

次回は事件收拾まで行くと思います……多分。  
感想お待ちしています。

## 第一十話 楽園喪失（パラダイスロスト）（前書き）

投稿遅れました。Fateとか境ホラとかまあいろいろ興味を持つて読んでたらこの始末。

な、何が起こったのか（ry

## 第一十話 楽園喪失（パラダイスロスト）

バチカン、イギリス、ロシア。黒の教団の中でも最高レベルの派閥が、一堂にそろつて会談を設けていた。とはいえ、魔術を使つた遠隔での会話だが。

イギリス清教“アークビショップ最大主教”、ローラ・スチュアート。

ロシア成教“殲滅白書”、ワシリーサ。

ローマ正教、ローマ教皇。

議題は先ほど連絡のあった『イギリスで起きている怪現象』について。靈装による探知は何かに妨害されているらしく、詳しい事は分からぬ。

「『必要悪の教会』も動かしてはいるけど、未だ具体的な場所は把握できないわ」

ローラが、いつもと違つて神妙な顔で告げる。

「こちらも駄目だな。場所の探知が出来ない。イギリス国内と言つ事までしか分からぬ」

「ヒツも同じよ。どーしたもんかしらねえ」

教皇が重々しく告げるのに對し、ワシリーサも口調にしつつも通

りだが、霧囲気が違う。

皆、それだけ事態を重く受け止めていふと言つ事だ。

「居場所が探知出来ない理由は？」

「おそらく、あの辺りの空間が歪んでいるのでしょうか。『テレスター天使の力』とも違う、また別の何かです」

「『殲滅白書』の観点から言わせて貰つと、アレは冥界に繋がっているんじゃないかって思うのよね」

ワシリーサの言葉に、皆一斉に顔を向けた。

教皇はそのまま続きを促し、話し始める。

「あの現象、空間が歪むとか言つ辺りは分からぬけど、『必要悪の教会』の調査とウチの過去の文献、後は魔導書の文献なんかも探つてる訳だけど」

分かつたのは一つ、とワシリーサは続ける。

「イギリスの中で有数の龍脈が通つてゐるにも拘らず、昔からイギリス自身が保有せず、私有地として強大な防壁が敷かれた一帯があつた筈よ。あの男が自分の私有地で防護用のモノを用意してはいると言つていたから、恐らくはそれだと思つていた訳だけど……。

それにしては、奇妙なのよね。アレは人を立ち入らせないモノでもあるけど、出ていかせないモノもある。それに、龍脈だけに限つて私有地としているにしてはあまりに範囲が広すぎる。一帯……。それこそ、巨大な森一つを私有地にしてる筈よ。そこで、何かの大

魔術が発動した可能性も否めないわ。

現に、結界で分かれ辛いけど亡者が徘徊してゐみたいだし、伝承で一度国一つ滅びたつて言つるものもある位だもの。可能性はあると思うわよ

「 フィアンマが何かをしだした可能性がある。それを、三人が悟つた。

あの男が、まさか世界に対して牙をむいた？ そつ考えるが、他に答えが出てこない以上、答えはそれしか無い。

「 もしくは、何かを封じている。と云ひ可能性もあることはあるよね。一回問い合わせた事があるけど、『あの場所には近づくな』の一点張りで何も教えてくれないし。フィアンマの工房として扱っているなら、そこはレベルが低過ぎるわ」

フィアンマの為の魔術の実験室などとしては、聖ピエトロ大聖堂の一室が与えられている。それにプラスし自分の私有地である島も存在するが、こちらは未だ世界に露見していない。

普段は其処に籠つて魔術の研究をしており、出でぐることは滅多にない……筈なのだが、最近は戻つてくる事さえ殆ど無い。

昔はよく引き籠つて研究をしていたと言つて、何かしらの理由があるのだろうと判断付ける。可能性としては、あの娘と言つていた少女たちが原因だらうか、と考える。

それにしたつて、ルーシーとか言つ女の子はかなり昔から一緒にいた筈だ。具体的には、アスナという子が来てから、ヒローラは考える。

何かをし始めた。その可能性が否めない。

だが、果たして彼に勝てる人間が存在するのだろうか？ 大天使さえ真正面から叩き潰すとさえ豪語し、それを可能にする知識と実力を兼ね備えている。

出来れば、敵対などしたくないものだ。

そんな風に考へてゐる時、会議室の扉が開かれた。

「……何をしている、アツクア。今は会議中だ。出でいけ」

教皇が威厳をもつてそう言つたが、アツクアはビニ吹く風と言つた様子ですかずかと踏み入る。

「アスナから連絡があつたわ。フイアンマの傍にいる筈のあの子から、ね」

それを聞き、教皇は黙らざるを得なくなつた。確かにアツクアは頼れる実力者だ。フイアンマに有事の際、頼る可能性は低くない。

……最も、それはフイアンマに何かあつたと言つ事だが、それはありえないだろうと教皇は頭を横に振る。

「それによると、イギリスの一角でとある大魔術が発動したらしいわ。詳しい事はフイアンマが知つてゐるそうだけど、肝心のフイアンマは結界張つてその中心点を目指してゐるって言つてたわね」

「なら、あの男が動いていふと言つた事？ 私達の出番は無いじゃな

い

「ところがどうここ、それでも無いわ。フィアンンマ曰く、『冥界の門が開かれた』らしい。肉体を求める死者や怨霊があの辺りに増え始めているから、『殲滅白晝』にて云える様にとも言われているわ

視線でワシリーサに促すと、彼女は一旦靈装での通信を切る。恐らく、動き始めているのだな。

「私も出る。祓魔に関しては私ほど精通した者はいないハズよね？」

「ワシリーサも相当なレベルだが、お前と比べるとやはりお前が一歩抜きんでているだろうからな」

とはいって、実力差はそう無い。ギリギリ勝てるか勝てないか。アツクアとワシリーサの実力はそれほど伯仲している。

「既に用意は済ませているわ……あの子達に手を出したら、怨霊と言えど、タダじや置かない」

ゾックとする様な声色で咳き、教皇は冷や汗が出る。

「……他の神の右席は、出るのか？」

「今回は出ないそよ。そもそも、ヴュントに至つては死者相手じゃ分が悪いしね」

天罰術式は限定的に空気を必要とする相手にこそ真価が發揮される。そもそも死んでいて呼吸を必要としない死者や靈体相手では分が悪いのだ。

それ以外にも方法がない事も無いのだが、使う気は無いらしい。

「……一応『殲滅白書』を動かして置いたわ。ローラ、そっちでの扱いは頼むわね」

「了解よ。こっちも動いてるし、専門部署に任せた方が手早くすむでしようしね」

「ワシリーサ、お前は出ないのか？」

「出でもいいけど、指揮系統を」

「アスナが助けを求めてたぞ」

ブチッ、と通信が切れ、数分。沈黙を破ったのは、通信が繋がった音だった。

「用意できたわ。直ぐに出発するわね」

言いたい事は山ほどあるが、取りあえずこの事態を収拾させる事が先だと考え、教皇は何も話さない。

この二人の行動に軽く頭を抱えながら、小さくため息をつき、

「全く。フィアンマは、何を考えているのだろうな

ポツリと呟く教皇。答えるものは、いない。

イギリス某所。

フィアンマは変わらず、歩き続けていた。歩き続けているが、周りは暗く、闇に覆われて視界が殆ど埋まっている。

(……明らかに距離がおかしい。空間がねじ曲がっているな、これは)

既に中心点であるラフレンツの家についてもおかしくない筈だ。だが、それが無い。距離感が狂っている訳でも無いだろ。

恐らく、この辺りに仕掛けられた結界が変質している。外からの干渉を防ぎ、内側からの衝撃を緩和する。そつ言ひ結界が変質し、内部が迷路の様になつてしているのだ。

万が一の事を考えていなかつたフィアンマでは無い。可能性の一つとして用意し、それに対する策として、ここから出れない為の結界を用意していた。

幾重にも張り巡らされた強靱な結界は、唯の亡者どもに破れるほど脆弱な作りはしていない。

とはいえ、流石にこれでは堂々通りだ。幾ら行つても空間がねじ曲がつてこるのでどうしようもない。

その為、少し強硬手段を取る事にした。

結界は壊せない。壊せば恐らく外へと亡者たちが溢れ出すだろう。  
それは防がねばならない。

ならばどうするか。手つ取り早く考えついたのは一つ。

聖なる右を、一度振るうだけ。それだけでいい。

元々聖なる右には多数の十字教的超常現象を起こす力が備わっている。これがあるおかげでフィアンマの周りは亡者たちの瘴気で気を狂わされる事も無いし、余計な干渉を受ける事も無い。

闇を振りはらう様な、眩いばかりの閃光が炸裂した。

一瞬後で霧が張れるように闇が霧散し、空が見えた。星が見えることから推測するに、夜空だ。

「夜、か。面倒だな」

靈と言つ類の存在は夜に力を増す。伝承や逸話などでもそうだが、人々は闇と夜を恐れる。

人に害を成す存在は闇夜に紛れて行動し、人在らざる存在は聖なるものの象徴である光を恐れ、太陽の光を浴びれば力が減ると言われる。

魔術的な観点から見れば、靈と言つ存在は星の状態で力の上がり方が変わり、日が昇れば星が見えなくなる為、力が上がる事がない。

故に夜にのみ行動するのだ。

闇の霧は一時的に晴れただけで、また直ぐに霧で見えなくなるだろ。これを止めるには、早く中心点まで行って封印し直すしかない。

霧が晴れている間に中心点を探す。これ自体は別に難しい問題では無い。結界があるから外から探知がしにくいだけで、内側に入ればここまで分かりやすい異常の塊などそうは無い。

簡易的な探査魔術。方向は四時の方向。どうにも完全に見当違いの方向に向かっていたらしい。

「 方向が分かれば、距離など問題では無い」

なにせ、十字的超常現象の一つには距離など関係無く移動できる力があるのであるのだから。

アスナとアキラは、結界の中でおとなしくしていた。

アキラは怯えているのか、アスナに捕まつたままで、ルーシーは結界の外の様子をうかがっている様だった。

「アックアに連絡は取れたのよね？」

「うん。直ぐに準備して来るって行つてたけど」

手持無沙汰な状態でも、連絡位は出来る。それゆえアックアに連絡してから一時間近くが経つ訳だが……。

「……お父様が、一時間もかかるなんて思えないけど」

「フィアンマは強いけど、何でもかんでも力でどうにか出来るって訳じゃないって、自分で言つてた」

「それなら余計にお父様が時間がかかる訳無いと思つけど」

フィアンマの持つ知識は膨大だ。十万三千冊の魔道書の知識、加えて、魔法の知識もあるし魔道書以外の知識もある。

力で解決できなくても、知識で解決できる。これほどの知識を持つものなどそうはない。といつも、存在しない。

そんな事を考へている時、結界が揺れた。

否、正確に言えば結界が張つてある大地が。大きく揺れた。

外側を見れば、何かが結界に攻撃してきているのが分かる。巨大な蛇の様な、氣味の悪い何か。

「アレは……ヒュドラー?」

九つの頭を持ち、地獄で見張りをしていると言われる龍。化け物の中でも最高峰に脅威度としては高いだろ？

その吐息は毒が含まれ、矢にヒュドラの血を塗つて放てば、毒矢として扱われたと言ひ。

幾らフイアンマが強靭な結界を張つていたとはいえ、あんな化け物がいては破壊されてしまう。ルーシーやアスナはそう考えた。

「だ、大丈夫なの？　あんな大きい龍が攻撃してるけど、この結界は、大丈夫なの？」

アキラが問う。ヒュドラが相手なのだ。この心配も仕方がない。

だが、恐らくアスナやルーシーでは相手にならない。昔一度やつた天使を召喚すると言う方法も、偶像を持たない為に出来ない。

手詰まり。結界が破壊されるのを、待つしかない。そう考えた時。

「…………」

ヒュドラが、大きく鳴いた。

【 原因は分かり切つている。誰かが、ヒュドラの首を一つ落としたのだ。】

「あんな可愛い女の子に手を出そなんて、地獄の化け物も落ちたもの……というか、地獄のモノだからこんなものよね」

現れたのは、アックア。周りには多量の水銀が渦巻き、アックア

の影から未だ溢れ出ている。

銀と言つ物質は退魔性に優れる。しかも、魔術的な処理を施したものなら尚更だ。

「斬ツ！…」

そう叫ぶと同時に、水銀が形を変えて刃と成す。鞭のようにしなって振りまわされるそれは、当たる寸前に厚さ数ミクロンまで圧縮され、鋭利な刃と化していた。

水銀とは常温で液状を呈する最も重い物質であり、これを高压、高速で振りまわした際の運動エネルギーは凄まじい。

アツクア自身は、これを『月靈體液』と呼んでいる。

水に関して言えば、『神の力』ガブリエルを司るアツクアは最高峰の術師だ。流体操作もお手の物で、実力は真正面からの戦闘に関して言えば神の右席の中でも一番目にあたる。

「自動防御。『水よ』」

水銀に与える命令と、水のルーン。

足元の土から水がしみ出し、空中に浮かんでアツクアの上空に留まる。止まる事無く水が溢れ出していき、上空の水はどんどん嵩かさを増し、膨大な量の水がアツクアの意のままに動く。

そして、刻まれる文字は『ラグズ a g o u n』。

水とは、容易に堆積を変えられる物質で、上手く使えば爆弾にさえなる。

水はヒュドラーに絡みつき、体積を増やして膨張し、ヒュドラーの体を締め上げる。強度は大したものではないが、流体故に何度も壊されても作り直す事が可能だ。

「斬ッ！！」

そして、水銀による攻撃。ヒュドラーだけではなく、周りの亡者達の相手もせねばならない。

聖杯の魔作を使った伝説。大釜の魔力には死者を蘇らせるもの、魔女ケーリック・ウーンの使つ3滴の靈感を準備するためのもの等があるといつ。

ある意味で、この事態を好転させ得るもの。

この伝承は、逆の意味で言えば蘇らせる事がない、と言つ事だ。魔術では珍しいが、じつにじつた逆転の意味を持たせる事も可能ではある。

最も、神話から外れてしまふ事で予期せぬ力の発動と言つ事もあり得る。その為、こういった行為をやる者は本当に一握りしかいない。

手っ取り早くすませるには魔術的な意味を持つた音で『鎮魂歌』でも歌えばいいのだろうが、生憎と、アツクアにはそれをやる暇もない。

アスナ達にしても、その魔術は知らないのだ。

水の塊がハンマーの様にヒュドラーにぶつかり、ヒュドラーもまた、不死であるが故に怪我など気にせず捕縛を解いて殺そうとする。

持久戦は出来ない。ヒュドラーの吐息には毒があると言われている。むやみに長引かせれば、体に何かしらの変調が起る可能性もまた否めない。

「変形、攻撃開始」

小さく咳き、水銀と水がそれぞれ形を変える。

大きな槍。圧縮された水銀と水はダイヤモンドさえ切断するウォーターカッターの様なものだ。

それが、放たれる。

「…………！」

強力な対魔性を持つた水銀。アツクアは元は『殲滅白書』の所属だ。故に、こういった類の相手は慣れている。

ヒュドラーは大きく叫びながら槍をどうにかしようともがくが、見る見るうちに弱っていく。

魔術的処理を施したからこそその強力な攻撃。唯の水銀を操作しただけでは、こうはならない。

数百トンもの水を操作する事は、アツクアにとつて造作も無い。

それが水銀だらうと、だ。

「私を殺したいのなら、悪魔の王でも連れてくるのね」

小さく咳き、水銀はさらに変形した。無数の槍となつて突き刺さり、ヒュドリはついに倒れ伏した。

「……取りあえず、無事ね。フィアンマの奴、この子たちを放つておいて何やつてるのかしら……」

アスナ達の方を見ながらそう言い、何処かへ行つた同僚を思い浮かべた。

## 第一十話 楽園喪失（パラダイスロスト）（後書き）

はい。ケイネスです。水銀です。意外と強そうだったのに出しました。

今後はアキラの武器にでもしようかなあ……と思つたりします。てか、この話意外と長くなつた。

次回、次々回辺りでこの話は終わつて舞台は麻帆良に移る予定。感想等あれば頂けると嬉しいです。

## 第一十一話 到來野（ヒリュウシホン）（前書き）

到來の野。<sup>エリュウシオン</sup>ひらがなあるとアレかな、と思つたものでタイトルでは消しました。

更新が遅れました。テストって滅べばいいと思ひ。

## 第一十一話 到来野（ヒリュウシホン）

足元の草を踏みしめる音がする。周りは暗い。夜と言ひつ事だけが原因では無く、辺り一帯にある霧も原因だ。

その中で一際異質な存在がいた。髪は黒く、瞳は赤い。体は大きく、数メートルと言う巨大さを誇っている。

服装は豪奢でありながらも汚れており、一昔前の貴族という風体に感じられる。雰囲気もまた、唯の人間でない事が一目瞭然だ。

一歩歩く度にその存在は異質さと強靭さを増し、存在感を増しながら、周りの悪魔を従え亡者を従属させ死者を隸属させて歩み続けていく。

「 異質の中心点。そして、ファイアンスマはいた。」  
空間が歪み、辺りの木が曲線を描いているように見えて気持ち悪い。  
「 い。 」

そんな事を気にせず、中心点であり特異点であるその場所の前で足を止める。

「……ここか」

特異点であり、中心点である為か、異質なが肌で感じられる。その異常さは人間にとっては毒だろつ。並の人間ならば、近づくだけで発狂してもおかしくは無い。

特に何がある訳ではない。何かがいる訳でも無い。強いて言つたら、リフレンシュの亡骸がそこに横たわっているだけ。

だが、其処が扉だ。境界線は、既に破られている。

扉は見えない。だが、一步踏み出せばそこは景色が一変し、冥界となるのだらう。

死者が踏み出しへならぬ一步。生者の存在するこの世界に対して、一步踏み出す事は、本来ならば出来ない。

しかし、それを可能にするのがこの魔術。境界線をあいまいにして、死者を呼び寄せる滅びの魔術。

(……本来なら、こんな魔術は発動しない筈なんだがな)

フィアンマはそう思考しつつも、杭を一本一本地面に打ち込み、螺旋を描く。

本来一方通行であるべき、あの世との世の関係性を覆す。その魔術を打ち消す、と言つよりも封印する為の魔術だ。

基礎的な理論はギリシャ神話。オルフェウスの名を騙つた辺りか

らも、その神話を使用した事が分かる。

音が聞こえる。豎琴だ。

オルフェウスは豎琴の名手であり、その音楽の魅力には敵することができないほどで、人間ばかりか、野の獣まで聴きほれ恍惚するほど。さらには樹木や岩までが影響され、樹はむし寄り、岩の冷酷さが和らいだといわれている。

この音が冥界からこの世への道しるべになっているのだろうか。  
否、それは違う。

神話の通りにしたいのならば、この音は死の国で冥王ハーデスに音楽を聞かせている筈だ。存在するかどうかは別の話として。

豎琴が止んだ。足音が聞こえ始める。

段々と大きくなつてくる足音。近づいてくるのが分かる。

この神話の最後を知つてゐるのなら、振り返る愚は犯さないだろう。振り返った所為で、神話では最愛の妻を取り戻す事が出来なかつたのだから。

パン！　と手を叩く。

音は杭に伝わって振動し、魔術を用いることでその音は反響しきくなつていく。

敵意に気付いたのか、男は豎琴を鳴らす。タネが割れているのなら、この程度の魔術は何の脅威にもならない。

豎琴の音は杭の音と響き合い、変質し、打ち消した。

「地獄に墮ちる。クソ野郎」

「ここまでやつておいて、助かるなどとは思っていないだろうな。

ファインマの眼がそう語っている。助ける気などない。折角冥府まで道が直通で繋がっているのだ。そのまま墮ちてしまえ。

右肩に現れる歪な第三の腕。『聖なる右』は、莫大な光を放ち、扉の先にいる一人を容赦なく消し飛ばした。

どんな邪法だろうが悪法だろうが、問答無用で叩き潰し、悪魔の王を地獄の底へ縛り付け、1000年の安息を保障した右方の力。

莫大な閃光は魔術的な意味を持ち、扉を強制的に閉める。

歪みを正す。それがこの右腕の力だ。

唯存在するだけで瘴気は浄化される。聖なるものの象徴。

辺りにいた亡者や死者はこの右腕の近くによるだけで存在が薄れ、消されていく。冥界へと帰つていく。

「……終わった、か」

後始末もする必要があるが、それは後で良い。一先ず封印を強固なものにしなければならない。十万三千冊の魔道書の知識を持つて、この冥府の扉をこの地に祭封印する。

しかし、これで全てが終わつた訳ではない。この魔術は、どう考  
えてもあの程度の男が自力で何とかできるレベルでは無い。

相対すれば相手の力は大体計れる。だが、あの男は計るまでも無  
く三流の魔術師だ。

あの程度の魔術では、フイアンスマはおろか正式な魔術結社に属し  
ている魔術師でも勝てる。そう思えるほどの実力だった。

裏がある。もしくは、バックがいる。

だが、それを調べるのは一先ず後回しだ。後始末はローラにでも  
任せ、さっさとここから立ち去るとしよう。と思考し、アスナ達の  
事を思つ。

「ハア、ハア、ハア……」

「どうした？ この程度かね、君の実力は？」

「アツクア！」

血塗れでありながらも、アツクアは立つてゐる。その前に立つのは  
一人の人物。口調や声からは男の様だと思えるが、絶対的にそ

だとは言い切れない。

黒服、メートルで計るべき大柄の体躯。後ろには亡者、死者の群れ。

辺りに飛び散るのは水だけでは無く、血、水銀もある。

「ハア、ハア……斬ッ！」

「見飽きたよ、それは」

いや、受け止めたと言つよりは刃が自分から避けた、と言つた方が近いかもしね。

「一体、どうなってるの……？」

アキラが疑問を浮かべる。

あの水銀は先ほどまでヒュドラーを圧倒し、叩き潰した靈装だ。使用者の事も考えれば、一級品の物だと判断できる。

だが、あの男はここに来てから一歩も動いていない。攻撃は全て直に受けているにも拘らず、傷さえ無く、疲労さえ無い様に思える。

「そもそも人間程度が我と争う事が、まず間違いなのだよ。幾ら魔術が使えても、脆弱な人間であることには変わりないだろう？」

溜息でも突くかのように肩をすくめ、そう言ひ。

だが、

「そこが良い。君達のこの世界は楽しいよ。移りゆく歴史と言い、争い、娯楽、あらゆるもののが存在する……ああ、羨ましいね、本当に」

「羨ましい……？」

悪魔が、人間を羨む？

アスナが疑問を浮かべたのは其処だ。悪魔とは往々にして人間を見下す。だが、この悪魔はそれとは違う。存在感も、力も、そちらの悪魔どころか爵位級さえ圧倒する力を持っている。

格が違うのだ。『神の右席』の実力者とて、この存在に勝てる者がいるのか。

そう考えた時だ。

「少々、助太刀させて貰うのである」

派手な音が響き、巨大なメイスが振るわれた。

ゴルフウェアの様な服を着た、筋肉質で巨大な男。水の魔術を使っているのか、その動きに音が無く、滑らかだ。

衝撃は殺しきれなかつたのか、大きく後退する悪魔。

突然現れた男に驚くアツクアとアスナ達。男の手には巨大な金属の塊、撲殺用の金属棍棒。<sup>メイス</sup>

騎士が馬上で使う槍にも似ているが、違う。五メートルを超す大きさのそれは、まるで鉄骨を使って作られたかのようなオブジェ。

追撃するのは辺りに散らばっていた大量の水。槍や鎧へと形を変え、悪魔へと殺到する。

そのすきに男はアツクアの元へ行き、治癒魔術を施す。

「あなた、は……？」

「私の名はウイリアム＝オルウェル。唯の傭兵である　いや、今はこう名乗ろう『F1erer210』と」

アスナ達に背を向け、ウイリアムはメイスを構えた。魔法名を名乗つたと言う事は、戦闘の意思があると言ひ事。

激戦が、始まる。

ウイリアムがここに来たのは、イギリスにいながらも異質さを感じ取った所為だ。

聖人である為、イギリス清教が動くよりも早くここへ来る事が出来た。無論、最低限の準備をして。

内部では空間が歪んで場所が分かり辛く、道に迷っていた所で、アツクアとアスナ達を発見、助力する事にした。

相手は明らかに人間では無い。なら、人間に手助けをするのはある意味で当然の事だろう。

「おや、新手か。まあ、どうでもいいがね」

まるで何も無かつたかのように、魔羅は立ち上がりて服をはたく。顔を良く見ると、魔力の流れと共に鱗の様な物が見える。

「先ほどの攻撃で程度は知れた。それに、得意な魔術もね。君では我の足元にも及ばないよ」

一瞬だ。一步で距離を詰めた魔羅は、その大木の様な腕を高速で振りまわし、ウイリアムへと肉薄する。

対するウイリアムは聖人。身体能力は常人と比べれば途方も無いが、最上位の魔羅と比べればそれは見劣りするだろう。

振るわれた腕を、メイスでいなす。風が頬を打ち、威力の大きさを物語らせる。腕を振りまわすだけでこの風圧。直に当たればどうなるかなど、想像に難くない。

接近戦は危険だと判断し、水の魔術で距離を取る。

だが、それだけでアツクアがあそこまでボロボロにやられた理由

が説明できない。ウイリアムから見ても、アツクアは相当な腕の魔術師だ。聖人ほどで無いにしろ、身体能力は高い。

体つき、体の動かし方を少し見る事でそう判断したが、絶対とは言えない。油断したからあそこまでダメージを喰らったのかもしれないし、何か一瞬のすきをつかれたのかもしれない。可能性なら幾らでもある。

ウイリアムはメイスを振りまわす。高速で振りまわされるそれは、大木ですら一撃で難ぎ倒す一撃だ。

それを、片手で、ものともせずに受け止める。

「……ふむ。聖人か。なるほど、先ほどの言は訂正しよう。君は多少我の力に喰らいつく事は可能だ」

言葉の続きを聞く気は無い。水が空中に浮かび、先ほどと同じ様に、ウイリアムが攻撃を仕掛けたのだ。

だが、意味がない。水は悪魔を避けた。

「？」

疑問が頭をよぎる。水による攻撃が効かない。相手は悪魔で、水による攻撃が効かない。その上、元になる実力も半端では無いと来れば、特定は容易い。

「……リヴァイアサンよ」

ウイリアムが検討を付け始めた時、アツクアが隣でそう言った。

傷はまだ残つており、動く事もままならない。

リヴァイアサン。海の大悪魔とも呼ばれ、ルシファーの側近のひとりで、“嫉妬”をつかさどり、海軍の大提督を務めると言われている。

身体は非常に巨大で、伝承では五キロメートルから十キロメートルほどの体を持っていたと伝えられる。

神に作られた史上最強の生物。大海の其処に眠り、ひとたび起きては大嵐を起こして甚大なる被害を『<sup>つかさど</sup>』えると言つ、天災と呼ぶべき生物。

『もつとも深い地獄にそびえ、天のアーチに達する一本の柱』のひとつであり、騎りのすべてを司るともされている存在。

地獄の第三位。地獄の海軍提督と言われ、実力は悪魔の中でも上位に位置する。

なるほど、水の海獣とされるリヴァイアサンならば、水に対する操作の優先権が存在してもおかしくない。

天使が中途半端に具現した時は、水の魔術が使えなくなる。同様に、悪魔が具現した為に水の魔術が中途半端にしか使えなくなつてるのである。

悪魔学の魔術ならいざ知らず、基本的に神を信じる宗教の魔術を扱う以上、悪魔が操作できるのが一定範囲と言うのも頷けることだ。

ならば、魔術に頼らず戦えば良い。

「いくぞ、悪魔」

動く。聖人の圧倒的な速度による近接戦闘。遠距離からの魔術攻撃が出来ない以上、方法は近接戦による攻撃しか無い。

だが、

「甘い。甘いなあ、人間。甘過ぎて反吐が出るな」

速い。余りにも速い動きで、悪魔はウイリアムの速度を上回った。

史上最強の生物の名は伊達では無い。その能力差は、RPGにおける異常なまでのレベル差とも言えるだらう。その差は、正に圧倒的としか比喩のしようがない。

「そもそも、人間が我ら悪魔を超えようとする」と自体が間違いだと分からんかな」

大天使と真正面から戦闘さえ出来る。悪魔の大幹部の力は、それほどまでに圧倒的だ。

大木の様な腕を振りまわし、ウィリアムを弾き飛ばす。咄嗟にメイスで庇つたおかげでダメージは比較的軽い方だが、それでもダメージである事に変わりは無い。

近くにいたアックアが水の魔術を使使して攻撃をかける。田ぐらましにでもなれば、と思っての事だ。

だが、今度はそれを避けた。速度で圧倒する悪魔は、アックアの

体躯をモノともせずに弾き飛ばし、数メートルをノーバウンドで飛び。力無く地面に倒れ込み、起き上がる事は無い。

死んだか、気絶したか。どちらにしても体は動かないだろう。あれほどの衝撃を直に受けて、体が未だ残っていると言うのも驚きなのだから。

悪魔との相性が悪過ぎる。得意とする水の魔術は封じられ、近接戦闘では上回れない。これでどう勝てと言つのだ。

だが、無理でもやらねばならない。そう考え、立ち上がり敵を見据えた時

「炎よ」  
Kenez

ウイリアムにとつて一番の予想外が起きた。

「エメト」  
emet

アスナとルーシーが、結界から出てきたのだ。

両手に構えたルーン文字のカード。防水等を施した特別性で、惜しげも無く術を発動させる。

「 世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。煉獄の火、大罪を浄化する火よ。我が手に宿りて力と成せ 」

爆炎が凝縮される。辺り一帯を焼き尽くさんとする炎が、圧縮され、一点に集中して悪魔を狙つた。

その火を見た瞬間、悪魔は始めて防御に移つた。

水を操作し、壁としてその火にぶつける。膨大な水と圧縮された炎はぶつかり、蒸発した。

壁としての役割を果たさせる事で炎の威力を減衰させ、ダメージを軽減させようとしたのだ。

「 原書は土。神は土より形を創り、命を吹き込み、それに人と名前を付けた」

地面に文様を描いているのは、ルーシー。

「 その秘法は墮天によつて人に伝えられた。しかしその秘法は人の手で成せるものに在らず。墮天によつて口伝出来るものに在らず」

地面に描かれていく文様は幾何学的であり、人に理解できるものではない。

「 かくして人は出来そこないの命を作り出した。呼ばれるは泥の人形、命持たざる隸属のモノ……さあ、行きなさい。ゴーレム達よ」

最後に手を叩き、音を響かせる。途端に地面は動き出し、いくつもの人間大のゴーレム達が現れる。

水の壁をモノともせず、突き進むゴーレム達。悪魔にとつてこれは特段強いモノでも無いと判断したのか、その大きな腕で薙ぎ掃う。

途端に土に帰り、動きを阻害するように悪魔に土が絡みつく。

「Repeat」  
繰り返す

アスナの続く一言で、悪魔は状況を悟る。

もう一度放たれた強靭な一撃。絡みついた土<sup>ほとばし</sup>と焼き<sup>くべく</sup>せんと  
入り、悪魔を攻撃した。

「 素晴らしい。素晴らしいな、君達は」

だが、無傷。焼け焦げた服の下にある鱗を見ると、煤<sup>こ</sup>そ付いて  
いるが、傷など見当たらない。

「その年でこの熟練だ。我も驚きを隠しきれんよ。将来が楽しみだ」

豪快に笑い、辺りに飛び散っている水を再度集める。

ウィリアムもまた、この状況に驚いている。まさか結界の中にいた子供たちが、ここまで魔術を使いこなすとは考えていなかつたのだ。

自分も負けていられない、メイスを構えて動こうとした時。

「 動かないで」

アキラが治癒魔術を行使していた。相手に水の魔術が効かないのなら、自分の出番は無い。そう判断して、治療をする事にしたのだ。

念の為、と言つ事で、フィアンマから天草式の治癒魔術を教えて貰つて居る。今はまだあまり出来は良くないが、多少傷を癒す程度の力はあるだろつ。

「……君達は、一体……」

「 気になるか、傭兵？」

突如聞こえた声に、身構えるウイリアム。

「 フィアンマさん!」

「 アキラ、遅くなつて悪かつたな。少し手間取つた」

悠々と一歩を踏み出す。視界の先には時間稼ぎの為に戦うアスナとルーシー。

実力差があつたとしても、ある程度のレベルまでは時間稼ぎ位出来る様に育てているのだ。そう簡単にやられる筈も無く。

土で足を封じられ、炎で視界と操る水を焼失させられていクリヴァイアサン。本気ならば一瞬で薙ぎ掃つことも可能なだろつ。それをしないのは、ひとえに遊んでいるから、としか言つようがない。

遊ばれている。だが、その所為でやられ。典型的な悪役のパターンだな、と小さく呟く。

どの道、ファイアンマが戦つなら負けは無い。大天使と同格だろうと、それを上回るファイアンマに勝てる道理がない。

「 遅いよ、お父様」

娘一人から叱責され、苦笑するファイアンマ。悪魔はファイアンマの前に立ち、ファイアンマも悪魔の前に立った。

「 ……お前が、こいつ等と戦つたのか？」

アックアの方を見た。ボロボロにせりられ、治療をしなければ一刻を争うような状態だ。

「 さうなる。我がやつた事だよ、これは。……お前は誰だ？ あの子たちの親、か？」

「 さうなる。俺様はファイアンマだ。覚えておくんだな、地獄の海軍提督」

冥府と言つても、天国や地獄、宗教によつていろいろと違う。いろんな宗教の魔術を混ぜた所為で、こんな化け物まで姿を現した。

「 」の程度の後始末なら、訳は無い。

「 我の娘は、ヴァイアサン……いや、知つてゐるだらうから乗るまでも無いな。覚えておくよ、ファイアンマ。お前は全力を出させてくれるか？」

「ハツ、俺様と相対しておいて、全力を出さない氣か？ 失笑モノ  
だぞ、それは」

「ほう、言ひじやないか。ならばやつてやひつではないか」

瞬間、視界から悪魔が消えた。聖人でさえ反応しきれない、圧倒的な速度。

それを

「甘いな。俺様相手に速度など意味があると思つていいのか？」

殴り飛ばした。否、正確に言えば吹き飛ばした。

聖なる右の力で、避ける事も出来ずに数百メートルと言ひ距離をノーバウンドで吹き飛ぶ。間の木々を薙ぎ倒しながら、だ。

実力など関係無い。破壊力・速度・硬度・知能・筋力・間合い・人数・得物等、全く持つて意味がない。

ただ、振れば終わる。それだけだ。

歪な右腕を現しつつ、恐らくは還つたであろう悪魔を見据える。手応えからしても、やつた筈だ。

しかし、妙な感覚だ。とフイアンマは思つ。何か引っかかりを覚えると言えばそれまでだが、ともかく今はアックアの回収と自体の収集をしなければならない。

「……さて、所でお前は誰だ？」

「私の名はウイリアム＝オルウェルである。聖人だ」

「なるほど、聖人か……」

アックアは恐らく、もう復帰は出来ないだろう。見ただけで分かる。アレは内臓や筋肉がズタズタにやられている。戦闘はもう出来る体じや無い。

戦闘が出来るかできないかで決まる訳ではないが、少なくともアーツはもう歳だった。引退をせんべきか、と考える。

取りあえず生きているようだから一先ず治療し、横にして寝せる。そして、ウイリアムを見る。原作は今でも覚えてい。記憶力がいいのは良い事だ。

「……ウイリアム＝オルウェル。一先ず礼を言おう。俺様の娘達を守ってくれてたみたいだしな」

「いや、そんな事は無い。……だが、彼女達の魔術師としての腕に驚いたものである。凄まじいな、あの子たちは」

「俺様の娘一人と知り合いの子だ。そちらの未熟な魔術師よりも、余程卓越した知識と技術を兼ね備えさせている」

「なるほど、それは納得できるな」

一度頷き、アスナ達の方を見る。フィアンマからすれば、ウイリ

アムの実力はまだ未知数の筈なのだが。

「よし、お前ウチの組織には入れ。異議は認めん」

「何？ 私は傭兵として世界を回っている。ビニカの組織に属する気は無いのである」

「異議は認めんと言つた筈だ。組織としての立場があれば動き辛くなる時もあるが、利用するのも一つの手だぞ？」

「しかし……」

「しかしでは無い。傭兵なのだろう？ なら、ビニカの組織にも屬していない筈だ。良いから入れ」

強引に組織に入れようとするフィアンマ。ウイリアムも段々と相手をするのが面倒になってきたのか、役職を聞いた。

「俺様の属する組織は『黒の教団』の最暗部『神の右席』だ。あそこへ倒れてる女も一応ウチの組織の一員なのがな、みての通りもう歳だ。お前が跡が魔になれ。引き継ぎはさつさと済ませてやるから」

次代の後方を探すのが面倒、という理由もある。才能の有無や魔術師としてのレベル。それらが揃つてこそ『神の右席』の一員として認められる。

ウイリアムはそれを全て揃えている為、丁度いい人材なのだ。聖人もあるし。

「……ハア、引く気は無いのであるな」

「当たり前だらう。お前ほどの人材は世界広しと言えども少いらしいのだ」

「……良いだらう。このウイリアム＝オルウェル。『神の右席』に入らせていただく」

「許可する。お前は明日から『後方のアックア』を名乗れ……いや待て、まだ引き継ぎが終わって無い。それ次第だな」

フイアンマは不敵に笑いながら、そう告げた。

## 第一十一話 到来野（ヒリュウシホン）（後書き）

若干無理矢理な気がしないでも無い。でもどうせウェイリアムさんは神の右席に入らせる予定でしたし、問題ねーかな、と。

次回はキンクリの予定。後は事後報告ですし、数年たつた、あれは～という流れで良いかな、と。  
感想があればお待ちします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4821u/>

---

とある右方の異世界目録

2011年11月26日16時53分発行